

2021 年度文部科学省事業
「障害者の多様な学習活動を
総合的に支援するための実践研究」

「障害者の生涯学習に向けたウェブ利用の展開と
重度障がい者向けの学習支援」事業の成果報告書

一般社団法人みんなの大学校



目次

はじめに-全体像について

- 1 各活動の項目
 - 1-1 ウェブでつながる要支援者への学び
 - 1-2 オープンキャンパス（ハイブリッド型）計2回
 - 1-3 重度障がい者への学習支援
 - 1-4 第2回医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム
- 2 活動の目的及び概要
- 3 得られた成果・課題
- 4 事業の実施結果
 - 4-1 効果的な学習プログラムの実施経過
 - 4-2 具体的な内容
 - 4-2-1 障害者向けのウェブでの講義の提供
 - 4-2-2 受講者の感想
 - 4-3-1 オープンキャンパス
 - 4-3-2 参加者の感想
 - 4-4-1 重度障害者向けの訪問講義の実施
 - 4-4-2 岩村和斗さん
 - 4-4-3 松本勇成さん
 - 4-4-4 今後に向けて
 - 4-5-1 重度障害者向けのフォーラムの開催
 - 4-5-2 アンケート回答
- 5 連携協議会
 - 5-1 連携協議会の実施体制
 - 5-2 具体的な研究内容
- 6 コーディネーター
 - 6-1 コーディネーターの在り方
 - 6-2 具体的な活動
- 7 成果等の普及
 - 7-1 実施経過
 - 7-2 具体的な内容
- 8 共生社会コンファレンス関東甲信越の開催
 - 8-1 実施経過
 - 8-2 具体的な内容
 - 8-3 実施内容
 - 8-4 アンケート

9 本実践研究事業の成果・効果

- 9-1 事業の実施成果／アウトプット目標
- 9-2 目標と方向性
- 9-3 中長期的に得たい成果／アウトカム目標
- 9-4 本委託事業実施により得られた成果の活用

はじめに-全体像について

本事業は2021年度文部科学省事業「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」に企画提案をした「障害者の生涯学習に向けたウェブ利用の展開と重度障がい者向けの学習支援」が採択され実施した事業である。一般社団法人みんなの大学校が東京都の国分寺市教育委員会の協力を得て実施したもので、本事業は連携協議会の検討と協議をもとに一般社団法人みんなの大学校の引地達也学長がコーディネーターとなり、みんなの大学校が事務局として推進した。

必要な専門分野や地域のネットワークとして下記の全体像にある各機関との連携を基本とし、各機関にはそれぞれの領域から適切な助言を得ながら事業を遂行した。上記の各領域の中には連携協議会委員としての役割も兼ねている場合が多く、綿密なコミュニケーションにより事業を進めることを可能にした。

具体的にはウェブ講義においては発達支援研究所の山本登志哉所長に30回の講義を担当してもらい、当事者代表としての委員、水越真哉さんはウェブ講義をはじめすべてのプログラムを「参加者」「当事者」の視点で考察してもらった。

さらに国分寺市教育委員会、国分寺市福祉部が運営に関わったことでオープンキャンパスや共生社会コンファレンスでは会場の提供だけではなく、ボランティアへの呼びかけや地域の青年学級である「くぬぎ学級」への呼びかけなど多岐にわたる連携が可能になった。

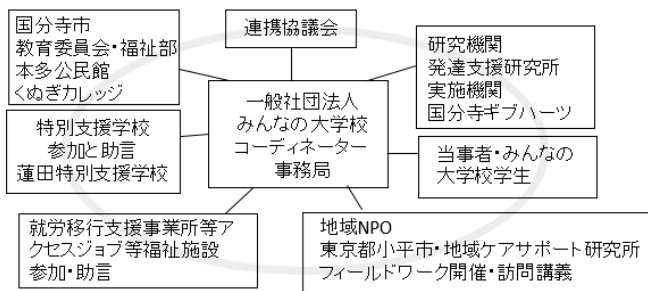
重度障がい者の訪問学習や重度障がい者に関するフォーラム開催では、みんなの大学校よりも先駆けてこの分野で活動するNPO法人地域ケアサポート

研究所の知見も大きく、病棟学生を持つ埼玉県の蓮田特別支援学校との連携もこの分野での取組みをよりの確に行うことに役立った。

障がい者の「学び」という視点では福祉サービスとの連携が近年、指摘されているが、その取組を支援者の視点から考え動き、利用者の受益に結びつけるために、就労移行支援事業所アクセスジョブの協力のもとで福祉サービスへの周知活動が行えたことは、福祉サービスへの指南のきっかけになったと考えている。

これらのネットワークを礎に障害者の学びに向けての具体的な実践事業を効果的に行えたと考えている。詳細については本報告書で確認していただきたい。

■運営体制の全体像



1 各活動の項目

1-1 ウェブでつながる要支援者への学び

「高等」教育をウェブ上で同時間性を確保して行うことで、障害者で気軽に学びができる、学び始められる枠組みを提供した。福祉事業所でもモチベーションが上がらない方の、社会移行に向けてのきっかけとしても一部機能した。

・プログラムの基本：50分講義で双方向性を基本とし、前期後期で15回ずつを行う。

・全体像：前期6タイトル全65講義、後期7タイトル全85講義、合計145講義を実施

・延べ受講者数：1000人程度（ズーム画面のオフにより画面上で複数が見ている場合の人数把握が難しいことから概算）

本学びを福祉サービス事業者にも普及させるため

連携協議会委員でもある就労移行支援事業所アクセスジョブでも導入し、スタッフ啓蒙のために支援における学びについて各事業所に研修を行った。

・講師と講義タイトル

【前期5月～9月】

テーマ	担当	肩書など
ディスコミュ ニケーション	山本登志哉	発達支援研究所 所長
メディア論Ⅰ	引地達也	みんなの大学校 学長
国際理解	アルン・デソー ザ カーステン・フ アレル ムリドゥール・ カンティ・バル アほか	上智短期大学非 常勤講師 オーストラリア 国立大学 みんなの大学校
けいざいとく らしⅠ	内村治	国際会計士
ITの開発（ド ローン）	西村啓太郎	グラノラジャニ ー代表取締役
ことばのせか い	引地達也	みんなの大学校 学長

【後期10月～2月】

テーマ	担当	肩書など
こころのしく み	山本登志哉	発達支援研究所 所長
メディア論Ⅱ コミュニケー ション	引地達也	みんなの大学校 学長
対話と社会	引地達也 アルン・デソー ザ 千葉あい 遠藤昭博 舟木宏直	みんなの大学校 上智短期大学非 常勤講師 Jリーグジェフ 千葉サポーター 株のディーラー 鍼灸師講師

	ほか	
けいざいとく らしⅡ	内村治	国際会計士
ITの開発（3 Dプリンタ ー）	池田久男、門口 和義ほか	MKラボメンバー
プレゼンター ション	西田尚司	禅の達人

1-2 オープンキャンパス（ハイブリッド型）計2回

国分寺市の本多公民館と西宮市の公民館をズームでつないで共同で講義を実施し、それぞれの地域の観光協会の協力を得て観光名所や特産品をクイズにするなど相互理解とコミュニケーションを基本としてプログラムを行った。第1回目はお互いを知る講義として観光名所クイズとジェスチャーゲームを中心に行った。第2回目は「音楽でコミュニケーション」と題して、ピアノコーラスグループ、サームの2人のメンバーを講師として音楽に関するゲームやクイズ、遠隔を結んでの合奏を行った。

第1回 クイズとボ ードゲーム	国分寺市：引地 達也、国分寺市 観光協会 西宮市：河辺朋 久、西宮市観光 協会	内容： 国分寺市のご当 地クイズ 西宮市のご当地 クイズ ジェスチャーゲ ーム「ばくも ぐ」
第2回 音楽でコミュ ニケーション	国分寺市：引地 達也、サーム （濱野崇・笹木 健吾） 西宮市：河辺朋 久、西宮市観光 協会	内容： 国分寺市のご当 地クイズ 西宮市のご当地 クイズ 音楽演奏、合 奏、音楽ゲーム

1-3 重度障がい者への学習支援

医療機関や自宅で医療的ケアを受けている人のう

ちで「学び」を希望する学生2人に対し、訪問で・講義を実施した。コロナ禍により新規で学生を募集することが難しく、昨年に引き続き2名の学生の要望に応えながら「学び」を実践した。

学生	居住地	担当者	テーマ・回数
松本 勇成	埼玉県 川越市	引地達也、鈴 木美恵、内田 崇祥 サポート：熊 谷瞳	テーマ：創作活 動、交流、こと ばを感じる 回数：20回
岩村 和斗	杉並区	引地達也、山 本登志哉	テーマ：ディス コミュニケーション、世界を知 る 回数：30回

1-4 第2回医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム

昨年の第1回に引き続き全国の重度障害者の学習に関する団体を集めてのフォーラムは東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターをメイン会場にハイブリットで開催した。東京都小平市のNPO法人地域ケアさぽーと研究所と共催し、会場参加者が35名、オンラインが182名だった。

フォーラム概要

第2回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム

日時：令和3年11月29日（金）午前11時～午後3時30分

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター棟102室

主催：一般財団法人みんなの大学校、重度障害者・生涯学習ネットワーク

目的：

①国の障がい者の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。

②学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。

③学校卒業後の訪問型生涯学習の制度化に向けた発信を行う。

参加費：無料

オンライン参加者：182名 会場参加者：35名

2 活動の目的及び概要

発達障害・知的障害・精神障害のために「学びにおいて支援が必要な方々」、さらに私立や公立の特別支援学校在校生及び卒業生、現在就労移行支援事業所等の各通所型、入所型の福祉施設に通所する学びを求める方等、引きこもりの状態にあり社会へ出るきっかけをつかめないでいる方々を対象に、これらの方々が生涯の「学び」の確実性を確保するため、また社会での生きがいややりがいを考えられる素地を育成するために、新型コロナ禍によって社会に広まったリモートでつながることをベースにウェブで学びを提供し、オンラインとオフラインを組み合わせた学びを、それぞれの障害がある方々と支援者、そして一般の方々が、ともに関わりあい、学びの面白さを気付いていただくとともに、社会で活躍できるステージをイメージすることを目的に、その内容の妥当性を広く一般への普及や継続した学びの有効性を観点とし検討・開発していくのを目的とした。

さらにこの学びは医療ケアの必要な方々にも対応し、同時に直接会ってその内容をカバーする「訪問講義」を実施。18歳以降で医療ケアの必要な方々への学びのニーズやその学びの在り方も引き続き研究し、各地のニーズに応えるための枠組み作りとして、昨年第一回目を開催したネットワーク化に向けたフォーラムも開催した。

ウェブで行う学びには「講義型」「対話型」「交流型」に分けて、障害特性やニーズに適合した形を提供できるような複数の科目を用意し毎週1回のプログラム提供に生活のリズムを合わせるような枠組みとし、以下3つのパターンを意識してカリキュラムづくりを行った。

・講義型 知識と共用を講義者がわかりやすく解説するスタイル

・対話型 講義者と学習者が対話をしながら学習するスタイル

・交流型 ファシリテーターが中心になって学習者と支援者、市民の参加者が交わり学び合うスタイル
また本事業は、2018年度-2020年度までオープンキャンパスを実践し市民と障害者の学びの場を構築してきた知見から、上記の交流型としてオフラインでの開催(ハイブリット型)も実施し対面型の交流による学びも実践した。

本研究では様々な知見を持つ方々で構成される連携協議会で活発に議論・検討していただきながらコーディネーターを中心とした研究チームが、当事者の声を反映することが最も大切だと考え、当事者との面談や支援者への周知活動も進めた。特に一般社団法人みんなの大学校が運営する就労移行支援事業所みんなの大学校西宮校、就労継続支援B型事業所みんなの大学校大田校、就労移行支援事業所アクセスジョブ、一般財団法人発達支援研究所、NPO法人見晴台学園大学、KINGOカレッジをはじめとする共同研究機関の協力を得ながら、拠点のある東京都国分寺市とは綿密な協力関係を基本として本研究を進めることになった。さらに障害者の学びの可能性を広く世の中に伝えるために、メールマガジン「メルマガ」、ニュース解説サイト「ニュース屋台村」等のメディアにて本取組を紹介し、1年間で延べ1万人以上へのアウトリーチを行った。

これらの研究開発の結果として、より社会に広く学びを浸透させるために展開可能なプログラムを、授業の内容、コーディネーターの役割、連携の在り方の妥当性を示したうえで提示するが、以下の計画を今後も遂行していく。

3 得られた成果・課題

本事業後は以下の展開を思考し一部はすでに計画立案し2022年度に実施に向けて動き始めている。

(1) ウェブ講義

→日常的に講義を受けるには1日で複数のプログラムを設定するについていけない状況も予想できるた

め、1日1-2つの50分プログラムを行うのが最適である。講義は知的障がい、精神障がい、発達障がいに応じた視点でのカリキュラムも必要である。

(2) オープンキャンパス

→市民と障がい者が学び合うことを基本としたプログラム設定が必須であり、グループワークを組み合わせ、混ざり合う内容を意識して講義を設定することが有効である。

(3) 重度障がい者への講義

→福祉事業との連携、訪問サービスとの情報共有と役割分担を確認し、どこでも重度障害者が学べる環境を提示できる基本を確認した。

(4) 重度障がい児者の生涯学習を支援するフォーラム

→さまざまなアプローチでの事例発表とフォーラム内での交流の活発化はネットワークの構築に大きく役立った。前回に通じて2回目のフォーラムにより、今後の基礎となる枠組みを確認し、来期からは当事者団体中心でフォーラムをより有効な機能を考えることになった。

4 事業の実施結果

4-1 効果的な学習プログラムの実施経過

4月

ウェブによる講義・訪問講義・連携協議会委員への打診と承諾

5月

文科省と契約完了

ウェブによる講義・訪問講義スタート(週4回実施)

20日 国分寺市教育委員会とオープンキャンパスに向けて打合せ

31日 就労移行支援事業所向けに「学び」の啓もう講義スタート

6月

ウェブによる講義・訪問講義(週4回実施)

23日 本多公民館打合せ

25日 第1回連携協議会

7月

ウェブによる講義・訪問講義(週4回実施)

1日 本多公民館で共生社会コンファレンス準備会合

11日 西宮市教育委員会及び青年学級と協議

28日 本多公民館で共生社会コンファレンス準備会合

8月

ウェブによる講義・訪問講義(週1回実施)

オープンキャンパスの広報及び参加者募集開始

9月

3日 第1回実践団体ズーム交流会

4日 西宮市のさくら FM に出演しオープンキャンパス告知

17日 オープンキャンパスリハーサル(国分寺市・西宮市)

25日 第1回オープンキャンパス開催(国分寺市・西宮市)

30日 共生社会カンファレンス関東甲信越第1回実行委員会

10月

ウェブによる講義・訪問講義(週4回実施)

21日 オープンキャンパスリハーサル(国分寺市・西宮市)

29日 重度障害者学習支援フォーラム(東京都渋谷区)

・第二回連携協議会

11月

ウェブによる講義・訪問講義(週4回実施)

3日 第2回オープンキャンパス開催(国分寺市・西宮市)

9日 第2回実践団体ズーム交流会

12日 共生社会カンファレンス関東甲信越第2回実行委員会

29日 第2回連携協議会

12月

ウェブによる講義・訪問講義(週4回実施)

共生社会カンファレンスのチラシ及びプログラム作成

- 17日 第2回実践団体ズーム交流会
1月
ウェブによる講義・訪問講義（週4回実施）
共生社会カンファレンスの参加者募集開始
2月
ウェブによる講義・訪問講義（週1回実施）
9日 共生社会コンファレンス関東甲信越第3回実行委員会
14日 第4回実践団体ズーム交流会
21日 共生社会コンファレンス・当事者の声及びバンド演奏リハーサル
25日 共生社会コンファレンス前日リハーサル・会場設営
26日 共生社会カンファレンス関東甲信越実施
3月
2日 最終報告会及び第3回連携協議会
9日 最終報告書提出

4-2 具体的な内容

本件は以下4項目で行われた。

- 1 障害者に向けてのウェブでの講義の提供
- 2 オフラインの交流の学びとしてオープンキャンパス及びレクレーションの実施
- 3 重度障害者向けの訪問講義の実施（レクレーションの実施）
- 4 重度障害者向けのフォーラムの開催

4-2-1 障害者向けのウェブでの講義の提供

本講義はウェブ会議システム、ズームを使って行うウェブ講義である。みんなの大学校では、前身のシャローム大学校でコロナ禍の前の2019年からウェブを使った障害者向けの講義を行ってきており、その模様は2019年度の日本LD学会、全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会でも発表してきた。この知見を基本にコロナ禍による新しい生活様式に対応する障害者の学びを確立するために、みんなの大学校は2020年10月からウェブでの取組みを始めており、この経験を基本にしながら2021年春から、前期と後

期の2期に分けて1講座あたり全30回で講座を展開し、その内容や枠組みの妥当性を検討した。

講師は高等教育ができる専門領域を持つ方をお願いし、新しい学びのスタンス等の検証を念頭に講義をお願いした。講義の内容により、講義スタイルを「講義型」「対話型」「交流型」に分けて、障害特性やニーズに適合した形を提供できるような工夫した。

3つの型とは以下である。

- ・講義型 知識と共用を講義者がわかりやすく解説するスタイル
- ・対話型 講義者と学習者が対話をしながら学習するスタイル
- ・交流型 ファシリテーターが中心になって学習者と支援者、市民の参加者が交わり学び合うスタイル

これらの型と自分の学びのマッチングをはかりながら、教養科目として以下のテーマを設定。各講師は、IT技術の西村氏、プレゼンテーションの西田氏以外は、これまでも障害者向けの講義を担当するなどの経験があり、これまでの知見をもとに年間を通じて受講者とともに「学び合う」スタイルを思考し展開した。さらに展開する上でのポイントとして以下を重要視した。

- ・「高等」教育をウェブ上で同時間性を確保して実施
- ・障害者で気軽に学びができる、学び始められる枠組みを提供
- ・福祉事業所の社会移行のきっかけとしても一部機能

プログラムの基本としては50分講義で双方性を基本とし、前期後期で15回ずつとし、年間を通じた参加者及び講座数は以下であった。

全体像：前期6タイトル全65講義、後期7タイトル全85講義＝合計145講義を実施

延べ受講者数：1000人程度（ズーム画面をオフにしていたり、画面上で複数が見ている場合の人数把握が難しいことから概算）

毎週同じ時間を基本にし、前期後期ともに月曜日から金曜日の間で講義を実施。講義はズームを利用して行い、受講者には毎週木曜日に次週の講義予定

とズーム URL をメールでお知らせし、そのお知らせの中で講義の内容や課題なども連絡した。

講義には事務局が開講 5 分前からオープンにして受講者の入室を許可する形をとり、終了時は講師の終了とともに閉室することにしたが、講師によっては講義後も受講者とともにお話をするケースもみられた。講義はすべて録画することにし問題ないものについてはアーカイブで残すことにした。

【講師とテーマ（前期 15 回後期 15 回）各 50 分】

前期（5 月－9 月）

テーマ	担当	スタイル
ディスココミュニケーション	山本登志哉	講義・対話
国際理解	引地達也ほか	講義・対話・交流
メディア論Ⅰ	引地達也	講義・対話・交流
けいざいとくらしⅠ	内村治	講義
IT の開発	西村啓太郎	講義（ドローン操作のプログラミング有）
ゼミナール	引地達也	・対話・相談

後期（10 月－3 月）

テーマ	担当	スタイル
こころのしくみ	山本登志哉	講義・対話
対話と社会	引地達也ほか	講義・対話・交流
メディア論Ⅱ	引地達也	講義・対話・交流
けいざいとくらしⅡ	内村治	講義
IT の開発	池田久男、門口美千代ほか	講義（3D プリンターの設計）
プレゼンテーション	西田尚司	講義・対話

ゼミナール	引地達也	対話・相談
-------	------	-------

【講義報告】前期

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
ディスココミュニケーション論		4	山本登志哉
授業概要			
人は人を完全に理解することは不可能です。けれども自分なりの理解でやりとりはできます。そのやりとりも比較的スムーズに進むときと、違和感の連続になるとき、さらには激しい対立になるときもあります。何がそのような対立的なやりとりを生むのでしょうか。この問題をここではそれぞれの人がコミュニケーションに込める意味や構えのズレ、あるいはディスココミュニケーションという観点から色々な領域の具体例を交えつつ考えていきました。（参考図書：山本・高木 2011「ディスココミュニケーションの心理学」東大出版会）			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・人のコミュニケーションの基本的な形（EMS）を理解する ・具体的な場面でのディスココミュニケーションの展開を見る ・理解しきれないが関係を絶てない異質なもの（異己）同士が共生する道を考える 			
授業方法			
毎回テーマを設定し、最初にそれについて説明した後、皆さんの経験や意見を聞きながら、理解を深めていきました。			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%			
教科書・教材・参考文献 等			
パワーポイント提示。必要なものは授業前日までにデータで送付			
質問への対応			
歓迎します。			
授業経過（授業日程に若干の変更）			
項 目		内 容	
1	5・12	ディスココミュニケーション	すべてのコミュニケーションはディスココミュニケーションである、という基本的な視点について説明
2	5・19	映画から見る文化差 1	張芸謀監督「あの子を探して」を見ました（参考図書：「アジア映画をアジアの人々と愉しむ」北大路出版）
3	5・26	映画から見る文化差 2	「あの子を探して」の続きと感想の交流をしました

4	6・2	映画から見る文化差3	映画に現れた感じ方、考え方のズレを検討しました
5	6・9	お小遣い研究と文化差1	お小遣い研究について、「おごり」の問題を中心に紹介しました（参考図書：「子どもとお金」東大出版会）
6	6・16	お小遣い研究と文化差2	お小遣いやお金についての考え方を交流し、その意味を考えました
7	6・23	お小遣い研究と文化差3	「おごり」などの考え方の差に表れる、人間関係の考え方の文化的な違いについて検討しました
8	6・30	定型発達者と発達障がい者1	自閉系の人とのコミュニケーションスタイルを考えました（参考資料：はつけんラボ「所長ブログ」の関連記事）
9	7・7	定型発達者と発達障がい者2	自閉系と定型系でなにがどうずれるのかを考えました
10	7・14	定型発達者と発達障がい者3	自閉系と定型系のずれがなぜ生まれるのかを考えました
11	7・21	裁判官と心理学者1	供述の解釈をめぐる裁判官と心理学者のディスコミュニケーションから生まれる冤罪を紹介しました（参考図書：「生み出された物語」北大路書房）
12	7・28	裁判官と心理学者2	ディスコミュニケーション論から考える裁判官と心理学者の対話的相互理解の可能性について検討しました
13	8・4	コミュニケーションの基本構造	規範的要素に媒介された、対象を媒介するやりとりの構造としてコミュニケーションをとらえるEMSについて説明しました（参考図書：「文化とは何か、どこにあるのか」新曜社）
14	8・18	逆SST	定型発達者と発達障がい者間の対話的相互理解と、それに基づく「当事者の視点を踏まえた支援」を考えるために開発された「逆SST」を説明しました

15	8・25	「私」のディスコミュニケーション	受講生が感じるディスコミュニケーションについてみんなで考えました
総括コメント			
さまざまな素材を使い、自分とは全く異なる見方、感じ方をする相手とどうコミュニケーションが可能になるかを考える授業を進めたが、受講生の中にはそもそも「異なる考え方を理解する」ということ自体に拒否的な方もあって、むつかしくもあり、またそのこと自体が興味深くもあった。全体としてはさまざまな見方の存在についての視点が少しずつ深まっていた印象があり、引き続き後期の「こころのしくみ」にうまくつながる展開となったと思えた。また重度身体障がいでもテキストデータでの短いやりとり以上にはコミュニケーションができない受講生とのやりとりは、その中でだんだんと思考が「進歩」されていく姿を感じてとてもうれしく、また楽しかった。			

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
国際理解	半年	2	各担当講師
授業概要			
国際理解に向けてそれぞれの国に関する文化等をそれぞれの国の方に語ってもらいながら、生の外国文化について理解する。			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> 外国人の視点で語られる外国の文化の理解を進める 外国人との対話により外国文化を身近に感じてもらう 			
授業方法			
1人の講師が3週間にわたり講義を担当する。講師はアルン・デソーザ教授等、日本以外の出身者が行う。			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%（取りまとめ引地達也教授）			
教科書・教材・参考文献 等			
各講師がそれぞれ対応			
質問への対応			
授業中にも可			
授業経過（授業日程に若干の変更）			
項 目		内 容	
1	4・26	オリエンテーション	担当講師：引地達也 受講者の自己紹介。日本から見た外国を考えました。
2	5.10	世界の国旗を知る	担当講師：引地達也 世界の国旗から世界の文化や国家の成り立ちなどクイズを交えて講義（引地達也）

3	5.17	バングラデシュの文化	講師：ムルドゥール・カンティ・バルア氏（みんなの大学校） バングラデシュの国や文化について講義
4	5.24	バングラデシュの文化2	担当講師：引地達也 前週の学習のおさらいとしてバングラデシュと日本の関係について解説しました
5	6.7	インドの文化1	講師：アルン・デソーザ教授 インドの国、文化、宗教、地理について学びました
6	6.14	インドの文化2	講師：アルン・デソーザ教授 インドの国、文化、宗教、地理について学びました
7	6.21	インドの文化3	講師：引地達也 インドについての学習を振り返り、日本人としてインドとの違いで面白かったことを共有しました
8	6.28	オーストラリアの文化1	講師：引地達也 カースティン・ファレル氏（オーストラリア国立大学スタッフ）の講義の予定が先方のトラブルにより急遽、引地氏が在住経験のあるオーストラリアについての国や自然、文化について解説しました。
9	7.5	オーストラリアの文化2	講師：カースティン・ファレル氏（オーストラリア国立大学スタッフ） カースティン先生が住むキャンベラから先生がオーストラリアに関するクイズ等を行いました。
10	7.12	中国の文化	講師：引地達也 中国の古代を振り返り、近代化におけるコミュニケーションの歴史を講義しました。
11	7.26	韓国の文化	講師：申さん（立教大学大学院） 韓国の若者や大衆文化に焦点を当てて、韓国での流行などを中心にお話してもらいました
12	8.2	みんなで質問	講師：引地達也 これまでの授業で疑問に思ったことをまとめてディスカッションしました

13	8.9	国際協力について	講師：引地達也 貧困の差など国際社会で起こっている問題を取り上げ、国際協力についての基本的な状況と、参加者の意見からディスカッションを行いました
14	8.23	英語と日本語	講師：佐光紀子（翻訳家） 英語の専門家から英語という言語の特殊性と日本人と米国人との行動の違いなどを解説してもらいました。
15	8.30	まとめ	講師：引地達也 これまでの講義で印象に残っているところを出してもらいディスカッションをしてまとめました
履修者へのコメント			
日本には多くの外国人が住み、様々な外国の文化も日本の文化と交じり合ってきています。その様々な文化を知るよききっかけになればと思い、実践した講義には結局、5か国から5人の先生をお招きして多彩な講義をすることが出来ました。どの先生も学生へのケアの視点を忘れず対応してくださり、母国に面白いものがたくさんあることを知ってもらった。			

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
3 者遠隔講義/演習Ⅰ Ⅱ/メディア論	1年	4	引地達也
授業概要			
名古屋と東京と新潟の3か所を同時にインターネットで結んでコミュニケーション授業を行う。インターネットを使った双方向性の授業のやり方を学びながら「メディアでつなぐ世界 世界を知る、体験する、味わう」をテーマにメディアと国際社会への理解を深めた。			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットを使って映像と音声で結ばれるコミュニケーション方法を理解し正しく利用する ・インターネット上のコミュニケーションのルールやマナーを会得する ・メディアコミュニケーションの可能性から世界を知る ・クイズやゲームを通じて仲間とのコンセンサスの手法を学ぶ 			
授業方法			
インターネットによるテレビ会議システムを利用し、東京都国分寺市のみんなの大学校の講義室を中心として、名古屋と新潟を結び授業を行う。画面は双方で見られる仕組みである。講義を進めながら、遠隔にいる学生に考えや回答を求めるなどのインタラクティブなアクティブラーニングが基本であり、遠隔地でつながっている状態で「メディアから知る世界」			

を体験する。以下の攻勢で授業を行う。 ・講義 新しい発見をメディアの中で提示 ・クイズ 講義の内容をクイズで挑戦 ・発表 各学校から「身近にある外国」をテーマに前期後半に発表		
成績評価方法・基準		
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%		
教科書・教材・参考文献 等		
パワーポイント提示		
質問への対応		
授業中にも可		
授業経過（授業日程に若干の変更）		
項	目	内容
1	4・22	オリエンテーション 授業の進め方の説明と練習。コンセンサス練習。世界のビールのCMでクイズ
2	5・6	メディアと世界 自己紹介。メディアが人に影響を与えていることについてメディアジャックを例に解説した
3	5・13	身近な外国を知る 日本にある外国を感じてもらうために写真を提示しながら、近くにいろいろな文化があることを実感してもらった
4	5・20	国旗から世界を知る1 国旗から世界を知る講義、クイズ
5	5・27	国旗から世界を知る2 国旗から世界を知る講義、クイズ
6	6・3	ゲストスピーカーを前に 外国人を招き外国の文化を知る前に基本的なことを知るためにオーストラリアについて講義とクイズ
7	6・10	ゲストスピーカー オーストラリアのキャンベラをつなぎオーストラリア国立大学のカーSTEIN・ファレル先生から講義。オーストラリアの自然と文化をクイズ形式で紹介
8	6・17	ゲストスピーカーの振り返り 先週の講義を受けて再度、クイズ形式でオーストラリアを学習した
9	6・24	東京にある外国 オリンピックを前に東京を知るために東京を学んだ
10	7・1	世界のメディアと表現1 主にCMメディアでの外国文化の表現を学び各国の面白さを講義
11	7・8	世界のメディアと表現2 主にメディアでの外国文化の表現を学んだ

12	7・15	発表	前期のまとめの発表 KINGO カレッジ「100円均一ショップにある外国製品クイズ」
13	7・22	発表	前期のまとめの発表 見晴台学園大学、各学生が身近に見た感じた外国をパワーポイントで発表
14	7・29	発表	前期の学びをクイズで振り返り みんなの大学の学生が身近にあった外国をパワーポイントで発表
15	8・5	クイズ最終決戦	前期の学びをクイズで振り返り
総括コメント			
さまざまな障害特性のある方々がインターネットで結びついて遠隔で交流し学び合う講義の中で、今回はメディアを使って世界を知ることをテーマにして講義をしました。さらに実際にオーストラリアにいるオーストラリア人が直接講義を行い、遠隔授業の可能性を広げました。各学校の発表では一人ひとりが外に出て外国を見つけて、それを写真におさめて発表するなど、メディアを利用して伝えることにもつながりました。			

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
けいざいとくらしI	1年	4	内村治
授業概要			
経済は生き物とよく言われます。コロナ禍含めて日々変化する我々の生活環境、つまり社会的確に対応してより良い人世を送るためには経済の理解が大切です。また、人類が直面する課題として気候変動や感染症問題、海洋汚染、富の格差問題、グローバル化の課題などがあり、これらを理解する為にも経済の洞察は必要不可欠です。本授業では、難しい経済と社会の理解のための第一歩として経済活動や考え方の基本的なところを勉強しました。			
授業目標			
社会の中で様々な経済活動が起こっていることを理解する。 経済を理解するうえで必要な用語と考え方の理解をする。 今、起こっている経済事象について理解が進めたらと思う。			
授業方法			
毎回パワーポイントをベースとする資料を事前に配布してオンラインで授業を進める。 なるべく、学生の皆さんとの双方向でのコミュニケーションを基本として進める。			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%			
教科書・教材・参考文献 等			
パワーポイント提示。必要なものは授業前日までに			

データで送りました。		
質問への対応		
授業中にも可		
授業経過（授業日程に若干の変更）		
項 目		内 容
1	5・6	オリエンテーション 授業の進め方の説明と確認。生活の中で経済がどのように影響するか理解する。
2	5・13	お金とは何か お金の歴史、お金の機能、お金の未来
3	5・20	モノの価格とは何か、どうやって決まるの。 モノの価格とは、需要と供給、価格の決定
4	5・27	スポーツと経済、オリンピック スポーツと経済、オリンピックの経済効果とコスト
5	6・3	野球と経済 野球の経済的視点、野球球団の決算—特に広島カープ
6	6・10	自動車市場、クラシックカー 中古の値決め、自動車市場、未来の自動車
7	6・17	質屋のビジネスと機能 質屋の儲け、金融的ビジネス、未来
8	6・24	商店街が消えていく 小売りビジネスの環境変化、小売りの儲け
9	7・1	飲料と経済 水の経済、清涼飲料水、お酒の経済的視点
10	7・8	コロナ禍と経済 コロナ禍と社会、経済への影響、今後の可能性
11	7・15	観光と経済 観光業、インバウンドの将来、課題、未来
12	7・29	農業と経済 日本の農業、農業の経済的視点、課題
13	8・5	アジアと日本経済 アジア経済、中国経済、アジアとの連携、未来
14	8・12	デジタル社会と経済 デジタルの進化、デジタル経済の進展と今後
15	8・19	持続可能な社会と経済 地球規模の課題、取り組み
総括コメント：		
受講生の興味を引き且つ時機を得たテーマをなるべく選んで毎回の講義としました。また、それぞれの理解が進むように PPT の情報量を多めにすることで復習にも使えるようにしています。その分、受講生からのコメント、質疑応答などの時間が十分ではなかったかもしれず今後の反省材料と思われれます。		

特別科目：IT 理解—ドローンを飛ばす

開講年次：半年 単位：2 担当：西村啓太郎

授業概要

実際に人口知能を使ったツールの開発をしている立場からプログラミングとは何か、から始まり、その理解と実際に簡単なプログラミングを体験しました。

授業目標

- ・IT の基礎を学ぶ
- ・プログラミングの基本を理解し体験する
- ・実際にプログラミングしドローンを飛ばす

授業方法：

月に 1 度の講義で概要を学び、その間は自己学習とする。ドローンの飛行プログラミングを構築して、最終的には遠隔から飛ばすことに挑戦する。

成績評価方法・基準：出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%

1 4・14 オリエンテーション、前期目標と IT 概観 IT の基礎と対話

TELLO というドローンをプログラミングして飛ばすことを前期の目標とすることを確認。IT 世界の概観を見渡した。課題として、スクラッチ、スマートフォンアプリのプログラミングを学ぶゲームのヒューマンリソースマシンを触って体験すると共に学びを深めること。OpenCV という画像処理ライブラリを紹介され何か出来ることはないかも課題として出した。

2 4・21 自己学習 自己学習で理解を深めた

3 4・28 自己学習 自己学習で理解を深めた

4 5・12 プログラミングの基礎 前回の課題をどのくらいできたかを確認。スマートフォンのゲームをやり遂げたことと、Python と penCV にて顔認識に挑戦したことを報告、動画発表。Python の構文の基礎を学んだ。課題は OpenCV の利用をさらに発展させ、dlib ライブラリの使用を試してみようかと提案。

5 5・19 自己学習 自己学習で理解を深めた

6 5・26 自己学習 自己学習で理解を深めた

7 6・2 自己学習 自己学習で理解を深めた

8 6・9 プログラミングの実行 課題として提案された dlib を使用し OpenCV だけよりも正確な顔

認識をしたことを報告、動画発表。最終講義に向けドローン TELLO のコマンドについて学ぶ。当初 Python にて行いたいとのことでしたが、プログラミング機器と TELLO 間の通信についての理解、講義だけでも複雑なため、コマンドのみを学び、そのコマンドをテキストにて列挙するにとどめることとなる。課題は、ドローンを飛ばすコマンド群(プログラム)を作成すること。写真撮影、loop、flip の3パターンを考えた。

- 9 6・16 自己学習 自己学習で理解を深めた
 - 10 6・23 自己学習 自己学習で理解を深めた
 - 11 6・30 自己学習 自己学習で理解を深めた
 - 12 7・7 プログラミング実践 実際にドローンを飛ばした。課題を送り、実際にドローンに命令を与えて飛ばしました。場所や命令の細かい設定の違いでうまく動かないこともあることや、その原因を考える事を通して、実際の運用での考察なども行いました。最後に、学んだことを何か未来の技術として使えないかななどの話し合いを通じて、応用を考えるとところまでで終了となりました。
 - 13 7・14 自己学習 自己学習で理解を深めた
 - 14 7・21 自己学習 自己学習で理解を深めた
 - 15 7・28 まとめ 前期のまとめの発表。ディスカッション
- 総括コメント：実際にプログラミングをしてみると、具体的に IT への理解を深めていきました。受講者の熱心な取組にこちらも勉強になりました。これを伸ばしていけば、仕事にもつながると思います。

【講義報告】後期

科目名(副題)	開講年次	単位	担当者名
ころのしくみ		4	山本登志哉
授業概要			
ころと物は別のものと思います。ではその「ころ」とは一体何なのでしょう？物理学や化学が物のしくみを明らかにしてきたように、心理学は「ころ」のしくみを理解することに取り組んできました。ではそこでどんなことが見えてきたのでしょうか。実際に「ころ」について面白い体験や実験をしながら、ちょっとずつそのしくみを見てみました。			
授業目標			

<ul style="list-style-type: none"> ・実際の体験を通して、ふだん気づきにくい「ころ」のしくみについて考えてみる。 ・「ころ」についてはいろいろな見方があること、いろいろな面があることを知る。 ・人間って面白いなあということに気づく。 			
授業方法			
毎回簡単な知覚実験を最初に行い、そのあと各テーマについて説明していきます。できる限りそこでも簡単な実験や体験を入れていきました。			
成績評価方法・基準			
出席 70%、毎回の授業への感想記入 30%			
教科書・教材・参考文献 等			
パワーポイント提示。時々事前に印刷しておいていただきたい資料を配布しました。			
質問への対応			
歓迎します。			
授業経過(授業日程に若干の変更)			
項目			内容
1	10・6	ひとつのころは見えますか？	ころはどこにある？相手のころは見える？自分のころは見える？ころは物ですか？
2	10・13	ころは物差しで測れますか？	主観的な世界を物のように測ることはできるでしょうか？実際に体験してみました。
3	10・20	おばけを見られますか？	人は「ある」ものを見ます。でも「ない」ものも見ます。どういうことでしょうか？
4	10・27	1kgの鉄と1kgの綿どっちが重い？	大きさ、重さ、遠さ…いろいろなものを比べるころのしくみはどうなっているのでしょうか？
5	11・10	ネズミも勉強しますか？	学んで何？「新しいことを学ぶ」って人間だけのことでしょうか？学習ができる動物はいるのでしょうか？
6	11・17	円周率 50桁覚えられますか？	3.14……の先、いくつ覚えられますか？覚えるということのしくみはどうなっているのでしょうか？
7	11・24	赤ちゃんの時のこと覚えてますか？	人生最初の記憶はいつですか？「私」が記憶で成り立っているってどういうこと？
8	12・1	目は口程に物を言う？	言葉以外に人に何かを伝える方法は？言葉の前の言葉ってなんでしょう？

9	12・8	言葉でどこまで伝わる？	言葉で伝わることって何でしょう？どうやって伝わるのでしょうか？伝わらないことって何でしょう？
10	12・15	嘘に気づけます？	なぜ人は嘘をつくのでしょうか？嘘はどうやって見抜けるのでしょうか？嘘にもいいところはありますか？
11	12・22	人に話すと楽になる？	なんで人は人に自分のことを話すのでしょうか？話すと気が軽くなったり、重くなったりするのはどうして？
12	1・12	血液型で性格わかりますか？	性格って変わりますか？性格って作られますか？性格テストのしくみは？
13	1・19	障がいとは個性？病気？文化？	障がいってなんなのでしょう？どうなると障がいなんなのでしょう？どうなると障がいではなくなるのでしょうか？
14	1・26	正しいことを正しいと言える？	人は周りに流されます。どんなときにどんな人が流されるのでしょうか？その結果何が起ころうのでしょうか？
15	2・2	8と10とどっちが多い？	数を理解するってどういうこと？幼児の理解と大人の理解の違いってなに？

総括コメント

人によって物の見え方や感じ方、考え方が異なる、ということは「主観的な現象」としての心理を理解するうえで基本になることで、その「主観的な現象」がもつ法則性、しくみを明らかにしていくのが心理学だということ、そのことでの理解を通して、異なる主観を持つ他者とどう理解し合えるのかを考えていく必要があることを、さまざまな心理現象を説明する中で話をしていったが、回を重ねるごとに参加者が自分の体験をベースにそのような理解を進めていくことが感じられ、講義終了後に受講生間で1時間余り議論が続くことも何度もあって、当初の目標が達成されたと感じられた講義となった。

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
対話と社会	半年	2	引地達也
授業概要			
社会のいろいろな分野をフィールドにして、二人の対話から話をはじめ、その対話を受講者に広げていく講義になりました。客観的に対話を見ながら、その対話のキーワードから自分の経			

験などの語りにも展開していった結果、毎回活発なお話合いとなりました。

授業目標		
<ul style="list-style-type: none"> ・対話からそれぞれの考えなどを的確に理解する経験を養う ・他者の対話から自然に自分の意見を述べる環境を整えられる経験を養う ・自分の言葉を身に付け、対話ができる素地を養う 		
授業方法		
実践を基本として、対話式で話を進めていきました。		
成績評価方法・基準		
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%		
教科書・教材・参考文献 等		
パワーポイント提示等、その都度必要に応じて画面共有で提示。		
質問への対応		
授業中にも可		
授業経過（授業日程に若干の変更）		
項	目	内 容
1	11・1	オリエンテーション 担当：引地達也 授業の方針や対話の進め方の説明、最近の話題、どんな人と話をしたいかについてディスカッション 受講者5人
2	11・8	サッカーと社会 その1 対話者：J2 ジェフ千葉サポーター、千葉あい Jリーグ発足当初からのオリジナルチームで10年以上J2に低迷しているサポーターの気持ちや応援の仕来り等についてレクチャー、サッカーと日本文化について 受講者4人
3	11・15	サッカーと社会 その2 対話者：J2 ジェフ千葉サポーター、千葉あい サッカーと日本文化について、海外のサッカー文化との違いなどについてディスカッション 受講者5人

4	11・22	民俗学を知るの1	対話者：研究者兼鍼灸師講師、アクセスジョブ南森町、舟木鍼灸文化、道祖神と風習などについて受講者の体験等を交えてディスカッション 受講者5人
5	11・29	民俗学を知るの2	対話者：研究者兼鍼灸師講師、アクセスジョブ南森町、舟木民俗学について、日本の文化の特性やお祭り、神社について 受講者7人
6	12・6	株取引の実態の1	対話者：株ディーラー遠藤昭博 株取引について当日の取引の内容や現在の市場のトレンド、株取引のやり方について 受講者5人
7	12・13	株取引の実態の2	対話者：株ディーラー遠藤昭博 当日の取引と市場のトレンド、企業買収、企業の公開義務などについて 受講者6人
8	12・20	中間ふりかえり	担当：引地達也 これまでの対話で面白かった点を振り返りながら、今後の対話の要望や受講生からの意見交換 受講者5人
9	12・27	国際社会について	担当：引地達也 インドに関する話を前にして最近の世界情勢や気になる話題、コロナ対応などについて 受講者5人
10	1・17	日本とインドの1	対話者：清泉女子大非常勤講師アルン・デゾーサ インドの基本的な社会について、衣服、食生活、学歴、宗教、言葉など 受講者6人
11	1・24	最近のニュース出来事から	担当：引地達也 最近のニュースから意見交換、人間の価値についての議論 受講者8人

12	1・31	最近のニュース出来事から	担当：引地達也 最近のニュースから意見交換、スポーツの話題、国技とは何か、半導体の話題、エネルギー価格 受講者7人
13	2・7	日本とインドの2	対話者：清泉女子大非常勤講師アルン・デゾーサ インドのゲーム、クリケット、オリンピックの感想、スポーツと社会について
14	2・14	まとめ	担当：引地達也
総括コメント			
各分野に精通している普通の人との対話は水平型のコミュニケーションになる可能性が高く、結果的に知らない世界を受講生で共有して活発な対話の機会になりました。だんだんとエンジンがかかるのが40分過ぎで、この講義に関しては50分が短いような気がします。いずれにしても対話者の素養としては、「どんな質問でも柔軟に対応できる」ことが重要だと感じました。			

科目名(副題)	開講年次	単位	担当者名
3者遠隔講義/メディア論	1年	4	引地達也
授業概要			
名古屋と東京と新潟の3か所を同時にインターネットで結んでコミュニケーション授業を行う。インターネットを使った双方向性の授業のやり方を学びながら「メディアでつなぐ世界 世界を知る、体験する、味わう」をテーマにメディア社会への理解を深めた。授業中盤では、福祉事業型のユニバやまなし(山梨県)、カレッジ旭川荘との交流も行った。			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットを使って映像と音声で結ばれるコミュニケーション方法を理解し正しく利用する ・インターネット上のコミュニケーションのルールやマナーを会得する ・メディアコミュニケーションの可能性から世界を知る ・クイズやゲームを通じて仲間とのコンセンサスの手法を学ぶ 			
授業方法			
インターネットによるテレビ会議システムを利用し、東京都国分寺市のみんなの大学校の講義室を中心として、名古屋と新潟を結び授業を行う。画面は双方で見られる仕組みである。講義を進めながら、遠隔にいる学生に考えや回答を求めるなどのインタラクティブなアクティブラーニングが基本であり、遠隔地でつながっている状態で「メディアから知る世界」を体験する。以下の攻勢で授業を行う。			

・講義 新しい発見をメディアの中で提示 ・クイズ 講義の内容をクイズで挑戦 ・発表 各地からのメディアを使ってクイズデイを設定し出題するプログラムを考える		
成績評価方法・基準		
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%		
教科書・教材・参考文献 等		
パワーポイント提示		
質問への対応		
授業中にも可		
授業経過（授業日程に若干の変更）		
項目		内容
1	10・7	オリエンテーション 授業の進め方の説明と練習。コンセンサス練習、インドのCM、米国のCMでクイズ
2	10・14	新しいメディア1 SNSの概要を説明し、新しいメディアの使い方や特徴を紹介した
3	10・21	新しいメディア2 米国のペプシとコーラの比較CMを示し、比較するメディア文化について解説した
4	10・28	ソーシャルメディア ツイッター、ライン、フェイスブック、インスタグラムのそれぞれの特徴を認識し、どのように使うかを考えた
5	11・4	グルメサイトを考える ぐるなびやホットペッパー、食べログなどのグルメサイトの仕組みを伝え、グルメに関するクイズを行った ユニバやまなし（山梨県）交流
6	11・11	車のCMから世界を見る1 世界の車メーカーのCMから世界の文化を学んだ
7	11・18	車のCMから世界を見る2 世界の車メーカーのCMから世界の文化を学んだ
8	11・25	5つの地域を結ぶ交流授業 5つの地域のそれぞれの特色について交流しながらクイズで学び合った ユニバやまなし（山梨県）交流 カレッジ旭川荘（岡山県）交流
9	12・2	発表 KINGOカレッジ1年生のクイズデイ、新潟に関する出題 ユニバやまなし（山梨県）交流

10	12・9	発表	見晴台学園のクイズデイ、名古屋に関する出題
11	12・16	発表	KINGOカレッジ2年生のクイズデイ、新潟に関する出題
12	12・23	クリスマスとメディア	クリスマス文化についてメディアで理解を深めた
13	1・6	新しい年とメディア・他国文化	新しい年に関する文化の違いをメディアを使って学習
14	1・13	発表	みんなの大学のクイズデイとして東京に関する出題
15	1・20	クイズ最終決戦	前期の学びをクイズで振り返り
総括コメント			
ソーシャルメディアの使い方の基本を前半で学び、世界のCMで文化の違いなどを意見を出し合いながら楽しく学びました。中盤はユニバやまなしとカレッジ旭川荘と地域の違いを強調した交流を行い、後半は仮題として各学校にクイズで講義を構成するクイズデイとし、それぞれが特色のある発表で個性あふれる楽しいクイズを次々と出してくれました。発表を通じて学生らの成長がよくわかりました。			

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
けいざいとくら	2年	4	内村治しⅡ
授業概要			
経済は生き物とよく言われます。コロナ禍含めて日々変化する我々の生活環境、つまり社会に的確に対応してより良い人世を送るためには経済の理解が大切です。また、人類が直面する課題として気候変動や感染症問題、海洋汚染、富の格差問題、グローバル化の課題などがあり、これらを理解する為にも経済の洞察は必要不可欠です。本授業では、難しい経済と社会の理解のための第一歩として経済活動や考え方の基本的なところを勉強しました。			
授業目標			
社会の中で様々な経済活動が起こっていることを理解する。 経済を理解するうえで必要な用語と考え方の理解をする。 今、起こっている経済事象について理解が進めたらと思う。			
授業方法			
毎回パワーポイントをベースとする資料を事前に配布してオンラインで授業を進めた。 なるべく、学生の皆さんとの双方向でのコミュニケーションを基本として進めた。			

成績評価方法・基準		
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%		
教科書・教材・参考文献 等		
パワーポイント提示。必要なものは授業前日までにデータで送りました。		
質問への対応		
授業中にも可		
授業経過（授業日程に若干の変更）		
項	目	内 容
1	10・28	オリエンテーション 授業の進め方の説明と確認。生活の中で経済がどのように影響するか理解
2	11・4	コーヒー杯から学ぶ経済 もの値段、需要と供給、価格設定と戦略
3	11・11	回転寿司から見える経済 貿易の効用、原産地、ビジネス環境の変化と対応
4	11・18	コンビニから見える消費経済 コロナ禍の環境変化、24時間営業、事業戦略
5	11・25	ユニクロから見える経済 グローバルビジネス、SDGs、SPAとしての経営戦略
6	12・2	情報通信・サブスクと経済 情報通信の今、サブスクビジネス、事業戦略
7	12・9	ゼミ研究：第一回 ゼミ研究の概要説明、課題発見と選定
8	12・16	ゼミ研究：第二回 フィールドワークと調査、プレゼンテーション方法
9	12・23	日本の財政・地方自治体財政 国の歳入と歳出、地方自治体財政、公営企業の状況
10	1・6	医療とビジネス 市場規模、感染症と新型コロナウイルス肺炎、ワクチンと治療薬
11	1・13	鉄道・航空ビジネス 鉄道インフラのビジネスモデル、航空ビジネスと復活
12	1・20	エネルギーとビジネス エネルギーの現状と今後、再生可能エネルギーと自給率
13	1・27	ゼミ研究：第三回 課題発表：A—スマホとPayPay利用者目線での比較
14	2・3	ゼミ研究：第四回 同上：B—サブスクは公共文化になり得るか？
15	2・10	復習、ゼミ研究を振り返って

総括コメント
受講生によるゼミ研究の発表を覗んで、なるべく暮らしの中で気づく経済を履修させて自分として問題意識のあるテーマを考えてもらいました。発表も簡潔かつ分かりやすくやっていただいていたのでその後の活発な質疑応答につながったと思います。また、彼らが興味を示していたエネルギーや情報産業などもテーマとして入れてなるべく面白い授業を考えました。

科目名（副題）	開講年次	単位	担当者名
IT 理解・3D プリンター	半年	2	門口美千代ほか
授業概要			
IT 知識を深めていく一環として物を創造する3Dプリンターとデザインを具体化するパソコンソフト TINKERCAD の操作を習得していただきました			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・3Dプリンターの概要と動作の理解 ・デザインを具体化するパソコンソフト TINKERCAD の操作方法の習得 ・ネット上にあるデザインの検索、参照と独自デザインの創作 			
授業方法			
パソコンオンラインツール“ZOOM”を利用して対話形式で説明する			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%			
教科書・教材・参考文献 等			
パソコンソフト TINKERCAD、操作説明書、デザインの課題など			
質問への対応			
授業中にも可			
授業経過（授業日程に若干の変更）			
項	目	内 容	
1	10・9	オリエンテーション	担当：森 新一郎 パソコンへ TINKERCAD をインストール。基本的な操作方法を習得していただく。
2	11・16	ソフト説明書の通読	担当：池田 久男 講義資料にそって説明。デザイン画面の物（シェープ）の操作、変形方法などを理解していただく。 名札の作成。

3	12・7	課題の考察、回答	担当：森 新一郎 いくつかの課題を回答。ご理解が早く見事な回答をいただきました。ルーラーツールの習得。デザインのネット検索方法を紹介。
4	1・18	コードブロックツールの説明	担当：森 新一郎 複雑な部品を作るためのコードブロックツールの説明。 TINKERCAD電子回路ツールの説明。
5	2・18	より高度な技術の習得	担当：森 新一郎 ボルト、ナットのような複数部品を組み合わせるデザインの例。ネットで検索した優良なデザインを解析して高度なテクニックを習得する。 最終回の皆さんのご挨拶。
総括コメント			
受講者がIT好きでいろいろと知っている方だったので習熟度が早く、スムーズに講義を行うことができた。一方で初心者に向けてはどのような教え方がよいのか、まだ模索中の段階である。			

科目名(副題)	開講年次	単位	担当者名
やさしいプレゼンテーション	半年	2	西田尚司
授業概要			
社会活動において、障がい者や難病罹患者の悩みは仕事に就くことですが、仕事をする上で、必ず求められる能力がプレゼンテーション能力(伝えるチカラ)です。仕事以外でも生きていく上で、必要不可欠なキャリアがプレゼンテーションであります。このプレゼンテーションの基本を講義いたしました。			
授業目標			
・プレゼンテーションを知り理解することを学ぶ。プレゼンテーションの不安を解消し伝える体験をする。 ・日常生活の場面でプレゼンテーション(伝えるチカラ)ができる基本を理解し、その力を学び育む。			
授業方法			
プレゼンテーションの理解を深めるため対話式で話を進め、時には禅を使った落ち着いた体験も行った。			
成績評価方法・基準			
出席。そのほかは講義時に提示。			
教科書・教材・参考文献 等			
パワーポイント提示。必要に応じて、受講生が課題を提出。			

質問への対応			
授業中にも可			
授業経過(授業日程に若干の変更)			
項目			内容
1	10・6	プレゼンテーションとコミュニケーションの違い	プレゼン(伝えるチカラ)の概念を講義しました。
2	10・13	プレゼンテーションは伝えるチカラ	プレゼンテーションを観察して本質を理解する講義しました。
3	10・20	プレゼンテーションに必要な要素	5W2Hなどを用いて必要な構成要素について講義しました。
4	10・27	やさしい面接プレゼンテーション	面接(1対1)プレゼンテーションについて講義しました。
5	11・10	やさしい面接プレゼンテーションは準備が9割	プレゼンテーションの準備について講義しました。
6	11・17	緊張しないで落ち着いて話せる・・・禅を体験しよう	不安や緊張から解放される禅体験(宗教ではない禅)
7	11・24	ちょっと脳科学に触れてみる	脳科学(短期記憶)を用いた実践的な講義をしました。
8	12・1	〇〇〇〇をプレゼンテーションに使う	禅の1点集中をプレゼンに用いる講義をしました。
9	12・8	プレゼンテーションで兵法	聞き手を話に引き込む講義をしました。
10	12・15	簡単なテーマでプレゼンテーションを試みよう	簡単なテーマについて話す実践的な講義をしました。
11	12・22	プレゼンテーションをする前にやるべきこと	マインドセットとプレゼンについて講義しました。
12	1・12	あなたに会いたくなる履歴書を落ち着いて書く	履歴書の書き方と面接についての講義をしました。
13	1・19	面接のイメージング	心の安心感を得るイメージングを講義しました。
14	1・26	やさしい面接プレゼンテーションの記憶術	記憶術を使った面接プレゼンテーションの講義しました。

15	2・2	やさしい面接 プレゼンテー ションの実践 術	面接プレゼンテー ションの実践を講義し ました。
----	-----	---------------------------------	--------------------------------

総括コメント

「話が伝わらない」「頭の中が真っ白になって何を言っているのか自分でもよく分からない」「話すときに不安になる」などのプレゼンテーション（話し方）の悩みを改善することを目的として、本講義を実施いたしました。本講座では、5W2H（いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように、いくらで）をベースに具体的な事例を挙げ、プレゼンテーションをすることに慣れることを目指しました。また、緊張や不安を和らげるために禅の体験や聞く力を養うために音楽を取り入れたり、ユニークな講義内容にいたしました。

受講生が社会生活で直面する可能性が高い「面接プレゼンテーション」をテーマにした講義も数回にわたり講義し、みんなの大学「障がい者のため生涯教育」のコンセプトに従い、障がい者雇用の面接試験の対策についても詳しく講義しました。「プレゼンテーション」は受講生にとってハードルが高い感じがしましたので、今後は「話し方」の講義を実施したく存じます。

※ゼミナールは学生の日々や週間の相談や学習についてのアドバイスを週末を中心に中1回のペースで行った。対象の学生は4人だった。

【講義の様様】



【アーカイブについて】

講義は動画としてYouTube内に限定保管しており、関係者や学生など内部のみに対して希望者への視聴を許可している。講義の内容が双方向性のため場合によっては自らの発言が公になることを望まないケースが考えられることから、一般公開にあたっては慎重な姿勢で対応している。

講義のURLは以下であるが、一部表示できないものに関しては講義で使った動画や画像素材が著作権違反の疑いがあるとYouTube側が簡易的に認定したもので、アップロードが中断している状況である。

4-2-2 受講者の感想

メディア論

・私は、インターネットを使ってスマホアプリでゲームをやったり、LINEしたり、YouTubeを見たりしています。でも、たくさん使いすぎて動画が止まったり画面が固まったりします。困るので無駄使いたないようにします。自分達のクイズの制作は、芸術と生活、音楽からいただきました。講義の説明と演奏で使っている楽器の名前を当てるクイズを作りました。ブムワッカーで少し演奏をしたけれど、リズムにのれて楽しかったです。来年も引地先生に会いたいです。（学生 UM）

・わたしにとってYouTubeは面白いものが有るからみるのではなくて、好きなアイドルがチャンネルを立ち上げたのでみるのです。でも次から次に面白い物が出てくるので、つい課金制度のあるゲームサイトに引き寄せられてしまいそうになります。はなしを聞いて、エコンチューバーになるところだったと思いました。クイズデーで名古屋の問題考えるのにすごく悩んだのに、他県のみんが知っていたので驚きました。正解を当てられたのはくやしいけど、していただけで良かったです。いつもの、みんなの大学、きんごカレッジ、見晴台学園大学意外に、ユニバ山梨、カレッジ旭川が参加したことでいつもと違うような感じがして楽しかったです。私には当たり前でも、他県の人には面白い、めずらしいのだとかんじることができたのでうれしかった。また、新しいひとたちとゲームをやりたとおもった。（学生 YM）

・車のCMをみて、日本の車と海外の車の違いを見て思った事は、日本の車のCMはおとなしい感じでしたが、海外のCMは、荒々しくてはげしいやつが多かったです。他の大学のクイズの問題で、ユルキャ

ラの問題が出たときは、どこの県にもいろんなユルキャラがいるんだなと思いました。僕は、東山動物園のオブジェについて問題をだしました。準備段階で何の動物か分からないのがおおかっただので、動物園に電話をして聞きました。大竹さんとクイズの問題を考えるのが本当に大変でした。(学生 TI)

・世界の車の CM まさかチョコレートでできているとは思わず、驚きました。大きさ・部品・パーツ・色など本物そっくりに作ったら、実際に食べることができる、のではないかと思いました。クイズの説形を皆さんに分かりやすく伝えることは簡単ではありませんでした。短い文章で問題を考えてよりクイズを楽しんでもらえるように考えて工夫しました。時間をかけてやっていくと面白い物ができるのではないかというワクワク感がありました。11月11日 ポッキーの日に大学に来てくれたことが嬉しく、壁にかけている掛け軸も見てもらってくれたことが良かったです。(学生 NT)

・後期は SNS、グルメサイトのことが印象に残りました。同じコンテンツでもそれぞれ違う特性があることが分かりました。僕は普段 SNS を利用していません。例：YOUTUBE でアニメを見たり音楽を聴いたりしています。グルメサイトは利用したことがありません。もしグルメサイトを利用する機会があればそれぞれのサイトの特性を生かしたいと思いました。また、クイズデイの見晴台学園大学の日に引地先生が来訪しました。始めて直接お会いしました。その日はあまりメディア論という感じがしませんでした。ですが、また大学に来てくださると嬉しいです。同じ部屋でメディア論を受けてみたいです。(学生 SI)

・一番面白かったのは、グルメサイトです。私はお店を調べる時は本を使っていますが、これからはネットで調べるのも良いなと思いました。味噌カツの美味しいお店を調べてみます。学校対抗クイズでは、楽器演奏で使っているブームワッカーについて出題しチューリップを演奏しました。何回も練習して、zoom で合奏を行う事が出来て感動しました。いつか他の学校の人達と会って一緒に学びたいです。

・アメリカのペプシの CM でライバル会社に対してあてつけて、他社の商品を踏みつけにして自分商品を宣伝する CM をみて、こんなに、あからさまに他社の商人をけなす行為を放送している国もあるのだなと知っておどろきました。日本では CM というみんなが観る物でどうどうときなす汚い使い方はしないので、アメリカの CM はどうかと感じました。クイズデイでクイズを考えるのにたいしてどれかわからなくするために、考えたけど他校全体的に正解率が高かったため、もっとクイズの答えを難しくするために考えました。しかし、全体的に正解率が高かったため、もっとクイズを難しく面白くするために思考錯誤すべきだなと感じました。(学生 EF)

4-3-1 オープンキャンパス

オープンキャンパスはこれまでコーディネーターが3年間の本事業で「地域とともに障がい者と市民が学び合う」ことを念頭に中心に置いてきたプログラムであるが、本年度はコロナ禍への対応も含め、ウェブ講義と連動する形で集合型の学びの機会をウェブでつないでハイブリット化することで参加者の社会参加の広がりや学びの進化を目標に、国分寺市と協力し兵庫県西宮市とを結ぶオープンキャンパスを企画・実践した。

西宮市はみんなの大学校の運営する事業所「就労移行支援事業所みんなの大学校西宮校」があり運営スタッフが確保できるだけでなく、西宮市も伝統的に青年学級を運営しており、国分寺市の青年学級である「くぬぎ学級」とウェブで交流することで新しい展開につながるの期待から企画した。同時にそれぞれの地域性をアピールしながらお互いを知っていく中での学びの構築を目指す中において、西宮市観光協会、国分寺市観光協会も協力いただき、観光協会のスタッフが直接、それぞれの地元の魅力をクイズ形式で出題し、イメージキャラクターも登場させながら、それらのカリキュラムを学びに発展させることとした。

しかしながら新型コロナウイルスの影響が長引き、

両市とも集合型のイベントについて制限がある中での開催となり、ご当地キャラクターの着ぐるみの出演も中止、西宮の青年学級を運営する NPO 法人も自主参加の形となった。

従って1回目は全体的に縮小気味で行われたが「地域間の交流」「学びとしての機能」としては、1つの形を示せたと考えている。

この1回目の形を受けてコロナに関する制約が緩和された2回目は1回目よりも人数が多く、国分寺市のくぬぎ学級においては1回目参加した人が「面白い」と言ってくれたことで参加者が増加した。

1回目に参加していない方向けに、前回と同様に観光協会からのクイズで地域間交流を楽しみ、国分寺市を中心に全国で活躍するピアノデュオの「サーム」の濱野崇さんと笹木健吾さんを講師にして音楽からコミュニケーションに発展させるプログラムを行った。このプログラムは、本事業でこれまで3年間継続してきたもので、音楽の学びが多くの人を「インクルージョン」できることを確認しており、今回はウェブで2つの地域をつないでの「合奏」「コミュニケーション」の可能性に挑戦した。結果的に国分寺と西宮での合奏はきれいにまとまり、短時間で合奏が達成できたことに、参加者から「楽しかった」「またやりたい」の感想を得たのと同時に、それを学びに位置づけられたことは大きな成果であった。



【概要】

キャッチコピー

みんなで「あそぶ・まなぶ」オープンキャンパス
遠くでつながる新しい交わり国分寺・西宮

参加無料

主催 一般社団法人みんなの大学校

協力 国分寺市教育委員会、国分寺市観光協会

出演：国分寺市観光協会、西宮市観光協会、音楽グループ、サーム

1回目 2021年9月25日（土）午後2時から4時
参加30人

場所：東京都国分寺市本多公民館ほか同市内公民館
（+兵庫県西宮市の各会場）

ファシリテーター・進行役：

引地達也・みんなの大学校（国分寺）/河辺朋久・みんなの大学校西宮校（西宮）/西宮市観光協会/国分寺市観光協会

スタッフ規模：各 10 人（集合型でのサブティーチャー役等）＝みんなの大学校のスタッフ及びボランティア

2 回目 2021 年 11 月 3 日（祝）午後 2 時から 4 時
参加 50 人

場所：東京都国分寺市本多公民館ほか同市内公民館
（+兵庫県西宮市の各会場）

ファシリテーター・進行役：

引地達也・みんなの大学校（国分寺）/河辺朋久・みんなの大学校西宮校（西宮）/西宮市観光協会/ピアノコーラスグループ、サーム（濱野崇、笹木健吾）（国分寺）

スタッフ規模：各 10 人（集合型でのサブティーチャー役等）＝みんなの大学校のスタッフ及びボランティア

【内容の詳細】

第 1 回

項目	内容	時間
オープニング	あいさつと趣旨説明、テーブル毎に自己紹介、チーム名決定「秋にちなんだ名前」	15 分 引地
ご当地クイズ	国分寺市と西宮市をつなぎ、それぞれのご当地クイズでお互いを知る 国分寺市クイズ 3 問（国分寺市観光協会） 西宮市クイズ 3 問（西宮市観光協会）	40 分 河辺 引地
休憩		10 分
ボードゲーム コミュニケーション	パクモグ お題に合わせてのジェスチャーゲーム ※いずれもゲームをしながらコミュニケーションに関する表現やコンセンサスを学びます	45 分 河辺
クロージング	本日のゲーム得点の集計と発表、学びのまとめ	5 分 引地

感想記入・提出	本日の学びや感想を記入 西宮に国分寺市の「ともしび工房」のクッキーをプレゼント、国分寺には西宮から珈琲パックのプレゼント	10 分 引地
---------	---	------------

オープニングではこれまで 3 年間のオープンキャンパスの経験のもと、知らない人たちが同じテーブルでカリキュラムを受け、時には交わりながら進めていくので、「場づくり」が必要であり、以下のスライドでプログラムを行うにあたっての留意点 4 つを話した。

その上で、自己紹介をしてもらい、それぞれのチームで「チーム名」を決め。発表する導入を行った。これは第 1 回、第 2 回共通で以下のスライドを使って説明した。

出会いを喜ぼう



みんなで驚こう オーバーアクション！

声はひかえめに



みんなで笑おう

笑顔で
コミュニケーション！





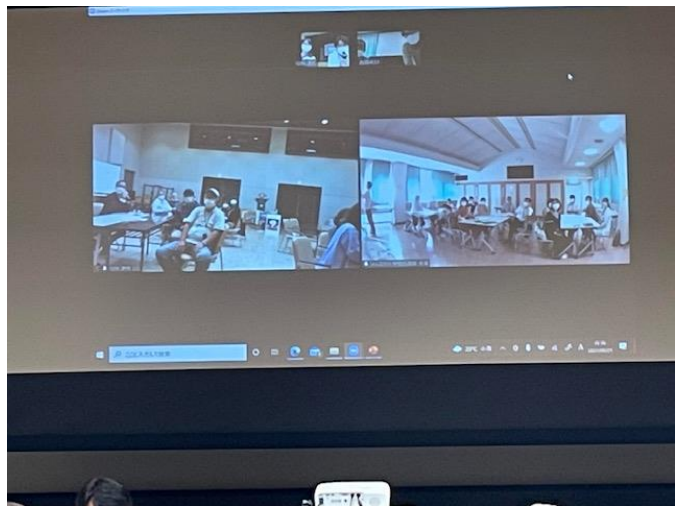
NEW!

「新しい」ことを
感じよう

以下は国分寺市観光協会によるクイズの出題の一部
である。



オープンキャンパスの様様（国分寺市）



大型スクリーンで西宮の様子を映し出す



クイズ出題する国分寺市観光協会（左）




西宮市に通じるように大きなジェスチャー

第 2 回

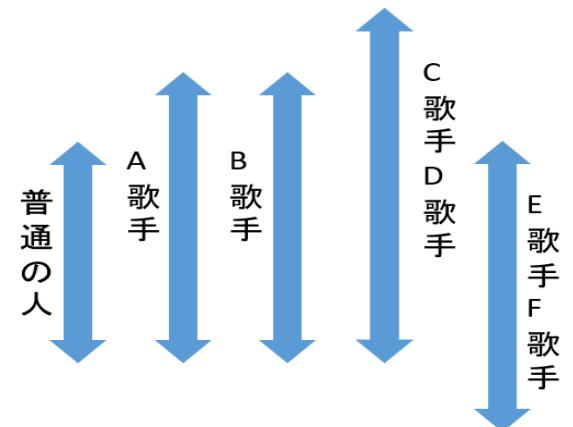
項目	内容	時間
オープニング	あいさつと趣旨説明、テーブル毎自己紹介、チーム名決定、オープニングゲーム サームの紹介	15分 引地
交流クイズ	国分寺市と西宮市をつなぎ、それぞれのご当地クイズでお互いを知る 国分寺市と西宮市をつなぎ、それぞれのご当地クイズでお互いを知る 国分寺市クイズ2問（引地） 西宮市クイズ2問（西宮市観光協会）	20分 河辺 引地
休憩		10分
音楽で遊ぶ コミュニケーション	パート1 サームとクイズ 歌の披露「確かなこと」 パート2 音楽で合わせよう 手拍子とピアノの音を遠隔で合わせてみる パート3 講義「音楽とコミュニケーション」 パート4 みんなで合奏 「ひまわりの約束」をみんなで合奏 ※いずれもゲームをしながらコミュニケーションに関する表現やコンセンサスを学ぶ	45分 サーム 河辺 引地
クロージング	本日のゲーム得点の集計と発表、学びのまとめ	10分 引地
感想記入・提出	本日の学びや感想を記入	10分 引地

以下は音楽プログラムの説明スライドの一部である。

元気なあいさつ
「おはようございます」



ド レ ミ ファ ソ ラ シ ド




1 およげたいやきくん!



458万枚

2 だんご三兄弟




292万枚

3 TSUNAMI



294万枚

4 世界で一つだけの花



258万枚

オープンキャンパスの様（国分寺市）



西宮市と手拍子を合わす



重度障がい者も参加



サムの演奏と西宮の参加者が手拍子を合わせる

4-3-2 参加者の感想

【アンケート結果】

■ 第1回 回答数 25

質問1	質問2	質問4	年齢・性別	
とても楽しかった	19とても勉強になった	17とても勉強したと思った	15年齢回答者数	22
まあ楽しかった	6まあ勉強になった	8まあ勉強したと思った	8平均年齢	45
それほど楽しくなかった	0それほど勉強ならなかった	0あまり思わなかった	0男	12
全然楽しくなかった	0全然勉強ならなかった	0全然思わなかった	0女	12
その他	0その他	0その他	2未回答	1

感想

本日のプログラムは楽しかったです。その理由

※あきらかな誤字は報告書作成段階で修正しています。

- ・なごやかなふんいき

・初めての参加でしたがクイズ・ゲームなど、参加者がグループごとに話し合う事によって和やかになり仲間意識に結び付いた。全員参加型が楽しい雰囲気になるのでとてもよいと思う

・ネット越しも含めコミュニケーションを取れました。クイズ、ゲーム楽しめました。

遠くの西宮市とつながって一緒に時間を共有して楽しめるということはとても新鮮でした。楽しい時間でした

・少し遅れたので申し訳ありませんでした。すぐ落ち着いて参加しました

・ご当地クイズがわかりにくかった

・チームになって協力して回答することが楽しかった

・とても楽しかったです

・西宮と zoom ではあるが地域の違うところで楽しむことができたこと

・クイズがたのしかった

・互いの歴史や地理を学びながらチーム戦で交流も深められたのでよかったです。今後は周りのお友達にも声をかけたいです

・クイズを通して、皆さんとコミュニケーションをとることができた

・参加者が少なかったが、ゲームがわかりやすかった

・ジェスチャーゲームがたのしかったから

・クイズ(食べ物あてジェスチャー)はジェスチャーをする人ごとで全然雰囲気が違ってくる

・時間も歳も忘れて楽しめたこと。子供たちが考えていることがおもしろかった。素直な反応に在りし自分を見るようでした

・ジェスチャーゲームがたのしかったからが楽しかった。小学生のお子さんや同じテーブルの方とお話できたこと

・みんなで考える事ができてよかったです。

・オンラインで国分寺とつながれて楽しかった

・西宮内でも交流でき、国分寺との交流もあり、色々な方々と交流できたため

・今、コロナ下、オンラインでつながる大切さと楽しさを感じれたため

・グループ、同じ部屋、西宮と国分寺で同じ遊びでつながり楽しめました

・沢山のゲームがあった。映像で遠方とつながれた

本日のプログラムは勉強になりましたか。その理由

・国分寺の薬師さんに行ってみたいと思いました

・初対面の方でもゲームなどする事によってすぐに打ちとける

・コミュニケーションが取りにくい中、どのように交流をすればよいか、一体となってゆく方法をさがすことができたように思います

・国分寺市のことも分からないことがありました

・ゆっくりとした流れで子供もついて行けました。

ありがとうございました

・地元のことも知ることが出来よかった

・国分寺と西宮のことを詳しく学ぶことができてよかった

・とても楽しかったです

・足元の西宮でも知らないことが色々あるのだと勉強になりました。国分寺のこともこのような機会がなければ知らないままでした。ありがとうございました

・国分寺のことも西宮のことも知ることができた

・対象がどこをねらっているかがやや不明。ゲームはたのしいものでしたが、学びとしてはどうかと感じた

・国分寺がどこにあるのかわかりました

・国分寺がどこにあるかわかりました。地元西宮のチームメンバーから歴史をおしえてもらって良かったです

・参加者同士が緊張せず楽しめるプログラムがとても参考になった

・国分寺と西宮のことについて知れたこと

・普段考えない事を考えたりしたので勉強になりました。

・西宮や国分寺のご当地クイズが面白かった

・西宮青年生活学級開催にあたっての参考となった

ため

・考える機会になりました

・初めて予定を合わせた人同士が最初は緊張しつつも一緒に考え、楽しむことができました。クイズやゲームを通して、同じ物を見て、違う事を感じながら、自分と相手の答えを共有できるプログラムでした

・ご当地の歴史や特産を知ることができたので

本日のプログラムで一番心に残ったことを教えてください。

・国分寺のみりよくについて

・リモート交流がとても印象に残りました。まだ行っていない場所なので観光気分を味わう事ができてとても楽しかったです

・ジェスチャーゲームは、ジェスチャー役の人の個性が出ていた

・時々機器のトラブルが起こってしまいましたが、冷静に対応されていたことです。西宮市のジェスチャーゲームでピザを食べる真似をした子がとても魅力的でした

・西宮市とのやりとり

・リモート交流初めてやりました。工夫こらして大勢で参加したらよいです

・食べ物ゲーム

・リモート交流"

・甲子園球場は川の上にたてられたという話がとてもおどろいた

・西宮と国分寺をたのしく知ることができたこと

・クイズとゲームでチームの皆さんと話し合いながらパーフェクトをとれたこと

・国分寺と西宮、それぞれのクイズ (勉強になった、知らなかったことを知ることになった)・

ジェスチャーゲーム

・途中、チームメンバーが混ざり交流がすすみました

・(カレーライスが楽しかったです) "

・クイズも良かったしジェスチャーも良かったし、全部かな

・zoom を使って、遠く離れていても双方向でやりと

りができたこと。準備がいき通っていました

- ・食べ方の表現をする事が楽しかったです
- ・みんなで楽しく勉強できました
- ・全体を通して、みんなが笑顔で楽しそうにされていたこと
- ・ご当地クイズ
- ・ネットで遠くの人ともつながり同じ時間を共有したことです
- ・ジェスチャーゲーム（パクモグ）、表現が人それぞれで楽しかったです

今後どんな学習プログラムであれば参加したいと思いますか。

- ・天井の光がまぶしかった（蛍光灯）。音声、声のこもりが少し苦手でした。スクリーン、プロジェクター
- ・コミュニケーションを中心に、より良い生き方を探れるプログラムがあれば参加したいです。明るく、生きる目標を見つけることができると思います
- ・本日はありがとうございました。
- ・ダンスと音楽
- ・工夫をこらして本当に過ごす時間が楽しかった様子でした
- ・しりとりゲーム
- ・地元の名産品の紹介とつくり手のストーリーなどに興味がある
- ・集合でのオープンキャンパス！これにかぎりますね。今回はテーブルで楽しく参加できて、また少し新鮮でした
- ・楽しかったですが、「障害者と市民がともに」という割には西宮会場に障害当事者の方が少ないように感じました。どのような内容、プログラムなのか、どんな人を対象にしているのか（障害の有無、年代とわずなのか）がよく分からず、少し心配しながら参加したので、そのあたりを分かりやすくして頂いた上で広く宣伝していただくといいかもしれません。「障害者と市民」となると障害のある人は市民ではないのかな？という印象も受けるので、いろいろな人が・・・という感じの方がいいかも？みなさんの取り組みで西宮がますますインクルーシブなまちになるよう願

っています

- ・次回の音楽演奏も楽しみです
- ・もう少し参加者の様子が見えれば、もっと良いと思います
- ・サイエンスの学習プログラム
- ・巨大ご当地カルタ大会とかでしょうか
- ・みんなで貿易
- ・大人がもっと積極的に前に出るようなプログラム
- ・その他の班の人と交流できるプログラム
- ・参加型のものがやはり楽しいと思います。 ex)音楽
- ・オンラインでのつながり方、楽しみ方
- ・ゲームいいですね。Zoom を使って一緒にゲームができる、プログラムに参加したいです

■第2回 回答数 37

質問1	質問2	質問4	年齢・性別	
とても楽しかった	33とても勉強になった	30とても勉強したいと思った	28年齢回答者数	29
まあ楽しかった	3まあ勉強になった	4まあ勉強したいと思った	3平均年齢	42
それほど楽しくなかった	0それほど勉強ならなかった	0あまり思わなかった	0男	15
全然楽しくなかった	1全然勉強ならなかった	1全然思わなかった	1女	19
その他	0その他	2その他	5未回答	3

感想

本日のプログラムは楽しかったですか。その理由

- ・サームの音楽とトークが会場を盛りあげてくれた
- ・最初から最後まで全員参加なので、楽しかったです
- ・クイズも音楽も勉強になりながら、笑顔がいっぱいでした"
- ・音楽はどんな人でも、たのしくなれる最高のコミュニケーションだと思います
- ・今の人の居る所には行ってはいないのですが、ソーシャルディスタンスの中でもクイズや歌をしてたくさん笑って楽しかったです
- ・コロナの中、この様な皆さんと一緒に過ごす機会がなかったので、久しぶりに声を出す事が出来て良

かったです

- ・国分寺、西宮についてくわしくなれたから
- ・チームの皆さんと仲良くなれた
- ・クイズ
- ・みんなの学校、沢山、楽しく ふやして下さい
- ・クイズ形式でみんなで参加できた事がとても良かったです
- ・久しぶりに初対面の方たちと話しが出来た事と、歌と音はとても良かった
- ・楽しい美しい音楽とふれて感動的でした
- ・いつもは長い時間座っていただけませんが長い時間座ってられました 安心感があったのだと思います
- ・障がいのある人と良い休日のひとときをすごせました
- ・余暇活動の選択肢少ない人にとって内容の濃い充実の時間を過ごせる場所だと感じました
- ・音楽を生で聴ける機会が久々だったので楽しかったです
- ・おんがくのじかんがたのしかったです
- ・コミュニケーション、音楽を通じて、人生のひと時を楽しむことが出来ました
- ・参加者も多く良かった
- ・クイズもう少しあっても良かったのでは充実した内容だったから
- ・手拍子で西宮の方たちとつないで遠隔でつながることが出来て、実感しました
- ・あっという間でした
- ・知らない人の中に入るのは辛いです
- ・音楽が一番楽しかったです
- ・みんな、会場にいらっしゃる 笑顔になっていた
- ・ご当地クイズは全問不正解になるグループが出来ないよう作られていたので、どのグループも(参加者とわず)満足いく内容となっていて参考になった
- ・西宮と国分寺でコラボして楽しかった
- ・音楽のところは、特に良かったです
- ・国分寺と西宮で一緒につながれたことが楽しかったです

- ・同じ曲と一緒に合唱するという体験がはじめてでした。
- ・クイズで知れた事もあったので楽しかった
- ・グーグルアースで見れるとすごく近く感じれてすてきだった
- ・何か行動をしたり、人と交流することは精神的にも健康的であると思いました
- ・国分寺と西宮がつながって、色々と交流することが出来たから。
- ・国分寺の人達とクイズや歌、リズムを合わせられて、よかったです
- ・ご当地クイズで国分寺市と西宮市のことを知ることができたり サームさんの歌ではなれていてもセッションできたり ふだん体験できないことができたことです
- ・曲を聞くのが好きなので、音について学べたのが楽しかったです
- ・ご当地クイズとすずでみんなで 遊ぶ時間が楽しかったです

本日のプログラムは勉強になりましたか。その理由

- ・クイズ
- ・クイズはどれも知らないことで楽しく学べました
- ・はじめてきいたことが多かった
- ・音域音色の記号がへえーっと思いました
- ・歌手のハマさんとケンゴさんの雰囲気はすごく自然と身近に感じられ、司会の方とのセッションもたのしく、あっという間に、あと1時間30分違った曲でセッションしたかったです
- ・身体を動かせるようになったら(リズムをとったり)動いて音楽を楽しめる企画があればたのしいと思う
- ・国分寺市が東京のまん中って知って、びっくりしました。イメージだと端の方かと思っていたので・・・
- ・1人ではなく、皆さんと一緒に考える時を過ごす事が出来て
- ・音域の話は普段も使えるから
- ・参加しながら学べた
- ・音楽の勉強

- ・初めて会えた方たちと音楽を通じて楽しくセッション出来た事が、1人よりみんなで力を合わせる事って大切だと勉強になりました
- ・少しむずかしい内容でしたが座っていられました
- ・アカデミックな休日を過ごせるすてきな場所でした WEB を通じて見える西宮の人、その姿になぜか涙が流れました あたかな WEB の可能性を感じたからです
- ・色々なやり方や方法があることが学びになりました
- ・クイズでしらなかったことがおこった
- ・べんきょうになりました
- ・人とつながることの楽しさ 大切さを学びました
- ・音楽を楽しめてよかった
- ・新しい気付きがあったから
- ・「ラ」が元気なあいさつに適切であるということを知りました
- ・覚えていません
- ・もっと勉強になるように頑張っていきたいです
- ・みんなとコミュニケーション かんたんに 出来るようになった
- ・コロナ禍の中で音楽を通して楽しむ方法をリズムで学べた
- ・今後も青年生活でも楽しめる内容で参考になりました"
- ・コミュニケーションのとり方で声のトーンなど教えられていて良かったです
- ・競うところも良かった
- ・クイズ形式で、お互いの地域を知ること 違う場所で同じ体験をすること 今回はできませんでしたが、次は歌う事ができたらいいなと思いました
- ・あいさつに てきせつな 音の高さがあるというのは とても勉強になった
- ・ほとんど知らないことだらけだったので勉強になりました
- ・コロナの中でもうまくオンラインを使ってつながれば、一つの事業ができあがるということを知ることができたから

- ・知らないことが多い中、クイズで知りえて良かったです
- ・おはようのあいさつは「ラ」で郵便局でも実践されていると知らなかった
- ・コミュニケーションの1つに音域もあると学びました"
- ・クイズがとても勉強になりました
- ・ご当地クイズで西宮と国分寺のことが知れてよかったです

本日のプログラムで一番心に残ったことを教えてください。

- ・ラとレ（ラレ）の音でコミュニケーション
- ・どれも一番心に残りました
- ・音楽は耳と体に入って来て刺激になりました
- ・国分寺の有名人 ファンである RAGFAIR の土屋礼央さんのファンなのにすっかり忘れて他に言われた
- ・Psalm も忘れていないです"
- ・歌う事がないので皆さんと歌えた事
- ・他のピアノ、歌に感謝、感激、最高"
- ・Hama さん、Kengo さんの生演奏、生歌
- ・全部ですが、あえて言うなら、最後のセッション
- ・くいず
- ・リズム
- ・西宮と遠距離ながらも同時にプログラムを進められていたこと
- ・サームさんの音楽性
- ・ドラえもん はい！ドローン
- ・音と歌
- ・元気なあいさつと、同情する時の音程をはじめて知り勉強になりました
- ・おんがくのじかんで みなさんができたこと
- ・色々な曲きけて良かったです
- ・最後に全員でセッションをした事です
- ・人と会う事、共に何かをする楽しさを味わえました
- ・手拍子にピアノを合わせるプログラム

・聴覚障がい者も参加していましたが楽しく行えました ありがとうございます"

- ・音楽
- ・後半の音楽プログラム
- ・ピアノが上手い
- ・あらし その他にも
- ・サーム様とみんながたのしく 手拍子にさんか
- ・音楽のリズム
- ・最後のドラえものみんなで合わせるところが良かったです
- ・全員で合奏したこと
- ・サームさんは歌がうまいなあ
- ・一人、手拍子をしたことです
- ・人前で西宮の代表として、動いたことになりまので、そこまでの意識はありませんが結果的にそうなったと思いました"
- ・音楽をつかったコミュニケーション
- ・歌と手拍子です
- ・ひまわりの歌のセッション
- ・コロナでも鈴とか使って楽しめました
- ・サームの方が歌ってくれたのがよかったです。
- ・鈴でサームさんとセッションできて良かった

今後どんな学習プログラムであれば参加したいと思いますか。

- ・世界のコミュニケーションのしゅるい
- ・全員で合唱したいです
- ・もっと長い時間参加したいです
- ・音と音楽ともっとたくさんやりたいし、いつも来る国分寺の事、詳しく知りたいです
- ・皆さんと今日のように歌うなど
- ・作ったり、皆さんと一緒に何かをする
- ・学生の頃あきらめた理系の学習（化学）
- ・写真
- ・皆で合唱
- ・クイズ
- ・今後はみんなでうたをうたえたらいいなあと思いました
- ・音と歌と光のコラボ

・このような音楽を通じて、「学ぶ」というプログラムは良いと思いました

- ・生きる「勇気」につながる学びを受けてみたいです
 - ・ダンスなどのパフォーマンス
 - ・アート
 - ・学習もやる
 - ・ゲームでおたがい 交流とるように 出来れば
 - ・コロナ禍でも楽器を使ったプログラムを学んでみたい
 - ・障がいを持った方と、健常者の方との交流ができたらと思いました
 - ・グループで何か一緒につくる（創作）
 - ・仕事場などでストレスをためない方法など
 - ・音楽であれば歌を歌ったり、楽器を使ったものもいいと思います
 - ・鈴も楽器ではありますが、ド～シの音が出るものを使用するのがいいと思いました"
- 体を動かして楽しめるようなプログラムがあれば知りたいです
- ・漢字や言葉の意味など
 - ・ボードゲームが前回できなかったので、やりたいです
 - ・モルック大会もやってください
 - ・参加します

【オープンキャンパスの今後に向けて】

集合型をつなげる発想で行ったオープンキャンパスで参加者が楽しんでいることから、場づくりの重要性と遠くとつながっているというイメージづくりが重要であることが再認識された。青年学級の参加には高齢の方もおり、PCが使えない状況の方も多いため、このように形で集合型でつながることが出来れば、情報化の中の学びとしても機能するのではないかと思われる。

この知見を受けてオープンキャンパスを実施する公民館等の社会教育施設において、場づくりに向けた運営の仕方や担い手の育成、プログラムの企画手法などを検討し実践する必要がある、そのノウハウ

の提供を自治体や民間業者に行っていきたい。

4-4-1 重度障害者向けの訪問講義の実施

一般財団法人福祉教育支援協会が 2018 年度～2020 年度に行った事業では「医療的ケア」が必要な 18 歳以降の学習ニーズを抽出し、4 人の講義希望者の学習を実践研究として年間約 20 回の講義を行い、カリキュラムの抽出を行ってきた。これを基礎に本年度事業では、重度障害の中でも特性が違う 2 人を対象として、講義を行いカリキュラムの充実に向けた実践を行った。この 2 人は今夏から就労継続支援 B 型事業の福祉サービスを利用することにもなり、学びと「就労」の両立も目指すことになった。

この事例は全国的に先駆的であり、松本さんの事例は下記の医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラムでも発表した。

【訪問講義の概要】

2019 年度から個別対応の継続希望受講者 2 人

・A-東京都杉並区の岩村和斗さん（自宅）知的障害あり

・B-埼玉県川越市の松本勇成さん（自宅）一般的なコミュニケーション反応が難しい

前期 4-7 月

A 担当：山本登志哉教授「発達心理学」ほかの学生と一緒にオンラインで受講

B 担当：引地達也、鈴木美恵、内田崇祥「創作活動」就労継続支援 B 型との両立を目指して創作活動を訪問看護「ぼぷり」の協力のもと行う

後期 10-1 月

A 担当：引地達也教授「世界を知る」、途中で白百合女子大と交流、レクレーションとして大田市場の体験実習、羽田空港への社会見学実施

B 担当：引地達也、鈴木美恵、内田崇祥「創作活動」就労継続支援 B 型との両立を目指して創作活動を訪問看護「ぼぷり」の協力のもと行う

訪問講座の内容に関する留意点としては、基本的に受講者の希望に沿う形で授業科目を決定するが、ヒアリングからニーズを聞き取り、どこから「学問的発

展」「学びの面白さ」を深く考え、体系づけられたカリキュラムとして提示することを基本とし、教える側も「学び」の発展についての視点から考えてもらった。

4-4-2 岩村和斗さん

岩村和斗さんは 1994 年生まれ。0 歳児から脊髄性筋萎縮症（ウェルドニツヒ・ホフマン I 型）と診断された。発話や身体を動かすことは出来ない。人工呼吸やたんの吸引が必要で食事は経管による栄養摂取である。医療機関での生活の中で 7 歳からパソコンでのコミュニケーションを開始し、特別支援学校中等部 2 年時に在宅生活の基本となった。特別支援学校高等部卒業後は東京都小平市の非営利活動法人による訪問学習支援を受け、さらに 2019 年からシャローム大学校（後のみんなの大学校）の授業を週に 1 回受講し始めた。岩村さんは左肩の筋肉を動かすことが出来るため、肩に接触したエアパッドの感知機能を利用しパソコン画面上のカーソルを動かし、「伝の心」を使って文字盤をカーソルで移動しクリックして入力し文章化する。その文章を発声に変換し会話をする形でコミュニケーションを行う。

学びの要望は世界や社会、歴史の勉強で、コロナ禍を受けて自宅への訪問が出来なくなったことからオンラインでの講義に切り替えた。その上で「オンラインの可能性」へのイメージを保護者や周囲の支援者と共有し、就労系の福祉サービスである就労継続支援 B 型事業でリモートによる「仕事」に従事することを行政に提案し、居住地自治体のレベルでは就労継続支援 B 型事業のサービス提供を認める方向であったが、東京都福祉保健局ではコロナ禍における臨時的措置との見解の上で認定した。

全 15 回の講義内容は、前述のウェブ講義で示した山本登志哉教授の「発達心理学」。ほかの学生と一緒に受講することができ、簡単なレポートを提出した。後期は引地達也教授が訪問しての「世界を知る」講義を行い、就労継続支援 B 型のサービスと両立させる内容に取り組んだ。

さらにコロナ禍による制限が緩和された 2021 年 12 月には東京都大田区の野菜市場である大田市場と羽田空港にレクレーションとして見学した。

【前期】

ウェブ講義で提示している「ディスコミュニケーション論」

【後期】

科目名(副題)	開講年次	単位	担当者名
社会学—世界を知る		4	引地達也
授業概要			
就労継続支援 B 型事業の福祉サービスを利用するにあたって、学習の時間と就労支援の時間を明確に区別する必要があり、担当の引地が訪問して、1 時間を講義、1 時間を就労の時間とすることにしたため、再度訪問を行い、世界に関する学習を行った。			
授業目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・仕事と講義の区切りを明確にする ・いろいろなツールを使って世界を知ることが面白いと感じる ・次に自分が何を学びたいかを説明できるようにする 			
授業方法			
訪問し対面して行った			
成績評価方法・基準			
出席 70%、授業への参加意欲 20%、発表 10%			
教科書・教材・参考文献 等			
動画映像やパワーポイント提示。必要なものは授業前日までにデータで送付			
質問への対応			
歓迎。			
授業経過（授業日程に若干の変更）			
項 目		内 容	
1	10・14	オリエンテーション	仕事と就労の区切りについて説明。授業のレポートの書き方をレクチャー
2	10・21	世界の CM—スポーツとコーラ	東京五輪にちなんで、スポーツに関する CM から国のイメージづくりを提示
3	10・28	スポーツイベント	東京五輪にちなんで、メディアでの伝え方を説明
4	11・10	イベントと国のイメージ	国のイメージについての授業で白百合女子大学「哲学」講義と交流授業
5	11・17	世界の CM—日本の車	日本の車の CM を題材にしてクイズと話し合い

6	11・25	世界の CM—世界の車 1	世界の車の CM を題材にしてクイズと話し合い。米国車、東欧車など。
7	12・8	世界の CM—世界の車 2	日本の車の CM を題材にしてクイズと話し合い。欧州車等
8	12・15	世界の CM—アメリカの演出	米国の過剰な演出について考察
9	12・22	世界のクリスマス	世界でのクリスマスに関する CM を見ながらクリスマス文化を考える
10	1・12	イギリス—カンタベリー—大聖堂など	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
11	1・19	イタリア—ピサの斜塔など	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
12	1・26	フランス—モンサンミッシェルなど	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
13	2・2	オセアニア—オーストラリア、ニュージーランド	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
14	2・9	アジア—インド	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
15	2・16	アジア・後期のまとめ	世界遺産をみながら国を知る講義、一緒に動画を見て、そこで見て感じたものを感想に書きチャットする。
総括コメント			
前半は世界の動画を見てもらい、様々な文化に触れ、後半は硬派な世界遺産を題材にして、自分の言葉で感想を述べてもらった。歴史にまつわるものに敏感に反応することから、歴史と建造物を中心に話を展開するのが有効であるとの感覚を得た。まだまだ世界の勉強は続けたいとのことで、さらなる工夫をしていきたい。			

レクリエーション

2021 年 12 月 22 日 (水) 午前 11 時～午後 2 時

場所：東京都の野菜市場「大田市場」及び羽田空港
参加者：岩村和斗さん、ご両親、引地達也（大田市場

では就労継続支援 B 型事業所みんなの大学校大田校
スタッフがサポート)



大田市場の見学の模様



就労

継続支援 B 型事業所みんなの大学校のニラ作業



羽田空港の展望デッキで飛行機を見る岩村さん

4-4-3 松本勇成さん

松本勇成さんは 2000 年生まれ。早産、低体重で産まれ、乳児の際にけいれん発作を起こした。低酸素脳症が代表的な病名で人工呼吸器を付けて 24 時間の看護が必要である。小学校 6 年から訪問学級となり特別支援学校の高等部を卒業した。卒業後は医療施設付帯の通所サービスを利用しながら、訪問看護や入浴サービスを受けている。身体を動かすことも発話も不可能で視力もない。家族や支援者がその表情の変化や脈拍などから状態を探り、必要なことを言葉にして伝えてコミュニケーションを行っている。訪問看護の福祉サービス事業所に特別支援学校の担当教諭が教員を辞して転職したことから、訪問看護で学びを取り入れる方針から「みんなの大学校」に要望が出され、週 1 回の訪問授業が始まった。

当初は通所する医療施設で講師が訪問し授業する予定で現場の看護師らも受講をきっかけに院内に「学び」による社会との接点が増えていくのを喜んでいたが、コロナ禍により感染リスクの高い重度疾患のある方々のいる医療施設に外部からの入場が禁止されたことで授業が成り立たなくなった。さらに自宅の訪問も自粛する必要があるためコミュニケーションは遮断された状態となった。

この中で訪問看護の支援を受けながらパソコン環境を整備し、2020 年からは訪問看護のスタッフがボランティアの形で関わり、松本さんは就労継続支援 B 型事業所の利用者として在宅で外部とズームを使ってコミュニケーションを取りながら創作活動を週に 2 度、2 時間ずつ行う社会参加を可能にした。

この活動は青森大学の教員の目にとまり、この教員のゼミ学生とのオンライン交流につながり、青森大学でぬいぐるみと観光名所を一緒に写真に収める「ぬい撮り」サークル所属の学生の提案で、松本さんの枕元にあるぬいぐるみを身代わりとして青森を旅し、写真に撮って報告する企画を立ち上げ、青森に送ったそのぬいぐるみと青森の観光名所の写真をオンラインで披露するなどの交流も始まった。交流の模

様はNHK 青森放送局の取材により 2021 年 1 月、同局のローカルニュースとしても取り上げられた。

これはオンラインでのコミュニケーションの可能性を模索した上で周囲の支援者が実践し、その動きに反応した人たちがつながり、当事者の社会参加への窓が開かれた事例と考えている。本事業の全 10 回の講義内容は以下である。埼玉県川越市の自宅で講義。訪問ヘルパーの熊谷瞳さん(元特別支援学校教諭で松本さんの担任)、母親も同席し共に学ぶスタイルである。

	テーマ	内容
1	ことばのせかい 1	身の回りの言葉「単語」を発し、その反応を見ながら、その言葉に関する対話をヘルパーや家族と展開。
2	ことばのせかい 2	身の回りの言葉「単語」を発し、その反応を見ながら、その言葉に関する対話をヘルパーや家族と展開。
3	絵を描く 1	いろを選んでもらって指につけて画用紙に描いていく創作活動をヘルパーの力を借りながら行う。
4	絵を描く 2	いろを選んでもらって指につけて画用紙に描いていく創作活動をヘルパーの力を借りながら行う。
5	絵を描く 3	いろを選んでもらって指につけて画用紙に描いていく創作活動をヘルパーの力を借りながら行う。
6	青森大学と交流 1	青森大学の鈴木ゼミの学生と交流講義を行った。それぞれが自己紹介、
7	青森大学と交流 2	ヌックンの青森の度とその写真の発表から交流を行った。
8	青森大学と交流 3	ヌックンが青森に郵送し、青森を旅する様子を写真に収め

		たゼミ学生がその写真を介しての交流を行った。
9	絵を描く 4	ぬいぐるみのヌックンを描いた画用紙に色付けを濃厚に行った。
10	今年を振り返る	今年の活動を振り返り、面白かったこと、楽しかったこと、話を展開した。

松本さんの講義の様様



松本さんが創作した作品

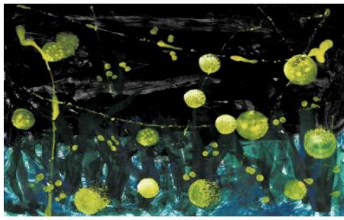
【完成した花束の作品】



- ・タイトル「花束」
- ・フィンガーペイントの作品です。
- ・指に絵の具を付け、感覚を経験出来るようにしました。
- ・黄色のブラッシングは本人がこだわりを見せました。完成にするか聞いても反応が曖昧だったため、今まで使っていた道具を順番に見せた結果、ブラッシングを選びました。

3. 作品紹介

①意思表示

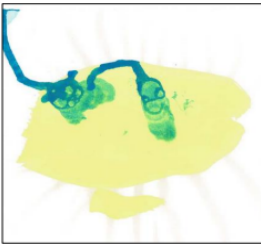


・タイトル「虫」
・本人からの意思で作品を作り上げるために、一つひとつ質問をしながら制作しました。
・初めて取り組んだ作品でしたが、反応が多く見られて本人が「自分の外側を意識している」ような様子だったのが印象的でした。

例えば、

- ・描きたいものを決めて頂くため、何種類か写真をお見せして選択肢を提案
- ・色合いや描く位置等を、支援員が見本を作ったり指さしをしたりして選択肢を提案

②感覚と結果をつなげる試み



・手を使うことが出来るようスポイトを使用し、つまんで絵具を押し出すことで色を混ぜる体験をしました。

・つまむときの指の刺激で色が出る事や、他の色と混ざって変化する結果を体験して頂く試みをしました。

青森大学との交流

<学生との交流の写真 (zoomで実施)>



ゼミとの交流。



自己紹介している様子。

<Instagramに投稿して頂いた写真>



<青森大学到着時の写真>



4-4-4 今後に向けて

重度障がい者が「学ぶ」機会を保障するには医療との連携が必須である。人工呼吸器やたんの吸引など日常的なケアを受けながらの「学び」には家族やヘルパー及び訪問介護等のサービス事業者の協力体制を確保しなければならない。岩村さんは家族が対応し、松本さんは訪問介護事業者がボランティアとして対応したことで、学びの確保に至っている。

今後の展開に向けては、本人と日常的なケアをする方が「学び」の時間の確保と関連するケアの継続をする体制を構築することを提示する必要があるだろう。その上で本人の特性に応じた学びのプログラムが検討できることになる。

来年度は本事業を受けてプログラム希望の特別支援学校の病棟学生の卒業生や自宅での医療的ケア者、重度障がい者の通所施設でプログラムの受講希望者が10人以上いるため、それらの方々を結ぶプログラムをオンラインを組み合わせ実践し、より広く「学び」を提供したいと考えている。

4-5-1 重度障害者向けのフォーラムの開催

昨年の第一回目に引き続いて「第2回医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」が国立オリンピック記念青少年総合センターセンター棟102室をメイン会場にしてハイブリット型で実施した。参加費は無料オンライン参加者は182名、会場参加者は35名であった。開催の呼びかけは以下である。

「いつでも、どこでも、だれにでも、学ぶ喜びを！」を合言葉に、医療的ケアの必要な方々の学校卒業後の学びを支えてきました。学ぶ喜びが、可能性の芽を育て、生命を強めています。その笑顔やまなざしが、人を動かしています。学び続けたいという願いを叶える機会と場を「ひろめる・深める」ことが私たちの使命です。本フォーラムでは、これまでの活動を紹介し、参加者が「つながる」ことを目指しています。ご参加のほど、よろしくお願いいたします。

概要は以下である。

日時：令和3年11月29日（金）午前11時～午後3時30分

場所：国立オリンピック記念青少年総合センターセンター棟102室

（〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1）

主催：一般財団法人みんなの大学校、重度障害者・生涯学習ネットワーク

対象：都道府県生涯学習関係部・課 区市町村生涯学習部・課、医療的ケア児者の関係者（本人・保護者、特別支援学校・福祉施設等）その他

目的：

（1）国の障がい者の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。

（2）学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。

（3）学校卒業後の訪問型生涯学習の制度化に向けた発信を行う。

参加費：無料

フォーラムの進行は以下の次第で行われた。

司会 引地達也（一般社団法人みんなの大学校・学長）

11時 主催者挨拶

飯野順子（重度障害者・生涯学習ネットワーク）

11時10分～11時40分

行政説明「障害者の生涯を通じた学びの充実に向けて」

井口啓太郎（文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室）

11時40分～12時

基調発言「重度障害者の生涯学習の現状とこれから」
菅野敦（東京学芸大学教育実践研究支援センター特別ニーズ教育支援部門名誉教授）

12時～13時 昼食休憩

13時～13時40分

実践・活動紹介

相澤純一（NPO法人訪問大学おおきなき理事長）

倉本雅代子（東京都渋谷区重症心身障害児（者）を守

る会・訪問大学おおきなき）

荻田知則（愛媛大学教育学部教授）

13時50分～15時20分

発表及びシンポジウム

司会 下川和洋（NPO法人地域ケアさぼーと研究所理事）

（1）本人の思い・家族の願い（20分）

「本人のニーズと家族の願いに応えた親の会として取り組み」

安部井聖子（東京都重症心身障害児（者）を守る会会長）

（2）福祉制度の活用（20分）

「就労支援継続B型を活用した学びの支援」

内田崇祥（就労支援継続B型事業みんなの大学校・職業指導員）

鈴木美恵（就労支援継続B型事業みんなの大学校・サービス管理責任者）

（3）自治体の取り組み（社会教育等の活用）（20分）

「社会教育に位置づけた学びを福祉制度の活用で支援」

石丸明子（新宿区福祉部障害者福祉課支援係主査）

藤原千里（NPO法人ひまわり Project Team 理事長）

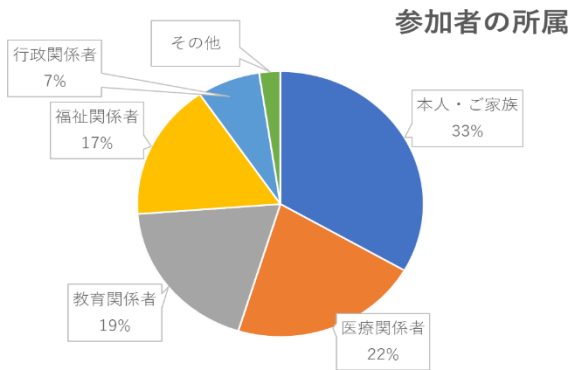
（4）シンポジウムテーマ「重度障がい者への生涯学習の制度創設に向けて」（60分）

安部井聖子、鈴木美恵、石丸明子、藤原千里、井口啓太郎

（5）講評 菅野 敦（東京学芸大学名誉教授）

15時20分～ 閉会挨拶 引地達也（一般社団法人みんなの大学校）

4-5-2 アンケート回答



質問1 文部科学省の行政説明について感想やご意見を自由にお書きください。

・説明の時間が短いように感じるほど盛りだくさんな内容でした。紹介された Web サイトは、できれば QR コードで表示してもらいたかったですね。

・文科省としての取り組みが進んでいる事がわかりました、ありがとうございました。

・頂戴している資料に含まれていないスライドがあったかと思しますので、別途ダウンロード等できればありがたいです。

・資料に対して時間が少なすぎたような気がします。もう少し具体的にお聞きしたかったです。

・これまでの取り組みについてまとめてくださっていて、わかりやすかったです。

・インクルーシブ教育を広げてもらいたい

・お声がよく聞き取れなかったです。今後の展望をよくお聞きしたかったです。できないことはできないとして、何ができるのかをはっきりしていただければ前進すると思います。

施策はまだ始まったばかりという感想を持ちました。

・所用ありまして、拝聴できませんでしたが、以前より井口さんがお話しされている文科省がすすめる生涯学習について、地方自治体巻き込んで動く大切さを感じます。在住市（東村山市）は、知的障害者の余暇活動の場（障害支援課）と青年学級（教育委員会）となり、重度心身障害者は、想定されておりません。国での縦割りが、やはり地方自治体でも同じなのだと感じます。学び＝教育だけではない、生涯学習

の個々の学びを充実させるには、行政が連携していただき、個々がどのようにしたら学びの場がもてるのか、障害種別を特定せず、一緒に柔軟に考えていただきたいなあ切に願います。

・時代が変わって来ているので、これからの時代に合う ITC 機器の利用や指導者の育成なども含めて、生涯学習の意義あることに支援して頂きたい。

・普段は目の前の利用者に対する支援のことに精一杯なので、全国に目を向けたときに、同じ趣旨の取り組みをされている団体がどこにどのくらいいらっしゃるのか等、体系的に知ることができました。特に資料中にあった「個別的教育支援計画に「生涯学習」を位置付けた上で、進路先の企業や福祉施設等へ適切に引き継ぎ、活用」という部分に、将来生涯学習支援が「当たり前」になる時代が来るのではという希望がみえました。

・取り組みや考慮されている事はわかりましたが、重心の生涯学習はまだまだこれからなんだと感じました。

・時間が短く、深い内容までは行かなかったのですが、全体的に今の行政の体勢が分かりました。もっともっと学びの場所が全国に広がるにはどうしたら良いのか、その具体的な掘り下げた内容が次回ありありがたいです。

・10 時からの他の ZOOM 学習会と重なってしまったため途中参加で聞けなかった。

・わかりやすいお話しでよかったです。

・地方自治体の社会教育・生涯学習関係施設を障害者の生涯学習推進の基盤にしていく取り組みに期待します。

・時間の関係からでしょうが、少し早口だったので、もう少し時間を多くとってもらえたらゆっくり聞けるので良かったです。

・国は生涯学習にも生産性を求めているのかと感じてしまいました。

・重い障害があっても、可能性を信じて心を潤す生涯学習支援の必要性をどう伝えたらいいのか…親として考えさせられました。

- ・お話は立派です
- ・文科省として、障がい者の生涯学習について取り組まれていることを今回のフォーラムで初めて知ったので、内容をしっかり見直して勉強したいと思います。
- ・前々から何故、障がい児（者）の大学がないのか疑問でした。
- ・行政は周りが動かないと動かないことを痛感しました。
- ・5年が経過し一歩ずつ進展していることが分かりました。どう進めていくかと率直な悩みもうかがえ、これから私達が何ができるか考えていきたいと思いました。
- ・国全体として大きな流れが理解できました。
- ・正直行政側がここまで力を入れてかかわっているとは驚きました。もう扉は開かれている、あと一歩なのに何か足りない（壁）なのかと考えていました。
- ・仕事の関係で遅刻したためほとんど聞くことができませんでした、申しわけございません。
- ・短時間であれだけの内容を話されていて感心しました。
- ・丁寧ではありましたが、医療的ケア児（者）の生涯学習の保護について文部科学省としての明確な姿勢が見えにくかった。
- ・とても分かり易く、お話を頂きました。ありがとうございました。

質問2 基調発言「重度障害者の生涯学習の現状とこれから」について感想やご意見等を自由にお書きください。

- ・生涯学習の目的を改めて確認することができました。
- ・菅野先生のお話、もっとお聞きしたかったです。
- ・ゆっくりと時間をかけて説明を受けたいです。
- ・「学びによる態度の勉強、楽しさを知る」というキーワードがよかったです。
- ・もっとお話をお聞きしたい内容でした。
- ・医療ケア児も学校に行く権利を保証してもらえた

- い
- ・行政、福祉関係、教育関係の「愛」だと思いました。新宿区行政のような今の法律でできることを探るというのは愛だと思います。
- ・重度障がい者の場合、体調の変化を考慮しながらの学習を考えなければならないと思います。医療関係者との連携も必要な視点だと思います。
- ・拝聴できませんでした。
- ・重度障がい者の現状のお話を伺い、大変勉強になりました。
- ・先生の語りがとても聞きやすく、また特別支援学校に勤めていた経験があるので、その時の場面を思い返しながら拝聴しました。主体性には段階がある、という視点は新しい発見でした。また、年齢によるニーズの変化に対応するプログラムが必要というお話では、ではどうしたら自分の活動がプログラム化できるのか、どのように深め、判断していったらよいかという課題をもつきっかけになりました。
- ・主体性を形成されるまでの流れがとてもわかりやすい。我が息子はどの程度の位置なのか判断しやすく、主体性に持っていくには何が必要で何が足りないのかがとても明確に描かれていた。その先に目指すもの、そこに行き着くにはたくさんの社会の人たちに支えられないと進まない現実があるのだと感じました。その結び(繋がり)をどう見つけていったらいいのか、課題です。
- ・こちらも途中参加のため、よくわからず・・・残念でした。
- ・オープンカレッジ東京の26年間の実践について改めてお話を伺う機会があれば、ありがたいです。
- ・こちらも時間が少なく、もっとお話を聞きたいと思うような内容でした。
- ・「学ぶ・楽しむ、くらす、はたらく、人とかかわる」。たとえ重度の障害があつたとしても、この4つは生活を豊かにするためには絶対に必要なんだと改めて教えていただきました。
- ・お話はすごいです。
- ・意思伝達のための学習を自分の娘と実践していま

す。OT の時間を利用してリハビリの先生と相談しながら行っているので、生涯学習の一環として学習している様子に驚きました。

学校を卒業してからの人生の方が長いことを考えると、親がしてあげられることは限られるし、日々の生活で手一杯です。大学や NPO 法人などの機関での協力があれば、心強いです。

・生涯学習を行う中で制度外のということもあり支援者や団体のボランティア活動、家族の負担で補われている状況が良く分かった。

・菅野先生のお話をもっとうかがいたかったです。
・分かりやすく勉強になりました。2 時間拝聴したかったです。学校の授業では「グループ」が主になり、(重心の部分)、1 対 1 でその人の気持ちを引き出し、広がる事が出来ているように思います。気持ちを引き出し、広がる事が出来ているように思います。「ライフステージ」に沿ってプログラム、身体的ライフステージはイメージできるのですが、学習としてはイメージが付きませんでした。詳しく聞きたかったです。

・「主体性」の考え方で言葉で整理していただき、勉強になりました。自分が取り組んでいることをきちんと言語化し、示していくことが大切と思いつつ、なかなかできていません。反省しきりです。

・主体性を育てることを漫然として取り組めていませんでした。自発性に取り組める→主体的に取り組めるというプロセスがなされて、とても具体的になりました。

・菅野先生の構想が一つの未来像であると思いました。行政の努力に期待しながら、自らの実践を重ねなければならぬと認識しました。

・様々な立場の方のお話を伺え、勉強になりました。
・かなり盛り沢山の内容をお話頂きましたが、もっとじっくり聞きたかったです。せめて 1 時間は欲しいような。

質問 3 午後の部「実践・活動紹介」について感想やご意見等を自由にお書きください。

・訪問大学おおきなきにおける実践は内容もさることながら、その取組を通して本人と周りが良い方向に変わってきた点が価値高いと思いました。

・IT を取り入れた学習状況、大変学びとなりました。ありがとうございました。

・各登壇者の方々ありがとうございました。

・様々な取り組みが確認できました。

・守る会安部井様の熱量がとても伝わりました。

・素晴らしい好事例が多く、全国に広がることを願っています。

・視線入力の実際、利用アプリ、を知ることができた。

・保護者の方の、創意工夫、ご本人の意思わかってもらう努力に感動しました。

・「本人が本当にわかって発信していること」を受けとめることが大事、心に留めたいと思います。

・大変よい実践をされていると感じました。このような実践例を奉仕活動をされている団体にみせることで、さらに広がるのではないのでしょうか。

・コンピューターの利用等さまざまな新しい学習教材の開発がなされていることを知り、今後に期待できると感じました。

・倉本様の発表で「ほんとうにわかることのたせつさ」のお話はご本人はもちろんのことですが、支援する家族にとってもとても大事なことで取り組まれた内容とともにこの言葉の表現が心に響きました。

・石丸さまのように、熱意ある立場の方が、いらっしゃると、大きく変わってくるのだと思いました。

・以前、新宿在住の方の移動支援の支給時間を聞いて、在住市とのものすごい違いに愕然としたこと、思い出しました。

・地域格差を是正するためにも、国の支援も必要であると感じました。

・皆さんの活動に感動しました。色々な地域で少しでも広がっていく事を願います。

・各施設の活動の流れや内容を詳しく知ることができ、大変勉強になりました。とくに、ほんとうにわかることの大切さというのは、とても共感する言葉として印象深いです。また、コロナ禍でも学びを届ける

ための工夫の仕方というのは様々あるということ、実際の様子を見ながら学ばせていただきました。

・活動内容などが1番興味があったので、1番心に残りました。実際に訪問学習しているところや内容の紹介が分かりやすく、熱い気持ちが伝わりました。

・明確に本人が意思表示をしている事を家族がどうやって読み取るのか、いつも一緒にいるとなんとなく顔の表情でわかるが、この『ほんとうにわかる』大事さそれに気づくきっかけが未だ見つけられていない感じです。学校を卒業しても、大学生や社会との繋がりがあがる生き方は本当にすごいです。自分の息子がその道に歩いていくには、今何をしなければ成らないのか、本人の『好き』を知り、どうしたらそれを伸ばし、強みに代えられるのか、とても考えさせられる内容でした。(我が家は後3年で卒業。気持ちカウントダウンが始まっています。)

・子どもの可能性を見極めるということに感動しました。

・倉本さんのお子様の成長がすばらしかったです。うちの娘も是非視線入力を学習させ、学びの幅を広げたいと思っています。

・各事例を聞かせていただき、参考になることが多かったです。

・障害の重い人のゆっくりとした成長を支援する5年間の実践は保護者や学校の教員にも聞いてほしいですね。

・息子さんの可能性を信じ、時間をかけて意思の環境を整えている倉本さんの発表がとても興味深い内容でした。

・ステキな話をありがとうございました。

・皆さんの積極的な活動には感心しました。私も頑張らねばと勇気をいただきました。

・実際の場面での様子が分かりやすかった

・いろんな工夫をして行われていることを知りました。いかに制度内に収めるかによって幅が広がるんだろうと思った。

・日常の中で、子供と向き合うと「わー」と成長を感じることもありうれしく思いますが、その先を考え

たことがありませんでした。関わる人に分かってほしいと思っても・・・親が分かっていれば代弁者として私が伝えれば支障はないと思っていましたが、本人はきっと自分で伝えることも望んでいるかもとハッとさせられました。倉本さん親子の努力とあきらめない気持ちに考えさせられました。

・重度の医ケア児が一生学習できるよう、そしてコミュニケーションがとれるように誰もが受け入れられるような環境が整うと良いと思いました

・みなさんの活動をきき、力をもらいました。

・母は強し！！ICTの力はすごいですね。そのようなスキルを持っている人の力を事前に借りられるようにするといいのですが。

・発語のない方の「ほんとうにわかること」をどうとらえたらよいかを模索中です。これは家族としてでもなかなか難しいので行政の取り組みでは、どういう方法があるのか……。みんなの大学校の取り組みの中でとても丁寧に障害が重い方の反応が(舌の動きなど)を拾っていることで拝見し、行政の取り組みではここまで時間をかけることの必要性を上司や予算担当者に理解してもらうことの壁について考えさせられました。先は長い・・・

・「訪問大学おおきなき」で学んだことで話されていた、倉本さんのきめ細かな、指導力、素晴らしい。

・このフォーラムだけのものにせず、広く発信していくといいなあと、登壇者の熱量を伝えられるといいですね。やはり活動の発表は20~30分くらい欲しいところですね。

福祉分野の実践に工夫と努力を感じました。また、「本人の想い、家族の願い」にインパクトを受けました。一層この声を大きくすることの大切さを実感しました。

・具体的な取り組みを多く知ることができ、よかったです。

・守る会のお話にはぐっとせまるものがありました。制度化していくには協働がかかせません。大変貴重な機会となりました。

質問4 午後の部「シンポジウム」について感想やご意見等を自由にお書きください。

・菅野先生のお話、学びとなりました。訪問看護では長きにわたり関わるので、発達支援のポイントを踏まえながらの支援を心がけたいです。ありがとうございました。

・重症児者が生涯、学べる環境を整えたいと思います。

・やはり取り組んでこられた方の生の声は、とても参考になります。

・それぞれの取り組みを聞き、あまり情報が入ってこない分野のため勉強になりました。

もう少しお時間があっても良かったのかと思いました。

・居宅介護型生活介護ができるといいなと思います！

・あらゆる機会を捉えて、生涯学習について皆んなで訴えていくことの大切さを改めて感じました。

・みんなの大学校さんの発表として、弊所と一緒に活動している利用者様の活動の様子を取り上げていただきました。盛りだくさんの内容をまとめていただき、ありがとうございました。また、シンポジウムは率直な言葉で討論されていて、そこが聴きたいという部分のお話がたくさん出たので、もっと聴きたかったです。

・少し聞き取りにくく、分かりづらかったように感じました。もう少し時間をかけた内容だと良かったように思いました。

・新宿区の取り組みはすごいと感じました。ただ、まだまだ改善してより情報が共有化して動きやすい環境になるのではとも思いました。PDCA サイクルで、よりスムーズにわかりやすく利用者が選択できるようになるといいですね。

・皆さんの活発なお話に引き込まれました。勉強になりました。

・安部井会長の発言で、専門会議に参加して、余暇ではなく学びである。としっかり行政へ説明するという理解と共感を得るための説得力と熱意が大切であ

ることがわかりました。

また、すでに行政や大学等のとりくまれているところは素晴らしいと思いました。

・本人と家族の思いやしてほしいこと等気持ちをしっかりと支援者に伝えることができれば、それを実現してあげたいと思っていただける、その双方の思いやりというか関係性が良ければ、学べること体験できることが増え、子供たちの生活が充実し、子供自身が生きがいを感じられるようになると思います。

・福祉側からのアプローチ、教育側からのアプローチについて考えさせられました。

・ひまわりプロジェクトの現行の教育・福祉・労働の制度を学習者のニーズに応じてじわりじわりと活用できるように変えていく地道な取り組みが印象に残りました。

・新宿区が羨ましいです。

・区市町村によっての差や、制度を切り開くことの大切さを感じた

・活動している団体同士、行政が話合える機会があればいいなと思いました。

・就労支援 B 型での障害の重い人の学びと仕事を結び付けた内容に驚かされました。

考え方を変えるといろいろなアイデアが出るのだと感心しました。

・生産性がなくても本人の希望に沿った学びの場が増えるとうれしい。

・教育と福祉もっともっと混じわっていけると良いと思いました

・みんなの熱量が制度を作っていくという言葉が響きました。

・制度は生活を守るためにあるものと、新宿区のお話を聞き思いました。色々な活動を知ることが出来て頼もしく思いました。

・時間が短かったですね。行政の人も積極的にアイデアを発言されていて、良かったです。

率直な発言がきけて、良かった。参加した意味があったかと。

・全てのパネリストの話題に大きな学びがありまし

た。もっと聞きたいです。

- ・より、話が深まり、よかったです。
- ・やはり時間が短い、色々な事例が制度を作っていくという流れが、出来上がっていくといいですね。

質問5 今後への期待や課題などご意見をお書きください。

- ・生活介護事業所から在宅者への訪問支援が公費で賄えるよう行政の支援が必要だと思われまます。
- ・少しずつ進んでいる事は間違いないと実感です。スピードアップするための要因は、やはりたくさんの方の声でしょうか。
- ・所属施設は奈良にあります。
- ・隣地域で活動されている事業所があれば、是非とも見学やお話をお伺いできればと思います。
- ・やはり厚労省と文科省の連携が課題だと思います。
- ・現実には、卒業後の学び、成長についての社会の仕組みはまだまだだと思っています。今日ご登壇いただいた皆様と共に、1歩でも進める活動できれば、と思います。
- ・本日はありがとうございました。
- ・自問自答しながら、生涯学習における学校の役割について深く考えることができ、大変よい時間をいただきました。
- ・一人の人間として対応
- ・対象者が理想の形を明確にすること、それに対して国がどこまでやれるかを明確にすること、行政・福祉・教育でできることを明確にすることと思いました。不安定ですが、どうしてボランティアの方(社協と連携)を講師として巻き込めないのか(巻き込まないのか)をお聞きしたいと思いました。
- ・入院中に本人が時間を持て余すことがあります。見舞いに行った時に数分間で楽しめるようなベッドサイドで出来る音楽や朗読等しか思いつかないのですが、何か教材があれば親の会等に紹介してもらえれば方法があればと思います。
- ・自治体間の格差なく、どこに住んでいても望めば同じように生涯学習が受けられるようになって欲しい

いですし、このフォーラムが発展し続けることを願っています。

- ・娘は医療的ケア児者ではありませんが、自分の意志を何らかの手段で明確に表出する手段が、今はまだありません。
 - ・10年以上、障害児基礎研究会(筑波大付属大塚特別支援学校)に、指導していただきに月一回通っております(コロナ禍で2年近くお休みですが)。
 - ・現在、21才ですが、18才を過ぎてから、成長(見通しがもてるようになるなど)を感じています。様々な経験や人々との交流を通して、また基礎研での学びを通して、力をつけているようにも感じます。それは、単なる余暇活動にとどまらないと、実感しております。
 - ・それぞれの学び、社会経験=生涯学習が望めば可能になると、いいなと願っております!
 - ・何歳になっても人は、成長すると思いますし、本人はもとより家族にとっても、そのことが生きる上での楽しさや生きがいに繋がると思うので、その為に何をサポートすれば良いのか、少しでも前に進んで欲しいです。
 - ・障害の有無、程度(軽度重度)に関わらず、そもそも「生涯学習」って何だろう?と改めて疑問に思いました。例えば自分自身は生涯学習の機会があり学んでいるのだろうか?
- 安心で安定した生活(医療や福祉)があってプラス「生涯学習」(教育)なのか、学ぶことも生活の一部なのか。
- ・「余暇活動ではない」ことには共感できます。就労Bでやりたいという本人の要望があったという話もありましたが、学びたいという気持ちもあるけれども、働きたい、稼ぎたいという気持ちもあると思います。「日中活動」という言葉もなんだかしっくりこないのですが、「生涯学習」とは? 分類されるものでもないのかもしれませんが、行政的には福祉なのか教育なのか。地域差がなく国の制度で事業ができるとよいと思います。
- いろいろな方(当事者やご家族)がいらっしゃると思

いますので、状況や考え方、要望もそれぞれだと思いますが、発達保証 人生の豊かさ 地域や社会とのつながり・・・ いろいろなことを考えさせられました。

・今回初めて参加しましたが、行政・教育・福祉の現状を知るとても貴重な機会になりました。今後もこのフォーラムが続いていき、そのたびに参加していきたいと思いました。

・弊所のことでこちらに書くものか分からないのですが、所属している NPO 法人ぽぷりでは、障がい者の訪問介護事業をおこなっています。その中で訪問カレッジとうたい、元特別支援学校教員の支援員が埼玉県「居宅訪問介護」の中の重度訪問介護のサービスを用いて学びの時間を設けています。身分としてはヘルパーになるので、今日のフォーラムにはなかった立場ではないかと思えます。生活介護事業所でもなく、福祉制度を利用しているため、身銭を切っているという訳ではない例です。(ただし、就労継続支援 B 型利用時はボランティアでの支援です) また、ヘルパーなので、通院やその他の生活部分にも深くかかわり、一人の利用者の学びも生活も一貫して支援することができます。

ある意味教育と福祉の融合のひとつの立場として何かできることがあるのではないかと考えていますが、まだ具体案がまとまらないところですし、現状支援員は 1 名なので、同志が複数名いらっしゃる大学や民間の施設の様に大きなことをするだけの力がありません。今後実践を積みながら、フォーラム等で勉強をしたり、機会があれば全国の先生方のお話を伺ったりして、生涯学習に関わっていきたいと思えます。

・飯野先生の「あなたがやるんです」という言葉にとても勇気をいただきました。"

・重心の高校卒業後の選択肢が無いことを訪問看護で受け持っていた時に「もっと選択肢があればいいのに」と思っていました。

・司会の引地さんのブログから、みんなの大学校を知り、生涯学習についての取り組みなどを知り、今年のフォーラムでも学び、今回に繋がっております。

・医療が必要な重心の生涯学習！！とても大切な必要な事だと思います！医療側からも取り組みにもっと、参加出来たらよいのになと感じます。

・今回初めて参加させて頂き、生涯学習は今こんなに進んでいる事を知り、驚きと期待とそして、もっともっと自分自身が知らなければならぬと強く感じました。どうしたら学びの場所がもっと増えるのだろうと改めて感じました。今回は貴重なお話を有難うございました。

・これからも参加させていただき、勉強していきたいと思えます。

・生涯学習への行政の理解、多くの方からの応援、支援が得られることを望みます。

今後も継続していただけるようお願いいたします。

・それぞれの地域にあるリソースを改めて調べる必要を感じた。既存の制度を重度の障害がある人のニーズに応じて活用できるように働きかけていこうと思えます。

・生涯学習が制度として認められる日がくることを願います！！

・生涯学習支援は、日中生活介護(通所)と同等だと思えます。

・訪問カレッジ学生の息子にとって、今では、通所での個別支援の代わりとなる支援が生涯学習の時間です。

・通所の実態をもっと把握して、高額な利用料が個々の支援に活かされているのか…誰かに見極めていただきたいと感じる今日この頃です。"

・どうしても、家族が頑張らなければならないが、無理がある。知識がなく難しい。

今後も実践例の紹介などを含め、このようなフォーラムを開催して頂きたいと期待しています。私が住んでいる地区ではこのような活動がほとんどないように感じます。団体として立ち上げに至った経緯や運営方法なども教えていただきたいです。

・支援学校卒業後、生活介護に行くとなると生活介護でそのまま年令を追ってってしまう。

・そうすると、生活介護も動きがあまりなく不足し

てしまうことになってしまいます。

その間に大学(生涯教育)を入れることによって生活介護にも動きが出てくるのではないかと思います。

・学びたいと思っても地域格差があります。自分の地域で学べる場所があればうれしい。

行政と親の会でできるといいですね。

・生涯学習の取り組みをまだ知らない重心の方々が多いため広報活動もして欲しいと思います。特支の卒業時に伝えてもらえないでしょうか→もちろん、私も伝えていきます。

「行政のしがらみ」という部分に対して、具体的にどのようなしがらみがあるのか知りたかった。

・よく卒業生の進路のことで特別支援学校の先生より問い合わせが来ます。「この地域のここにあります。」と紹介できるセンターがあるといいのですが。

「ネットワーク」をその様に考えても良いですが。

・どの発表も少し時間が短かったため、伝えきれない部分がある程度埋めることができたのかなと思いました

・養護学校の義務制、施行された際に障害児者の教育の原点を話されました。その時と同じように障害の重い人の生涯学習は生涯学習の原点といえるのではないかと思います。手をこまねいていると。人たちの支援をしている私たちは努力しなくてはと思いました。

・福祉と教育の共通のフィールドがしっかり作られるように、今回のフォーラムを拡大、継続して欲しいです。

・次回もお話を伺いたいです。

・福祉と教育の狭間というのが印象的、そこに生きている当事者の気持ちを考えたい。

・重心の場合、時間がない、今やらなきゃいけないという引地さんの言葉が心に残りました。その通りですね。

5 連携協議会

5-1 連携協議会の実施体制

①連携協議会の構成員

山本登志哉；一般財団法人発達支援研究所所長

佐光紀子；文筆業・翻訳家

本多美子；国分寺市本多公民館館長

石丸明子；国分寺市福祉部障害福祉課長

河合俊通；株式会社クラ・ゼミ障害福祉担当

水越真哉；みんなの大学校学生、当事者

下川正洋；NPO 法人ケアさぽーと研究所理事

②連携協議会事務局構成員

引地達也；一般社団法人みんなの大学校代表理事

河辺朋久；一般社団法人みんなの大学校事務局

上村真弓；一般社団法人みんなの大学校事務局

内田崇祥；一般社団法人みんなの大学校事務局

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築の実施経過

4月

ウェブによる講義・訪問講義・連携協議会委員への打診と承諾

5月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

6月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）

→委員が共催として準備開始

第一回連携協議会

7月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）

→委員が共催として準備

8月

オープンキャンパス及びレクレーション（東京都国分寺市）

→委員が実行委員として共催

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）

→委員が共催として準備

9月

オープンキャンパス及びレクレーション（東京都国分寺市）

→委員が実行委員として共催

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）

→委員が共催として準備

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

10月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

第二回連携協議会

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）

→委員が共催として募集や運営

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

11月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

重度障害児者の生涯学習を支援するフォーラム（東京都渋谷区）開催

→委員が主催、委員の出席

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

12月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

1月

ウェブによる講義・訪問講義→委員が講義・受講

共生社会コンファレンス→委員が共催者として運営

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

2月

訪問講義

最終報告会及び第三回連携協議会

共生社会コンファレンス開催に実行委員会中心に準備

→委員が実行委員として運営

3月

最終報告書提出

5-2 具体的な研究内容

【連携協議会開催の概要】

第1回連携協議会

場所：ズーム開催（コーディネーターは国分寺市本多公民館から出席）

日時：2021年6月25日午後4時—午後5時30分

議題：2021年度事業説明と検討 議事・進行 引地達也

会次第

1 はじめに 引地達也（本事業コーディネーター）

2 自己紹介 各自

3 度事業説明（ウェブ授業、オープンキャンパス、訪問授業、コンファレンス）

4 検討

5 事務連絡及び手続

欠席一下川委員

本事業の計画を説明し各委員からの自己紹介と専門分野などをふまえた意見交換を行った。事業の柱にそれぞれ委員が関わっていくことから、全体像を共有しながら各分野での留意点を確認した。

第2回連携協議会

場所：東京都国分寺市本多公民館及びズーム参加

日時：2021年11月29日午後4時—午後5時30分

議題：2021年度事業進捗の報告と検討、共生社会コンファレンスの進捗報告・検討 議事・進行 引地達也

会次第

1 はじめに 引地達也（本事業コーディネーター）

2 事業進捗報告

・ウェブ授業

前期後期の講義内容とその反応

・オープンキャンパス

国分寺市と西宮市をつないでのオープンキャンパスの参加者の感想等

・重度障害者の学習推進フォーラム

第二回のフォーラムの内容と感想

・訪問授業

3 コメント・質疑応答

・各委員からのコメントと来年度構想の素案等

4 共生社会コンファレンスの進捗説明・検討

5 事務連絡及び手続

欠席一佐光委員、石丸委員

4つの事業が進む中で、それぞれの事業の報告を行いながら、状況の整理と研究のポイントを協議した。ウェブ講義については現状の講義タイトルからさらに広く受講者を呼び込めるようなものが必要との指摘があり、特に知的障害者向けのコンテンツの研究を進める必要が示された。佐光委員からは芸術やアート分野での取組みも必要との認識が出された。オープンキャンパスではコロナ禍の中で出来る限りのことをしていることを評価していただきながらも、やはり地元の協力が必須であることが確認された。福祉サービスとの連携においては河合委員から「それを動かす人」の必要性が示された。

第3回連携協議会

場所：東京都国分寺市本多公民館及びZoom参加

日時：2022年3月2日午後4時—午後6時

議題：2021年度事業の最終報告

議事・進行・引地達也

会次第

はじめに：引地達也（本事業コーディネーター）

議題：

1 事業の最終報告

（ウェブ講義、訪問講義、重度障害者の学習推進フォーラム、オープンキャンパス、共生社会コンファレンス）

2 報告に対するコメント及び質疑

3 共生社会コンファレンスの報告と質疑

4 来年度の展望

5 意見交換

欠席一佐光委員

第三回連携協議会は日程の関係もあり最終報告会を兼ねて公開で行われ、本事業の受講者ら当事者も加わる形で行われた。コーディネーターからすべての事業の最終報告を行い、各委員からのコメントで本事業の総括と今後の課題を協議した。各委員のコメントは以下であった。

山本委員：講義をすることで自分も大きな学びを得た。特に重度障がい者の受講者への講義ではコミュニケーションを考える上で新しいつながりのきっかけとなった。

本多委員：オープンキャンパスを一緒にやることで市民が楽しいとの感想を得たことはよかった。もっと多くの市民に知っていただきたい。

石丸委員：充実した内容であったことを確認し、福祉サービスとの連携は今後の課題であろうと考えている。

水越委員：学ぶ側にとってはとてもバランスのよい内容で、このプログラムを通じて私が成長していると実感できるのが嬉しい。

河合委員：福祉サービス事業として学びを知ることが出来て、特に引地さんが事業所で学びへのレクチャーをしてくださったことは大きな成果だと考えている。

そのほか講義を担当したアルン先生、西田先生、西村先生、内田先生からもコメントをいただき、それぞれ「障がい者の学び」を模索することの難しさを感じながらも、大きな目標としてインクルーシブな学びを考える上で取組を継続することの大切さを表現し、今後の継続を強調した。

課題として以下を確認した

・ウェブ講義→ウェブでのコミュニケーションの特殊性からの障害特性に応じた対応の必要性、プログラム設定

- ・オープンキャンパス→地域リソースとの継続的なつながりと青年学級の活性化に向けた新しい取り組み
- ・訪問講義→関係者の発想の柔軟性/福祉・医療サービスとの連携
- ・医療的ケア者の生涯学習フォーラム→医療・福祉との連携

【連携協議会の体制について】

連携協議会はコロナ禍の影響などもあり、オンラインとのハイブリット開催となり開催回数も3回にとどまったが、委員はそれぞれ本事業でも役割のある立場でもあり、本事業が多岐のプログラムを行っていることから、それぞれの立場で見えるものに助言をいただきながら、一緒に動いて情報を共有する中で、連携協議会で全体の流れを確認しつつ、ほかの委員の意見もうかがってすべての事業を前に進めるイメージでこの1年を通じて適切なコミュニケーションの上で成り立ったと考えている。

【連携協議会委員の役割について】

連携協議会委員は連携協議会において事業全体を把握し、適所においてアドバイスもいただいた。委員は具体的な事業内容にも以下のように関わっており、実践をしながらの細部に対しての助言なども積極的に行っていた。

具体的な事業に関わる委員は以下である。

- ・ウェブ講義—講師として山本登志哉委員（前期15回、後期15回の講義）
- ・重度障がい者訪問講義—下川和洋委員（フォーラムの主催者及び訪問漕ぎ助言者）
- ・オープンキャンパス及び共生社会コンファレンス—本多美子委員、石丸明子委員（開催地として実行委員として運営）
- ・福祉サービスへの周知活動—河合俊通委員（運営する福祉サービスで「学び」の周知活動への対応）
- ・受講者・運営者として—水越真哉委員（当事者として講義及びプログラムに参加）

各委員のアドバイス等は以下であった。

氏名	助言等
----	-----

山本登志哉	発達心理学が専門であり、大学教員での経験を経て、障害者の学びに関しても就労支援等、社会へつなぐ観点から研究を行っている。本事業では実際にウェブでの講座を担当していただき、学生との関わりの中で適切な講座のあり方やプログラムの内容を積極的に議論した。
本多美子	委託団体の拠点自治体であると同時に、文科省の本事業を同市としても単独で受託し障害者の学びを展開している立場であり、オープンキャンパスやコンファレンスの開催場所としても適切な対応をしていただいた。
石丸明子	委託団体の拠点自治体であると同時に、文科省の本事業を同市としても単独で受託し障害者の学びを展開している中で、教育委員会を福祉側としてサポートしている立場として拠点自治体の福祉行政との関わりを検討した。
河合俊通	首都圏など全国で就労移行支援事業所アクセスジョブを展開する立場であり、母体は通信制高校や塾を運営している株式会社クラ・ゼミとして、支援が必要な人の支援と教育の可能性を探っていただき、コーディネーターには福祉サービスに学びを支援の一環として取り入れるべく、各事業所のスタッフに周知する機会を提供した。
水越真哉	当事者として学びによる人生が変わった実感をお知らせしながら、当事者は学びに何を求めているかと示していただき、学んでいる中での気づきを積極的に発言いただいた。共生社会コンファレンスでは司会を務めていただいた。
佐光紀子	翻訳家やナチュラルライフ研究者として社会で活躍する立場からインクルー

	シブとダイバーシティの観点から社会における障害者の生涯学習の在り方を指南していただき、学びと社会の接点、特に芸術分野における活動の展開について助言いただいた。
下川和洋	東京都小平市に置く NPO 法人を運営しながら各大学で特別支援について講義し、重度障がい者への訪問講義を行っており、昨年、共催で第一回の重度障害者の学習支援フォーラムを共催し、今年も第二回目を開催した。重度障害者の関係を中心に協働していただき、来年への展開に向けて効果的な協力関係を築けた。

特別支援学校の視点から助言をいただくために、埼玉県蓮田特別支援学校の進路担当主事の島村隆博教諭にはアドバイザーとして関わっていただき、引地が本年度、同学校の就労支援アドバイザーの立場であることから、日常的な連携で情報交換を活発にすることになった。

【メンバー構成】

連携協議会は、専門家、市民、当事者、当事者家族、自治体関係者から構成され、それぞれの立場から検討・討議しより良い運営を助言しリードしていくことを目標としたが、実際には本年度のプログラムが日々動いている中で大きな活動が定期的にあることから、その準備に集中してしまい、結局はオンラインで3回の開催となった。しかしながら、メンバーは各方面のプロフェッショナルであることから、この構成により、多角的より深くカリキュラムの妥当性を考えることに関して的確な助言を得ることができた。

今回の連携協議会の運営から具体的なメンバー構成として以下を中心に検討することが有効と思われる。

- ・地元自治体-福祉行政と教育業
- ・専門家及び研究者-教育学、福祉学、社会学の分野からそれぞれが望ましい

- ・教育関係者-特別支援学校の関係者、地元の大学や専門学校教員等
- ・民間事業者-障害者雇用を行う事業者や障害者に関する社会的窓口になっている企業
- ・福祉サービス事業者-就労系サービスや自立訓練系、訪問看護系などテーマによって選定
- ・当事者-できれば3障がいそれぞれで参加が望ましい

【今後の連携協議会の役割に向けて】

本事業での連携協議会は、事業全体のよい高い成果に向けて、教育プログラムの内容だけではなく、地域連携の在り方や講師・スタッフ・サブティーチャー、ボランティアなどの動き方、連携の在り方をそれぞれの領域の立場と知見から検討し、他地域でも展開可能とし、なおかつ教育的内容の優れた効果的なプログラム開発を確実にする役割を期待した。

連携協議会の委員は連携が必要と思われる自治体や団体、研究や教育に関する関係機関・企業の有識者で構成され、教育的観点からの意見をはじめ、受講者の立場、プログラムの展開のしやすさ、発展形のイメージなど、多角的な視点でプログラムを精緻化していく必要があると考えたが、実際には主業務として委員の仕事が出来る状況ではないために、事務局が判断及び検討材料として、プログラム内容をすべて提示し、無理のない範囲でプログラムの参加をお願いすることになる。その上コーディネーターが日常的にコミュニケーションを取りながら、連携協議会を意見や考えの共有と協議の場所と位置づけ、運営していくことが予算が限定されている中での連携協議会の最適な在り方と考える。

6 コーディネーター

6-1 コーディネーターの在り方

コーディネーターは事業推進役として中心的な役割として負担が大きい。上記の実施経過では表記できない日常的な業務を行っており、実際に事業を推進するのはチームで行うのが望ましいが、多くは予算が限られる中での運用になるため、負担は避けら

れないだろう。

今回、みんなの大学校長の引地達也が推進役として事業全般を統括し、事業全体の推進、予算管理、報告書作成など行うことになった要因は、みんなの大学のスタッフが就労継続支援 B 型事業所の運営スタッフに兼務をさせる形でチームを組んだものの、支援を日常的に行うスタッフは、要支援者の状態によって業務の負担が変わってくることで、人件費を確保できない本事業に時間が割きづらい状況になったことが大きい。

そのためにコーディネーターは経済的な負担がなく裁量権がある人間が行うことが事業推進の必須となるがこれが難しいことも現実である。

本事業におけるウェブ講義ではコーディネーターが全体を把握し自らも講義を行うことで、その講義の有効性や学生の生の声を聞くことで、有効なプログラムを検討できる状況を保障したといえよう。これらの把握の上で最適なカリキュラムの検討やボランティアの適正やその有効活用が初めて正しい議論に結びつくと考える。

ボランティア活用に関しては、障害者とのかかわり、という点でプロフェッショナルである必要性が語られがちであるが、誰でも、普通に、を目標とする以上、「プロ」である必要はないが、配慮の仕方に関しては一定の見識が必要であろう。この知見を得ていただくために、事前のボランティア学習も効果的だと考えている。

ウェブ講義に関しては、ウェブでの交流の仕方に工夫も必要であり、一般的なコミュニケーション能力だけではなく、メディアリテラシーも必要となってくるため、今回は継続性も重要なため固定のボランティアで運営することになったが、ウェブ上でのトラブル対応にも反応できる人材を育成する必要があると感じている。

さらに学生をボランティアとして交流してもらうのも重要なポイントである。「学ぶ」ことが本業である学生にとっては、インクルーシブ教育の在り方を考え、今後どのような社会を作っていくかの視点を

得ることは、社会にとっても、個々の人生にとっても非常に重要であり、今回の青森大学の自然発生的なつながりはボランティア育成のきっかけになると期待している。

・どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者の役割に適しているか

福祉学、教育学に加えて社会学の知見を持っていることが、地域で学びをコーディネートしていくのに役に立つことになる。具体的には以下の点が各分野であげられる。

福祉学

・福祉領域の基本として歴史的経緯と理念と深く理解していること

・福祉サービスの仕組みに精通していること

教育学

・教育の可能性を高く評価していること

・障がい者の学習に関する課題を理解していること

社会学

・社会のコミュニティ形成への見識が高い事

・障がい者と社会との接点において社会側の問題を考えられること

その上で「政治決定のプロセス」「経済的自立の枠組み」「組織運営の基礎」「コミュニティ形成における市民の役割」等も考えられるのが望ましい。上記の知見に、さらに実行する行動力と各方面と折衝するコミュニケーション力も必須と考える。

6-2 具体的な活動

コーディネーターは新しい価値観を生み出すイノベーター的発想も重要であり、その発想が奇想天外のものではなく、広く受け入れられるものになるためには、全体像の正確な把握と正確な課題の抽出とその原因を探り出し、原因を除去する必要な行動が前提となる。またウェブ展開も積極的に研究開発し実践に結び付けていく素養は必要である。

これらの理想を描きながらも今回のコーディネーターが最適に行動できたかは検証する必要がある。コーディネーターが属する領域によって視点や姿勢

には偏りが出ることは避けられず、障がい者の学びを推進する上でどんな障がいにも対応できることを可能にするためにも、福祉全般や障がい全般の知見にアクセスできる環境を整えていることで対応することになると思われる。

③ 今後の検討課題

コーディネーターは各地域で育成する必要があるが、この担い手を福祉分野の出身者か教育分野や民間企業か自治体職員かでその行動原理も変わってくると思われるので、これまでの活動の長所を生かしながら、活躍してもらうためには大きな考え方をもとにしたガイドラインが必要になってくると思われる。

このガイドラインの作成に向けてはこれまで本事業で得られた成果のみならず、各地域での実践で得られた成果を取りまとめ、具体的な人物像を描くと同時に、現在検討が進められている担い手の育成に関する有識者会議の結論を基本に考えたい。

7 成果等の普及

7-1 実施経過

5月

ウェブによる講義・訪問講義

【周知講義】

31日 就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河（東京都江東区）

6月

ウェブによる講義・訪問講義

【インターネット等での周知記事】

9日「当事者の思いと周囲の熱意から構築する重度障がい者の「はたらく」

16日「その一言で「世界が変わる」ということから」

23日「哲学が切り開く障がい者との楽しい対話とおもしろいまなび」

【周知講義】

10日 就労移行支援事業所アクセスジョブ南森町（大阪市北区）

7月

ウェブによる講義・訪問講義

オープンキャンパスの周知活動開始、チラシ配布・メールでの案内（東京都国分寺市・兵庫県西宮市を中心に）

【周知講義】

19日 就労移行支援事業所アクセスジョブ岡山（岡山市）

27日 就労移行支援事業所アクセスジョブ川崎（川崎市）

28日 就労移行支援事業所アクセスジョブ西船橋（千葉県船橋市）

29日 就労移行支援事業所アクセスジョブ柏（千葉県柏市）

8月

オープンキャンパスの周知活動開始、チラシ配布・メールでの案内（東京都国分寺市・兵庫県西宮市を中心に）

オープンキャンパス実施（東京都国分寺市）

重度障害児者の生涯学習を推進するフォーラムの郵送・メールでのお知らせ

【周知講義】

4日 就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河（東京都江東区）

5日 就労移行支援事業所アクセスジョブ東大宮（さいたま市大宮区）

6日 就労移行支援事業所アクセスジョブさいたま（さいたま市浦和区）

9月

オープンキャンパス開催

【インターネット等での周知記事】

1日「「できた！」「できたね」のハーモニーが生み出す未来」

8日「医療モデル偏重と障害者支援の地域格差是正を東京から」

22日「難病当事者がつくる「社会人大学院進学」の支援」

10月

ウェブによる講義・訪問講義・第二回連携協議会

オープンキャンパスの周知活動開始、チラシ配布・メールでの案内(東京都国分寺市・兵庫県西宮市を中心に)

22日 蓮田特別支援学校「保護者進路説明会」

【インターネット等での周知記事】

27日「テクノロジーに合わせるのか、テクノロジーが合わせるのか」

29日 重度障害児者の生涯学習を推進するフォーラム開催

11月

ウェブによる講義・訪問講義

オープンキャンパス開催

オープンキャンパスの周知活動開始、チラシ配布・メールでの案内(東京都国分寺市・兵庫県西宮市を中心に)

重度障害児者生涯学習推進フォーラムの動画を公開

16日 蓮田特別支援学校「教職員研修」

【インターネット等での周知記事】

2日「医療的ケア者への生涯学習に誰が向き合うのか」

10日「オープンキャンパスの扉を開き続けるということ」

17日「学びで「開かせる」ためのプレーヤーを求めて」

24日「時間を「分配」することで社会に向けた適切な準備を」

【周知講義】

5日 就労移行支援事業所アクセスジョブ千葉(千葉市)

8日 就労移行支援事業所アクセスジョブ熊谷(埼玉県熊谷市)

10日 就労移行支援事業所アクセスジョブ八王子(東京都八王子市)

10日 就労移行支援事業所アクセスジョブ川崎(川崎市)

11日 就労移行支援事業所アクセスジョブ浦和(さいたま市浦和区)

15日 就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河

(東京都江東区)

18日 就労移行支援事業所アクセスジョブ西船橋(千葉県船橋市)

19日 就労移行支援事業所アクセスジョブ柏(千葉県柏市)

22日 就労移行支援事業所アクセスジョブ仙台(仙台市青葉区)

12月

ウェブによる講義・訪問講義

1日 蓮田特別支援学校「みんなの大学校の授業体験」

【インターネット等での周知記事】

1日「発達障がい者との哲学的対話で切り開く就労定着」

【周知講義】

1日 就労移行支援事業所ライトハウス春日部(埼玉県春日部市)

8日 就労移行支援事業所アクセスジョブ名古屋駅前(名古屋市中村区)

9日 就労移行支援事業所アクセスジョブ浜松(静岡県浜松市)

10日 就労移行支援事業所アクセスジョブ静岡(静岡市)

1月

ウェブによる講義・訪問講義

【インターネット等での周知記事】

5日「新学習指導要綱の「対話の力」をどのように磨くのだろうか」

共生社会コンファレンスチラシ完成

→共生社会コンファレンスの開催案内、全国都道府県の教育行政機関、関東甲信越ブロックの教育委員会、福祉行政、公民館、特別支援学校、福祉サービス事業所約300に送付

→ホームページ及びフェイスブックでの告知

2月

ウェブによる講義・訪問講義

【インターネット等での周知記事】

1日「本年度の共生社会コンファレンスで未来という

「次」を考えたい」

- 9日「訪問する支援の重みとこの社会での尊さ」
 23日「孤独感の中の障がい者の学びに感動をもう一回」
 共生社会コンファレンスの案内状送付・メールにて最終案内
 26日 共生社会コンファレンス開催
 3月
 1日 共生社会コンファレンスの開催報告(ホームページ)
 2日 共生社会コンファレンスの動画公開(特設ホームページからユーチューブリンク)
 2日 第三回連携協議会及び最終報告会
 →開催報告をホームページ掲載
 9日 最終報告書提出

7-2 具体的な内容

【福祉サービス事業者への学びの普及】

対象者:就労移行支援事業所アクセスジョブ、就労移行支援事業所タイトハウスの各事業所の関係者・スタッフ

講義担当:引地達也

時間:2時間~3時間

日時	対象施設及び場所	対象者	テーマ
5・31	就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河(東京都江東区)	管理者・支援員 7名	就労支援における「学び」の導入について
6・10	就労移行支援事業所アクセスジョブ南森町(大阪市北区)	管理者・支援員 12名	同上
7・19	就労移行支援事業所アクセスジョブ岡山(岡山市)	管理者・支援員 8名	同上
7・27	就労移行支援事業所	管理者・	同上

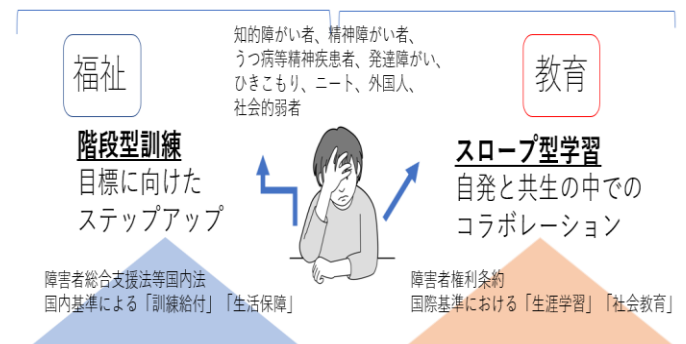
	業所アクセスジョブ川崎(川崎市)	支援者 5名	
7・29	就労移行支援事業所アクセスジョブ西船橋(千葉県船橋市)	管理者・支援者 7名	同上
7・30	就労移行支援事業所アクセスジョブ柏(千葉県柏市)	管理者・支援者 4名	同上
8・4	就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河(東京都江東区)	管理者・支援者 6名	学びを伴う支援の在り方・関係機関とのコミュニケーションについて
8・5	就労移行支援事業所アクセスジョブ東大宮(さいたま市大宮区)	管理者・支援者 5名	就労支援における「学び」の導入について
8・6	就労移行支援事業所アクセスジョブさいたま(さいたま市浦和区)	管理者・支援者 7名	同上
11・5	就労移行支援事業所アクセスジョブ千葉(千葉市)	管理者・支援者 6名	同上
11・8	就労移行支援事業所アクセスジョブ熊谷(埼玉県熊谷市)	管理者・支援者 5名	同上
11・10	就労移行支援事業所アクセスジョブ八王子(東京都八王子市)	管理者・支援者 5名	同上
11・	就労移行支援事業所	管理者・	学びを伴う

10	業所アクセスジョブ川崎（川崎市）	支援者 5名	支援の在り方・関係機関とのコミュニケーションについて
11・1	就労移行支援事業所アクセスジョブ浦和（さいたま市浦和区）	管理者・支援者 6名	同上
11・15	就労移行支援事業所アクセスジョブ清澄白河（東京都江東区）	管理者・支援者 6名	学びと支援に関するディスカッション
11・18	就労移行支援事業所アクセスジョブ西船橋（千葉県船橋市）	管理者・支援者 6名	学びを伴う支援の在り方・関係機関とのコミュニケーションについて 同上
11・19	就労移行支援事業所アクセスジョブ柏（千葉県柏市）	管理者・支援者 5名	同上
11・22	就労移行支援事業所アクセスジョブ仙台（仙台市青葉区）	管理者・支援者 6名	就労支援における「学び」の導入について
12・1	就労移行支援事業所ライトハウス春日部（埼玉県春日部市）	管理者・支援者 7名	同上
12・8	就労移行支援事業所アクセスジョブ名古屋駅前（名古屋市中村区）	管理者・支援者 10名	同上
12・9	就労移行支援事業	管理者・	同上

	業所アクセスジョブ浜松（静岡県浜松市）	支援者 12名	
12・10	就労移行支援事業所アクセスジョブ静岡（静岡市）	管理者・支援者 8名	同上

延べ人数：148名

内容の一部



【インターネットによる記事での普及活動】

執筆者：引地達也

6月

9日「当事者の思いと周囲の熱意から構築する重度障がい者の「はたらく」」

16日「その一言で「世界が変わる」と思うことから」

23日「哲学が切り開く障がい者との楽しい対話とおもしろいまなび」

9月

1日「「できた!」「できたね」のハーモニーが生み出す未来」

8日「医療モデル偏重と障害者支援の地域格差是正を東京から」

22日「難病当事者がつくる「社会人大学院進学」の支援

10月

27日「テクノロジーに合わせるのか、テクノロジーが合わせるのか」

11月

2日「医療的ケア者への生涯学習に誰が向き合うの

か」
 10日「オープンキャンパスの扉を開き続けるということ」
 17日「学びで「開かせる」ためのプレーヤーを求めて」
 24日「時間を「分配」することで社会に向けた適切な準備を」
 12月
 1日「発達障がい者との哲学的対話で切り開く就労定着」
 1月
 5日「新学習指導要綱の「対話の力」をどのように磨くのだろうか」
 2月
 1日「本年度の共生社会コンファレンスで未来という「次」を考えたい」
 9日「訪問する支援の重みとこの社会での尊さ」
 23日「孤独感の中の障がい者の学びに感動をもう一回」
 →全体のアクセス数は1万程度

【今後の検討課題】

成果の普及は適切なコミュニケーションのもとに行われるとの考えのもとで、「マスコミュニケーション」と「ソーシャルコミュニケーション」に分けて行動し、昨年からの課題であった福祉サービスとの連携を念頭に福祉サービス事業所での丁寧な話をする周知にも重点を置いた。マスコミュニケーションでは定期的にウェブでのメルマガやブログの活用で多くの人に本事業や障がい者の学びの成果を伝え、結果的にフォーラムやコンファレンスへの参加を促すことにもつながっているが、今回はコロナ禍が続いたことで、これらのコミュニケーションがマスメディアの発信につながらず、かろうじて重度障害者の取組でNHK青森放送局が部分的に取り上げたことにとどまった。

マスメディアの活動は社会的意義づけと社会的ニーズだけではなく、そのタイミングによって行動が

左右されるために、取り上げられることを前提に間上げたり、その活動に一喜一憂する必要はないかと考えるが、常に社会的ニーズを踏まえて行動し、その周知も活動に含まれていることを念頭に活動することは重要である。

コーディネーターのみならずスタッフやボランティアが同じ気持ちで活動を広めるために仲間を増やしていく発想のもとで小さな周知から大きな周知まできめ細かな「周知活動」を今後も心掛けることが、多くの学びを必要としている人につながっていくであろう。

8 共生社会コンファレンス関東甲信越の開催

8-1 実施経過

4月
 共生社会コンファレンスのこれまでの実施状況を検討
 5月 同上
 6月
 実行委員会設立に向けたコアメンバーを検討・打診・打ち合わせ
 7月
 全体の枠組み、実行委員会の構成を検討
 8月
 全体の枠組み、実行委員会の構成を検討
 9月
 第1回実行委員会、全体の枠組み、チラシ概要決定（日時とテーマ）
 10月
 チラシ配布、広報開始
 11月
 第2回実行委員会、各分科会の内容の決定
 12月
 プログラムの詳細決定、参加者募集開始・受付
 1月
 全国約300の教育委員会・行政・公民館・福祉サービス事業所、特別支援学校に案内状郵送
 参加者受付開始

- 2月
 9日 第3回実行委員会
 20日 プログラム原稿。当日資料の締切
 21日 当事者の声リハーサル（バンド演奏リハーサルはコロナにより中止）
 25日 最終リハーサル、会場設営
 26日 共生社会コンファレンス実施
 3月
 2日 最終報告会
 3日 地域コンソーシアム報告会
 9日 最終報告書提出

8-2 具体的な内容

【準備】

本共生社会コンファレンスは昨年度に東京都国分寺市で企画され、コロナ禍の影響で中止を余儀なくされたプログラムを一部引き継ぎいでいくことを基本としながら始まった。2021年春から関係者との協議が始まり、以下のメンバーが実行委員として企画等を検討した。

名前	肩書	備考
春口明朗	NPO 法人オハナ	
兼松忠雄	全国喫茶コーナー連絡会事務局長	
井上廣美	NPO 法人町田ハンディキャブ友の会	
本多美子	国分寺市本多公民館館長	
加藤征彦	国分寺市恋ヶ窪公民館館長	
引地達也	みんなの大学校学長	

文部科学省の井口啓太郎氏、鈴木孝志氏、阿部圭担氏はほぼ実行委員として毎回の会合に出席され、分科会のコーディネーター役等にも従事していただいた。実行委員会

期日	場所	内容
2021年9月30日	本多公民館	メインテーマの設定と分科会の構成。社会教育の観点だけではなく、公民館の活用、青年学級の歴史を見据え未来に向け

		での視点で考えることを確認。分科会の切り口を「担い手育成」「特別支援学校」「公民館」「社会との接点としてのカフェ」とする。各分科会の担当を決定。テーマを仮決定し簡易チラシ作成。全体会は宮崎先生の講演と当事者の登壇、バンドの演奏とする。
2021年11月12日	同上	メインテーマを「障害者の生涯学習の未来を創造する―「学び」を通じた共生社会の新たな流れ」を最終決定。各分科会のコーディネーターが報告内容等を検討し、登壇者へ打診。「障害者の生涯学習活動の支援者・伴走者をひろげていくために」「特別支援学校における生涯学習を見据えた実践と地域とのつながり」「公民館でつながるなかま～しょうがいを超えた出会いと学び～」「カフェを介した「地域共生」の実践」にテーマ設定。当事者の声の登壇団体の決定
2022年2月9日	同上	最終的な内容の確認。リハーサルの手順など細部の調整を行う。

テーマ設定の考え方

これまでの経緯

2019年度

テーマ：障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、生涯にわたる学びの場の拡大に向けて
 会場及び共催：東京大学大学院教育学研究科
 →知的、精神、身体の全ての障害に焦点を当てた「共生」を模索

2020年度

テーマ：地域で共生の生涯学習を展開するために

会場及び共催 東京都国分寺市国分寺市立本多公民館 (国分寺市教育委員会)

→社会教育に焦点を当てて今後の在り方を検討
上記の考え方を受けて、青年学級のこれまでを振り返り未来を創造する方向での検討をイメージすることとした。その上で分科会を設定した。

チラシ内容

メインテーマ 令和3年度文部科学省「学校現場における障害者の学びの支援に関する実践研究」事業
障害者の生涯学習の未来を創造する
—「学び」を通じた共生社会の新たな流れ—

共に学び、生きる 共生社会
コンファレンス

令和3年度 2022年
2/26 (土)
午前10時～午後4時15分

会場: 東京都国分寺市立本多公民館
席数: 100席(先着順) ※オンライン参加も可能
新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクを着用して参加ください。

【開催理由】
障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を健全な均等と実現する観点から、障害者を含む生涯学習の環境を確保することを締約国に求めています(24条)。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要があります。
こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシナリオ及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指します。第一に、障害者の参加を促している社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める(障害理解の促進)。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る(障害者の学びの場の創出)。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となる新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する(障害者の学びの場の拡大)。より多くのの方に参加いただくことを目的として社会全体で取組んでいく考えです。

主催：一般社団法人みんなの大学校、文部科学省、国分寺市教育委員会

10:00-10:20	10:20-11:20	11:20-12:00	13:00-15:30	15:40-16:15
オープニング	基調講演	当事者の声・演奏	分科会	講師・まとめ

午前 オープニング 10:00~10:20
基調講演 10:20~11:20
生涯学習を促進する障害児者の学びの意義
—青年学級などの履修中心から—
講師：宮崎 英憲さん(東京大学名誉教授/全国特別支援教育推進協議理事長)
当事者の声・演奏発表 11:20~12:00
司会：福祉専攻科シャンティつくば(茨城県つくば市)
福祉事業型 KINGO カレッジ(新潟市)、福祉事業型ユニバやまなし(山梨県笛吹市)、
NPO 法人 LomiLomi ひとつとこむ(長野県松本市)、iLDK(東京都練馬区)
音楽演奏：まつりバンド(東京都国分寺市)

午後
分科会 13:00~15:30
分科会1 障害者の生涯学習活動の支援者・伴走者をひろげよう
コーディネーター：山口 登太郎さん(文部科学省障害者学習支援推進室)
報告者：山口 明樹さん(特定非営利活動法人 Onara 代表)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：堀野 光徳さん(東京都市大学社会教育センター 次長)
加藤 征彦さん(国分寺市生涯学習推進委員会 委員)
植田 穂菜さん(国分寺市生涯学習推進スタッフ)

分科会2 特別支援学校における生涯学習を支援した実践と地域とのつながり
コーディネーター：阿部 志保さん(文部科学省障害者学習支援推進室)
報告者：宮崎 英憲さん(東京大学名誉教授/全国特別支援教育推進協議理事長)
報告者：大田 健治さん(東京教育大学国際学部)
報告者：原田 奈津紀さん(千葉県立特別支援学校市川高等学校 校長)
報告者：植田 穂菜さん(国分寺市生涯学習推進スタッフ)

分科会3 公民館でつながるなまこま—しよういを超えた出会いと学び—
コーディネーター：野山 和佳菜さん(国分市公民館社会教育室 室長)
報告者：水澤 真由美さん(正立大学非常勤講師、元東京都公民館長)
報告者：藤田 浩之さん(東京都中央公民館 代表)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)

分科会4 カフェを介した「地域共生」の実践
コーディネーター：大久保 幸太郎さん(国分市生涯学習推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)
報告者：山崎 清彦さん(東京教育大学国際学部 国際教育推進室 室長)

講師・まとめ 15:40~16:15
なおおしの内容は状況により変更になる場合がございます。

お問い合わせ先
国分寺市立本多公民館 国分寺市教育委員会
〒202-8502 東京都国分寺市本多1-1-1
TEL: 042-321-0085
FAX: 042-321-0086
E-MAIL: kofun@kofun-shi.ed.jp

8-3 実施内容

日時：2022年2月26日(土) 午前10時～午後4時15分

場所：東京都国分寺市立本多公民館

令和3年度 共に学び、生きる共生社会コンファレンス 関東甲信越ブロック

メインテーマ：

障害者の生涯学習の未来を創造する—「学び」を通じた共生社会の新たな流れ

司会進行：みんなの大学校学生委員長、水越真哉
コンファレンス次第

あいさつ・注意事項 水越さん

- 1 開催地あいさつ 本多美子・本多公民館館長
- 2 主催者あいさつ・行政説明 清重重信・文部科学省 総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室長
- 3 基調講演「生涯学習を展望する障害児者の学びの意義—青年学級などの展開から」講師：宮崎英憲・東洋大学名誉教授
- 4 当事者の声

司会：福祉型専攻科シャンティつくば(茨城県つくば市) 木ノ下理乃夏さん、蓬田祥子さん

発表：福祉事業型 KINGO カレッジ(新潟県新潟市) 岩浅琴音さん、中西太一さん

福祉事業型ユニバやまなし(山梨県笛吹市) 川崎晴耕さん、木口裕史さん

NPO 法人 LomiLomi ひとつとこむ(長野県松本市) 原田大輝さん、宇佐美凛さん

i-LDK(東京都練馬区) 百瀬賢太郎さん、飯嶋賢太郎さん、原田奈津紀さん

活動紹介：まつりバンド(東京都国分寺市)

→司会をシャンティつくばの2人をお願いをして、シャンティつくばの紹介の後に、KINGO カレッジの2人がそれぞれ作文を読む形で自分の思いを紹介した。ユニバやまなしはめぐり方式で写真と文字を見せながら事業所の紹介や自分がやっていることを話した。ロミロミひとつとこむは古畑裕子代表が質問し、

それに答える形で自分が今楽しいことなどを紹介した。I-LDKは3人が登壇し多様な活動を紹介した後、それぞれに個人的な思いを語った。

まつりバンドは当初、会場で演奏する予定であったが関係者がコロナ陽性になったために演奏は中止となり、オンラインで取りまとめ役の桂木稔彦さんがオンラインで活動を紹介し、演奏の様様を動画で流し、画面でつながれるメンバーがあいさつした。

昼休憩

午後：分科会協議

分科会1 障害者の生涯学習活動の支援者・伴走者をひろげていくために

コーディネーター：井口 啓太郎さん（文部科学省障害者学習支援推進室）

助言者：春口明朗さん（特定非営利活動法人 Ohana 顧問）欠席

報告者：

山崎達彦さん（東京都立あきる野学園教諭・進路指導主任）現地

梶野光信さん（東京都教育庁主任社会教育主事／文部科学省「障害者の生涯学習の推進を担う人材育成の在り方検討会」委員）現地

加藤征彦さん（国分寺市教育委員会）現地

桂田稔彦さん（国分寺市くぬぎ教室スタッフ）オンライン

→障害者の生涯学習を全国に広げていく際の大きな課題は、学びの場を創造し、参加・参画する職員やボランティアなどをいかに増やしていくことができるかだとの問題意識から分科会を設定。文部科学省でも障害者の生涯学習の担い手となる人材育成の在り方が検討されている中で、東京都、あきる野学園、国分寺市の各地の事例を通じてこの課題に向き合う協議を行った。

分科会2 特別支援学校における生涯学習を見据えた実践と地域とのつながり

コーディネーター：阿部圭但さん（文部科学省障害者学習支援推進室）現地

助言者：宮崎英憲さん（東洋大学名誉教授／全国特別

支援教育推進連盟理事長）現地

報告者：

大沼健司さん（東京都立青峰学園主幹教諭）現地

岡本彩花さん（千葉県立市川大野高等学園教諭）オンライン

後松慎太郎さん（秋田大学教育文化学部附属特別支援学校教諭）オンライン

→近年、全国各地において様々な実施主体による学校卒業後の学びの場が広がりつつある。この点を踏まえ特別支援学校3校の授業づくりや卒業生支援などの事例を参考に、学校と卒業後の学びの場をつなぐためのヒントを探った。18歳以降を意識した生涯教育の「その前」もポイントにする初めての試みであり、先駆的事例を基本に展開なども話し合われた。

分科会3 公民館でつながるなかま～しょうがいを超えた出会いと学び～

コーディネーター：針山和佳菜さん（国立市公民館職員）現地

助言者：永澤 義弘さん（立正大学非常勤講師、元邑楽町公民館長）現地

報告者：

藤田和良さん（邑楽町中央公民館館長）現地

岩田武さん（まちだ中央公民館職員）オンライン

望月智子さん（町田市障がい者青年学級ひかり学級課外活動コース副班長）

菅田政志さん（東大和中央公民館ビートクラブ講師）現地

関野大樹さん（東大和中央公民館ビートクラブスタッフ）現地

→「障害者の生涯学習」が注目を集めるなか、公民館における障害者青年学級の活動が育んできた価値を改めて考える企画として設定した。公民館における社会教育事業と障害者福祉の余暇支援事業との違いはなにか、公民館だからこそできる実践とは何かを参加者や公民館職員、関係者と活動の紹介を通じて一緒に考える機会となった。

分科会4 カフェを介した「地域共生」の実践

コーディネーター：大久保芽衣さん（喫茶「わいがや」

スタッフ・東京都国立市)、打越 雅祥さん(和光大学・明治大学非常勤講師)

助言者:兼松忠雄さん(全国喫茶コーナー交流会事務局局長)

報告者:

深澤和仁さん(山梨県立高等支援学校 桃花台学園 教頭)

西島博子さん(山梨県立高等支援学校 桃花台学園 食品コース主任)

成田雪子さん(そらまめ食堂店長・栃木県真岡市)

北沢桃子さん(studio COOCA 施設長・神奈川県平塚市)

→特別支援学校でのカフェの取り組みから地域への広がり、カフェ&芸術活動&地域行事へ、そして高校生や地域・行政を巻き込んだカフェの新しい形まで、様々な事例から障害者にとどまらず地域住民の学びにつながる「カフェの現在・未来」を先駆的な事例をもとに検討した。特にスタジオ・クーカの取組には参加者から新しい価値を示されインパクトが強かったとの複数の意見が出た。

クロージングセッション 司会:引地達也

各分科会から報告

分科会1:井口啓太郎さん

分科会2:阿部圭但さん

分科会3:針山和佳菜さん

分科会4:大久保芽衣さん

司会から「青年学級」の名前を新しい名前にするアンケートを行ったが、なかなか集まらず発表に至らないものの、集まったうちのいくつかを報告として提示した。

希望(のぞみ)学級:未来へ希望を持って進んでほしいと思いこの名前にしました。

未来創造次世代学級:新しい未来をつくる次世代教育という意味です。若者に期待しています。

社会学習学校:社会について学ぶ機関であるから。

成人教室:「学級」は学校用語であり、学校外の場の学びにはそぐわない。「青年学級」の実態からみても、「成人」として大きく括ってみればよいのでは。

夢の学び舎:夢を閉ざされていくのではなくいろんな夢に向かって学べる場所になるように

インクルーシブ・カレッジ:誰でも学べる場所として、インカレとも訳せる。

講評:宮崎英憲・東洋大名誉教授

【総括】

基調講演から当事者の声、分科会で多岐に渡る議論の中で、参加者それぞれが自分事の中で新しい取組みへのイメージやこれまでの活動の確認に至ったのではないかと考えるが、大きな考え方として以下の点を主催者としてまとめたい。

・各地の事例と当事者の声をつなげる、という発想は重要

→当事者の声を各地域・各所・各イベントで取り入れることで効果的な学びの場につながる

・福祉サービスとの協力による「学び」の枠組み

→就労支援や就労などの中における人の生活の一部としての学びを検討する

・出来ている形の肉付け、理論の整理と法整備(制度・仕組み)へ

→青年学級や社会教育のこれまでの文脈を正しく理解し、次の目標に向けて具体的なアプローチをしていく

・公民館・社会教育の文脈で地域とのつながりを強化

→地域の公民館。社会教育をそれぞれの立場で見直しながら、インクルーシブな社会に対応、発展させることを念頭に地域との連携を強化していくのが必須ではないか

・障害者の権利保障をこえて「誰もが」のインクルーシブの考え

→障害者が隔てられたことで「権利獲得」を叫ぼうとした時代は終わり、誰もが普通にインクルージョンを前提にして考えを浸透させる必要がある

・担い手の育成に向けて社会的な素地の整備

→共生社会実現には各地域で先導しながら正しい場所をイメージすることで達成されることを考えれば、まずは人を育成する必要があり、その育成の背景に

あるべき社会を正確に描くことから始めたい
 ・安心して声が出せる社会を形成する
 →当事者の声で自分の出来なさ、社会の不満が出されたが、それを押しつぶさず、発言できる社会を基本として障がい者の学びを考えたい

【記録】

コンファレンスの午前中の全体会及びクロージングセッションは以下のページからアクセスし、視聴である。また全体会及び分科会の各資料も以下のページからダウンロードを可能にしている。期限は約半年後までとしている。

・プログラム・各資料(基調講演・行政説明・分科会)
 特設ホームページでダウンロード可能

[https://www.kyoseishakai-](https://www.kyoseishakai-conference.com/kantoukoushinetsu2022-download)

[conference.com/kantoukoushinetsu2022-download](https://www.kyoseishakai-conference.com/kantoukoushinetsu2022-download)

・当日の動画(午前中の全体会・クロージング)

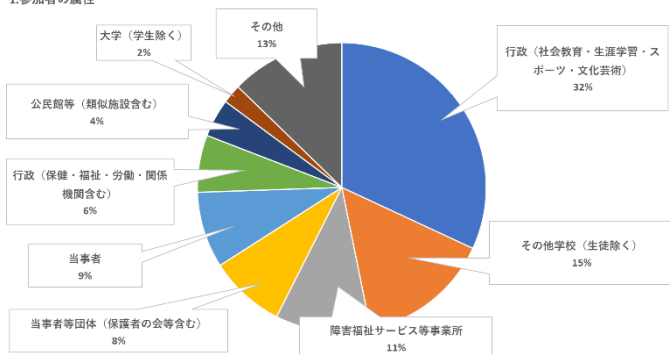
特設ホームページで URL リンクで閲覧可能

<https://www.kyoseishakai-conference.com/kantoukoushinetsu2022>

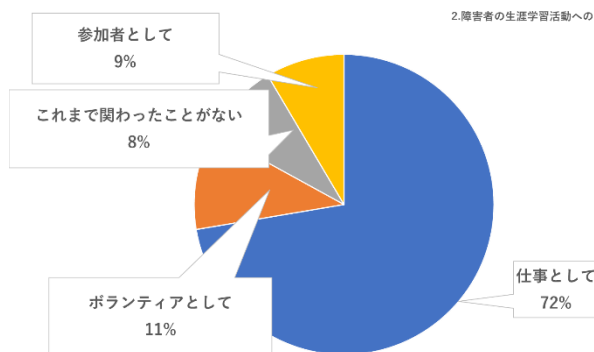
8-4 アンケート

【参加者】

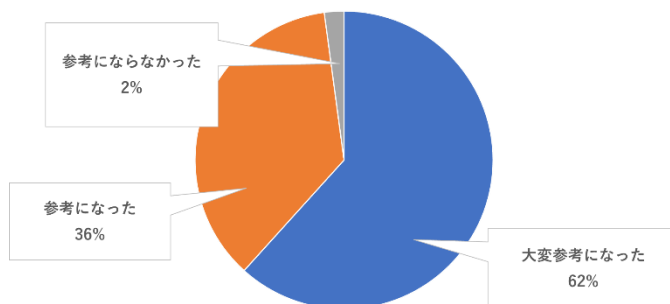
1.参加者の属性



2.障害者の生涯学習活動へのかわり方



3.参考になる内容でしたか



【アンケート結果】

アンケートはカンファレンス中にアナウンスした 구글フォームで、各自がそれぞれ記載し提出することにした。

参加されたプログラムについて、感想やご意見をお聞かせください(自由記述)

・第2分科会:「特別支援学校における生涯学習を見据えた実践と地域とのつながり」に参加させていただきました。現在、茨城県水戸生涯学習センターで社会教育主事として勤務しておりますが、本職は、県立特別支援学校の教諭です。7~8年前になりますが、進路指導主事の仕事をしていた時に、卒業後の進路の在り方について仕事の適性だけでなく、余暇活動の充実、生きがい、といったワークバランスのとれた進路決定が重要と考え、本人、保護者、担任、と時間を見つけて話し合ってきたことを思い出しました。

・他県の取組み(事例発表)は本当に勉強になります。茨城県の地域性を鑑みた特色ある取組身を行っていくために、現在の勤務する社会教育センターがもっているノウハウや人材を活用し、学校における生涯

学習の拡大と特別支援学校と地域とのつながり（懸け橋）になり、協働して共生社会の実現に向けてお手伝いしていければと思います。

・分科会5 カフェの様々な形が知れて、大変興味深かった。どの実践も、地域にきちんと受け入れられているところが、素晴らしいと思う。

・「当事者の声」の発表がとても良かったです。ここから学ぶことがたくさんあると思いました。現場の実態はまだまだ把握されていないのだと、障害者権利条約の24条もお話の中で出されましたが、国が確保すべきことを何となく人任せにしているような印象を正直受けました。学校や福祉関係者、ボランティアなどそれぞれが頑張っている活動はとても大切だと思いますが、後期高等教育の年限延長や生涯学習の機会の保障はもっと国が積極的に引っ張っていただきたいと思いました。さらに基本的な人権教育をもっと丁寧にしていく必要があるのではないかとご意見を聞く中で感じました。

・とても良い話が聞けて良かったです。

・宮崎先生の基調講演で「まずは裾野を広げていく」「今あるものをどうやって拡大していくか」というお話がありました。東京では多岐に渡る学習内容で公民館が実施している所は素晴らしいと感じました。当事者団体だけでなく、様々な主体が関わることの意義は共生社会に向けて非常に大切な要素だと思います。特別支援学校における生涯学習を見据えた実践と地域についての分科会では、学校が頑張りすぎるのではなく、連携の体制をどうやって作るかについて考えさせられました。

・様々な事例や当事者の声を聞くことができ、勉強になりました。

・参加したい分科会が2つあり、1つしか参加できず残念です。分科会の様子もアーカイブで配信してくれたら、大変嬉しいです。

・実際に参加した分科会ですが、人数も少なくアットホームでしたが、参考になることが少なく、参加する分科会間違えた感が強いです。しかし、どこの青年学級も抱えている課題は同じだと言うことはわかり

ました。"

・障害者の生涯学習活動について、これまで不勉強で未知のことが多く、非常に勉強になりました。多くの事例についても知ることができ、地域の取り組みについても関わっていきたいと考えています。

・基調講演とクロージング

・生涯教育についての取り組みの経緯、学校教育への位置づけ、推進していく上での課題等を学ばせていただきました。

・グループ討議の時間に、参加者の思いや考えを共有できて、大変刺激になりました。当施設でも月1回同窓会が開かれていますが、当事者と施設職員という固定した関係を継続するのではなく、当事者の自立や成長、社会生活の広がりにつながるように、活動を質的に発展させなければいけないとの思いを強くもちました。

・大変勉強になりました

・公民館に青年学級を整備するヒントをいただきました。ありがとうございました。

・障害のある児童生徒の生涯学習充実のため、特別支援学校の果たす役割について、大いに示唆がえられました。

・カフェを介した「地域共生」の実践の分科会が大変に面白かったです。特に・成田ゆきこ・そらまめ（栃木）と・関根かんじ・クーカ（平塚）さんの活動の紹介は、「人が生きる」ということの一歩の原点を見せてもらったようで、少し大げさに言えば衝撃的でもありました。

・コーディネーターの兼松さんが「学びと労働と福祉が串刺しになっている」と表現されていましたが、それもまた「生きる」ということの根幹の問題で、切り縮められた貧しい「障がい」観と「支援」観をひっくり返すパワーを感じます。

・スタジオココアのダイケントさんの外国語講座と絶叫ボーカルも、実に心に響くものでした。

・色々な観点から現場の発表なども多く参考になった。

・午前の部の当事者団体の発表で、i-LDK の発表が

中身が充実して、素晴らしかったです。

・第1分科会に参加しましたが、事例発表、ブレイクアウトルームでの意見交換、ともに実践者の貴重な話が聞けたのでとても参考になりました。行政職員としては、東京都教育庁の梶野さんの話が一番興味深かったです。

・分科会4に参加しました。桃花台学園の実践については、とにかく安全安心を名目にして閉鎖しがちな学校教育において、外部との交流に力を入れているところが良かったです。学習内容が就職に直結しない部分もあるかと思いますが、一般の人達も学校教育で受けた学習内容を就職や社会活動で直接的に生かしている人は少ないと思います。学びを通じて生徒が社会への理解・関心を深めていけることが大切だと感じます。

・c o o c aさんの実践は大変ユニークで、興味深い内容でした。様々なアート活動が仕事につながっていることが素晴らしかったです。山梨県内でもアート活動に熱心な事業所がいくつかありますが、いまひとつ収入につながっていないことが残念だと思っていました。今回のご報告をぜひ参考にさせて頂きたいと思いました。

・そらまめさんの実践は地域とのつながりが豊かで良かったです。喫茶を窓口地域と様々なつながりがあり、事業所の優しさが伝わってきた報告でした。ひとつの事業所ができる交流は小さいものですが、積み重ねていくことで障がい者理解の広がりにつながっていくものと感じました。

・私の周りには重度重複の重い障がいをもちながらも喫茶などを仕事にしたいと願っている人がいます。しかし実際は就労等が難しく実現に至っていません。次回開催では、重度重複障がいの方々の社会参加について報告があると有り難いです。"

・学校教育と社会教育の垣根を超えて、つながっていくことの重要性を再度確認しました。所属校として、卒業後の学びに結び付く教育活動はどうあるべきか考える機会となりました。

・クロージングセッションの時間がもう少し長くと

っていただけると、さらに踏み込んだ質問ができたと思います。

・多様な取り組みだけでなく、様々なものの見方を知ることができ、非常によかったです。

当事者やその関係者に留まらず、広くこのような価値観の共有の場があると良いと思いました。

・ボランティアの方々の勧誘に、どの団体も苦勞されているということがよくわかった。

"自立訓練や就労移行のサービスを利用している方々の生の声を直に聞くことが出来て、良かったです。

・皆さん、生き生きと楽しい時間を過ごせていることに嬉しく思いました。

・このような、良い企画をしていただき、ありがとうございました。事例や、体験談など、とても参考になりました。

良いことばかりでなく、課題なども教えてくださることもあり、とても参考になりました。

たまたま教えていただき良かったのですが、公民館職員の方々には、情報は届いているのでしょうか。

・多くの方に、見ていただきたいと思いました。

・文科省の事業でしたら、全ての公民館にはお知らせやチラシを配架していただくとか、また、内閣府系男女共同参画団体や障害者団体を通して、お知らせ頂ければ、たとえ参加はできなくても、知っていただくだけで、時代を感じてもらえるのではないかと考えております。お手数をおかけいたします。"

・午後からの第1分科会に参加いたしました。

・3人の演者の方から障害者の生涯学習についてやボランティアの現状などを知りました。

・私はあきる野市在住なので、あきる野学園の方の公演を聴きたくてこの分科会に決めたのですが、ボランティア養成講座の事やボランティア募集の事など初めて耳にしてので、関心があっても情報が入っていないので参加出来ない人はきっと多いのではないかな?と思いました。

・障害者の当事者の方やその方を取り巻く人は、情

報が入ってきても閉ざされた環境にあるように思いました。

・共生社会を目指しているのに、偏った情報であれば伝わらないので、年齢や性別や障害の有無に関係なく誰もが考えられる情報にならないのかな？と思いました。

・基調講演、当事者の声、分科会
・情報発信が重要
・「教育」ではなく「自然体」で活動できることが大事

・教育、福祉だけでなく、多様な主体を巻き込んで、点を線に、線を面にすることが大事
といったことが大変勉強になりました。"

・担当者とまわりのパートナーの熱意があってこそ成立する事業だと感じました。

・いろいろな国の動向や取り組み事例などを知ることができて参考になりました。

・参加したい分科会が複数ありました。とても魅力的な内容だったと思います。

・第4分科会に参加。喫茶(カフェ)の事例を通して、地域共生について考えるきっかけを与えていただいた。喫茶が人の成長させ、人と人とをつなげる大きな可能性があること、一方で地域や事業所等の実情に合わせてそのような場所と時間をどのように構築し、変化させていくかが課題であることを認識した。"

・自分が考えていたこれからの障害者の生涯学習について他の方よりアドバイスをいただけて大変参考になりました。今後、行政として生かしていけたらと思います。

オンライン配信について、感想やご意見をお聞かせください (自由記述)

・参加しやすかった
・zoomによるオンライン運営はほぼ毎週行っているため、大変さがよくわかります。準備と運営の方、本当にお疲れさまでした。
・多地域からでも参加しやすく、大変良かった。今後、ぜひこのような形での開催を希望します。

・いろいろな立場や地域の方と繋がれて、よかったです。

・講演が100名に達したので入れないメッセージがあり、参加することができなくて残念でした。申し込みの段階で定員管理をしてほしいです。

・とても良いと思います。
・当事者の発表が非常に良かったです。他県の当事者の方たちの考えに触れる機会がありませんので、貴重な体験になりました。

・試験不足だと思います。
・コロナ禍で、オンラインは必需です。もう少し工夫して欲しかったです。"

・離れていても参加でき、議論ができるというのはオンラインでの開催ならではだと思えます。その一方で、ネット環境の問題等もあり、ラグであるとかハウリングや途切れて部分部分聞き取れない箇所があったりともどかしさを感じる部分があったのは事実です。

・とても参考になりました。有難うございます。
・オンライン配信のおかげで、遠く沖縄からでも参加する事ができ感謝しております、

・私ごとで恐縮ですが、途中(12:00~14:00)使用があり分科会に参加することが叶いませんでした。

・分科会を途中から聴講(入室)する事ができれば、良いと思いました。"

・情報収集するには大変便利です。特に問題なく視聴できました。

・当事者発表の時間前に、利用者のいる教室からZoomに入ろうとしたところ、「上限数になったため入れない」との表示が出ました(その後入ることができました)。事前に複数のパソコンでアクセスしてよいと聞いていたのですが…。可能であれば、次回は人数制限なしにさせていただけるとより多くの方に参加していただけたと思います。

・オンラインでのグループ協議に不慣れな方、また、グループ協議の前に退室してしまう方が相当数いたため、対面であればそういったこともなかったのか

など感じた。一方で、オンラインであったからこそ参加可能となった方もいると考えている。従って、今回のそもそもの開催方法（対面でもオンラインでも選択して参加できる）を今後も継続してほしい。

- ・非常にスムーズに受講することができました。
- ・いいんじゃないでしょうか。
- ・ふだんつながれない人たちがつながれますし。
- ・午前中の当事者のみなさんの発言、とても参考になりました。"
- ・オンラインでの講座の難しさ。
- ・このご時世なので、オンライン配信をしていただき助かります。
- ・寝たきりの子供がいるので、なかなか会場参加ができないご家庭もあります。
- ・このように学習できる機会が今後も得られると嬉しいです。"
- ・オンラインで遠方から気軽に参加できることを考えると、非常にメリットが大きいと思います。
- ・ブレイクアウトルームでの意見交換があったのも良かったと思います。
- ・地方都市在住者にとっては移動の負担が無く助かります。
- ・オンラインが一般化していなかった頃は、対面でないと意図が伝わりにくいと感じていました。しかし最近のオンライン会議主流に自分が慣れてきたことも有り、今回の様なコンファレンスでは、配信でも十分かと感じました。"
- ・コロナ禍でありながら、東京に行かなくても視聴することができ、よかったです。
- ・いろいろな地域の方と手軽につながれるので、良い手段だと思います。
- ・運営の準備が大変な中、ご苦労様でした。
- ・音声の一部聞きづらいところもありましたが、自分にとっては、大変参考になりました。
- ・ネットワーク環境による多少の不具合はあっても、非常にスムーズでした。
- ・現地で参加する良さもありますが、オンラインは気軽に参加できるメリットがあるため、本テーマの

ような垣根を広げる目的もある会は、積極的にオンライン配信を行ってほしいです。

- ・司会の方の声聞こえずらい箇所がありましたが、その他、特段問題ありませんでした。
- ・とても助かりました。これからも、ぜひこのような形にいただけると現地参加できないものにとっては助かります。
- ・ただ、受信状態が機器や操作のせいかもしれませんが、よくなって、グループに分かれたときに音声聞こえなくなり、ボリュームを上げてても変わらず、手立てがわからずに途中で退出いたしました。失礼をして、申し訳ありませんでした。
- ・全盲の視覚障害当事者のため、オンライン中心の参加ということで、心理的には参加しやすかったです。企画・進行ありがとうございました。分科会1の参加者が多くて（嬉しい誤算で…笑）、グループワーク時の回線状態があまりよくなかったようでした…。私の場合、関係者の方でせつかく「グループ1」に設定していただき参加しやすくしていただいたようでしたが、PCのスクリーンリーダー（の音声読み上げ）が作動してくれない事態となりました！が、かろうじてミュート解除のショートカットキー（コントロールキー+aキーを同時に押す）だけが動いてくれて、ワークに参加できました。
- ・Zoomでもグループトークが出来るという事を初めて知りました。そして、参加型なので一方向ではなくみんなで作られるという視点が良かったです。
- ・トラブルはあったものの配信内容よく聞き取れて、ブレイクアウトセッションもスムーズに参加できた。
- ・遠方でも気軽に参加できる点がよい
- ・会場に出向くことが難しい中参加できてよかったです。
- ・自分自身がオンラインでの参加に不慣れなこともあり、職場のネット環境、機材がなければ参加できなかったです。
- ・オンライン配信のおかげで、遠隔地からも参加できて、大変助かりました。
- ・分科会時、会場全体の音声を拾っていたので、グル

ープで発言されている方の音声とうまく聞き取れない部分がありました。機器から遠い方の音声もほとんど聞こえないことがあり、オンライン参加の限界を感じます。とはいえ、限られた機器、会場の中でのやりくりだとお察ししますので、ここまでの環境を整えてくださったことに感謝いたします。

・配信状況については特に問題を感じなかった。運営や調整等お疲れ様でした。

・なかなか一日の長いコンファレンスなので、基礎講演の部分は別の日に、分科会はまた別の日にと分けるといいのではと思いました。オンラインでの参加は非常に助かりますが、集中力的になかなか厳しいものがあります。

その他のプログラムについて、また全体を通じてお気づきになったことがあれば、お聞かせください(自由記述)

・「当事者の声」とても良かったです。皆さん個性があって話もすごく上手でよかったです！

・グループワークに時間が、短いと思った。

・本日は多様な方が多数参加されており、素晴らしいと思いました。度々、連携・協働がキーワードとなっていたと思います。民間企業へはどのように参加アプローチを行ったのか知りたいと思いました。

・分科会のテーマ、コーディネーターは、多種多様で良かったです。今回のように大きく偏らないように企画していただきたいです。

・当施設の利用者も、当事者として発表させてもらいましたが、とてもいい経験になりました。カメラの向こうに100人が聞いていることを理解しながらも、緊張し過ぎず、落ち着いて話せたようです。日頃の遠隔講義のお陰です。引地先生、ありがとうございました。

・分科会がよかったのかもしれませんが、去年に比べてかなりパワーアップした感じがしました。

・司会の水越さんが落ち着いていて良かったと思います。

・団体で、企画している様々な例が、参考になりました。

た。

・各分科会のレコーディングしたものを公開していただける？とのことでしたので、参加できなかった分科会の内容を楽しみにしています。(第2分科会とどちらにしようか悩んだので…)

・特にありません

・宮崎先生の話が随所で聞くことができよかったです。参加させていただきありがとうございました。

・大変ためになるコンファレンスでした。

・ありがとうございました。"

・小さな点ですが、「迷惑をかけたくない、楽しいと思っただけのことがない」と仰った当事者の方の発表が心に残りました。

・本人のこれまでの人生に思いを馳せ、この方以外の様々な立場の方に対しても想像を膨らませました。

・運営お疲れ様でした。貴重な機会をありがとうございました。"

・特にありません。

・企画実施をしていただき、ありがとうございます。

・分科会の配信がないことが残念です。

・配信があれば、一つだけの分科会でなく、視聴することが出来ます。

・情報管理のため、仕方がないのかもしれませんが。

・短くまとめていただくのは、お手数ですね。"

・全部の分科会に参加したかったです。

・私も障害者青年学級に参加しているが、多くの同学級のイベントをみることができとても参考になった。

・分科会3に関する資料がもっと欲しかった

・青年学級というネーミングが実態と異なっていること◎

・教育委員会(行政)以外での取り組みも充実し、選択肢も増えていることがわかった。"

・オンラインと会場の併用は、とても大変だったとお察しします。コロナさえなければ、対面で参加したかったです。充実したプログラムをありがとうございました。

・分科会の際のワークセッションについては事前にチラシの方にも書かれていなかったのであわててしまいました。事前に告知していただいている方がいいかと思います。

今後、本フォーラムで、取り上げて欲しいテーマ・課題をお聞かせください（自由記述）

・特別支援学校の視点での分科会、とても楽しかったです。同じテーマを続けてとはいかないと思いますが、同じテーマで違う方と話ができるとうれしいです。

・連携と協働：立場を越えた出会いと学び（障害×健常×行政×学校×福祉）

・with コロナの工夫

・学校卒業後の重症心身障害者の訪問型教育実践

・当事者の考えや思いを、社会や支援者への不満も含めて発表できる機会は、引き続き設けてほしいです。このコンファレンスは、当事者の参加方法が毎回一步一步進んできていると感じます。さらに、基調講演や各分科会に、当事者（特に知的障害の方）が、「内容を理解しながら一緒に参加できるような合理的配慮」も追究していけるといいなと思います。

・テーマではないが、障害種ごとの分科会も必要であると思う。もしくは、はじめから、今回のコンファレンスでは「知的障害」にターゲットを絞るなどの説明があってもよいかと感じた。

・理屈を超えて「生きる力」を感じられる回だったので、次回もその辺はさらに大事にして展開をしてほしい気がします。

・重度重複障がい者の社会参加、生涯学習

・公民館で青年学級を立ち上げる具体的な流れを勉強できる機会があると助かります。

・特にありません。

・グループトークがとても良かったので、また次回も取り入れて欲しいです。午前が公演で午後がテーマにそってグループトークというのも面白いと思いました。

・色んな視点で考えるキッカケになるのでとても面

白いと思いました。

・生涯学習を分野別にわけ議論できるようなセッションを企画してほしい。

・ICTの活用について取り上げてほしいです。

・漠然としているが、「30年後をイメージして」というテーマはどうでしょう。

・韓国の障害者の生涯学習はとても進んでいたりするのでそのあたりの海外の事例なども学べるのではないかと思います。

障害者の生涯学習の推進・学びの場づくりなどについて、今後、必要なことは何だと思えますか？（自由記述）

・ひとづくり、地域づくり、ボランティア育成（特に、リーダー）とたまり場の確保。障害への理解のすそ野を広げ、障害の有無にかかわらない開かれたダイバーシティ社会の実現。多様な人が多様な学びを自由に選べる、そんな社会になることを夢見ております。

・学校教育として、全国の知的障害の特別支援学校にも専攻科を設けたり、大学でも特別支援教育を受けられるよう（せめてそれぞれの都道府県に1つずつくらいは）、青年期の教育の場を充実させることだと思います。

・環境を整えるための周囲への理解と協力

・職員のコーディネート力

・持続可能な地域づくりに、障害者自身が貢献するという考え方。

・障害者の自立から、社会貢献というより大きな枠にすることで、内容も変わり、障害の有無に関わらない学びに発展できるのではないかと考えています。

・障害者を支援するという場ではなく、多様な人がともに楽しみ学ぶインクルーシブな空間づくり。

①地域の理解と協力者の育成

②現在の特別支援学級に見られる（若年層に多く見られるが）発達障害者の対応

③今後の青年学級に必要なこと（高齢化や年齢層の幅の広がりへの対応）"

・お互い出会う頻度が多いこと。福祉施設など限ら

れた場所だけでなく。その意味で現在のコロナ禍の状況はさらに大きな試練にさらされていると考えます。

・必要性を多くの関係機関の方に知っていただくこと

・当事者たちの声、情報の発信、予算、テーマ型コミュニティを育てていくこと。

・学校における各教科・領域の年間計画への「生涯学習の視点等」の明示。

・プログラムすべてに参加させていただき、第二部は第4分科会に参加させていただきました。大変勉強になりました。

・全体を通して、やはり障害者の生涯学習の場は必要であるということを確認できたのと、ただ、「障害者のための場」は「障害者だけの場」ではなく、多様な方々によってその場が構成されることが大事なのだと学びました。

・福祉、教育だけでなくそれ以外の団体さんや一般市民の方、高校生、大学生などとも一緒に行える仕掛けを考えていく必要があり、関わりのきっかけはボランティアでも下心でもなんでも構わないと思いますが、一度関わってくださった方にも「その場」の楽しさや自分にとっても必要なことなんだという魅力をまずは知ってもらい、また参加したいと思ってもらう必要があると感じました。そのためにはサポーター側が「何のために行っているのか」を常に握りしめて、志をともにすることが大事だと感じました。

・「障害があってもなくても一人ひとりが輝ける場を、地域の方々とともに考える。その中で、地域の方々とともに自然となにかを感じ取り、学び合え、その熱くなった大人たちによって地域が変えられる。」そんな社会が共生社会なのかなと感じました。

・情報へのアクセシビリティを高めていくことが必要と考えます。

・「生きる楽しさ」を感じられるような場づくり。

・予算、ボランティア含めて参加者の参画

・このコンファレンスで紹介された取組を広める。

(そのための先行実践)

・実態調査、ニーズ調査は必須

・先行実践をまねて自前で実践してみる。

・学びの場づくりには、教育と福祉の連携が必要。理想は対等な立場での協働ですが…"

・1 社会への一般化。支援者だけが支えるのでは無く、一般の人が普通に支えられるようになって欲しい。2 移動手段の確保。一部の都市部では公共交通手段があるが、日本のほとんどの地方市・町・村では、障がい者の移動は大変困難である。学びの場があっても、活動の場があっても移動手段が障壁となって参加できない人達がたくさんいる。現在の福祉制度では十分とは言えない。

・それぞれの意識改革と管理している行政の垣根を超えた結び付き

・参加者への周知と運営にかかわる人材の確保、育成、さらに予算の確保だと思います。

・"最後の提案としてあった「青年学級」の名称変更のアイデアはよいと思いました。

・長く活動されてきた方にとって名称変更は抵抗感があると思いますが、馴染みのない者にとっては「歌声喫茶」と同じくらい古い感じがします。通常、何でも横文字にすることには反対派ですが、今回出た案では「インクルーシブカレッジ」がよいと思いました。解釈の幅を広くすることで、活動の自由度を広げることができるように思います。希望や未来という言葉がつく名前も素敵ですが、場合によってはポジティブさの押しつけのニュアンスを感じ、新しい方が入るハードルが上がってしまうかもしれません。

・医療的なケアが必要で、外出が中々出来ない方々は、特別支援学校等を卒業した後に学べる場がほとんどないので、そういった方々が受けられる学びの場づくりも必要だと感じております。

・公民館が、障害者については、障害福祉課の仕事とされている節がありますので、そうではなくて、障害があってもなくても、同じように学びたいし、参加したいと思っていることは、福祉分野の仕事ではなくて、公民館や、スポーツの分野も、障害者のことを考えなければいけないことを理解してほしいと思いま

す。それには、どうしたらよいか、考えて実践が必要と思っています。

- ・学習したいと考えていても、認知度が低くまだまだ多くの人に知られていない事。学習する側の選択肢の少なさ。などです。

- ・今年も大変たくさんの学びをありがとうございました。午前中は私用で参加出来ませんでした。午後の部の参加が出来て良かったです。

- ・ありがとうございました。お疲れ様でした。"

- ・障害者の生涯学習について地域のネットワークをつくり全体を検討できるネットワーク会議で議論すること

- ・知的障害者、精神障害者、身体障害者にかかわらず生涯学習に参加できる環境づくり生涯学習で地域との連携

- ・過去に参加者の固定化は、一部特定の方へのサービス提供と言われたことがありました。私の施設では、青年学級という名称とかけ離れた参加者(参加歴20～30年の学級生)も多く在籍しています。

- ・年齢を重ねるほど、新しいことをはじめるのが難しいと感じています。

- ・ICTの活用により文化芸術やスポーツなどにも広がり期待できると考えています。18歳の卒業後に上手く活用できるように在学中の学校や家庭での取り組みを進めていく必要があると思います。

- ・社会全体の理解。障害者、健常者という違いで考えるのではなく、同じ人間として、「学び」について考えていくことだと思います。

- ・「わ」(話、和、輪、環)

- ・今回は多様な立場の方々の参加で多様なことを知ることができてよかったと思う反面、立場的に同じ者同士のワークセッションなどがあるといいのではと思いました。当事者同士の課題、関わる支援者同士の課題、行政同士での課題をそれぞれのグループで話し合えたりするのもいいかもしれません。

参加者の属性について

参加者数 186

(内訳)

行政関係者(教育委員会) 20

行政関係者(首長部局) 9

学校教育関係者(大学等関係者を除く) 27

大学等関係者 8

公民館等社会教育施設関係者 24

社会福祉法人関係者 10

NPO法人関係者 13

企業関係者 14

保護者団体関係者 2

その他一般参加者 10

運営事務局関係者 22

文部科学省(事務局以外) 7

当事者 3

不明 17

※出席申込名簿を参考に作成した、当日はオンラインのため確認が難しく精緻されていない部分もある。

9 本実践研究事業の成果・効果

9-1 事業の実施成果/アウトプット目標

本事業で得た成果を数値化したものは以下である。

事業	数値化された成果	備考
ウェブ講義	実施講義：50分講義で前期後期15回 前期6タイトル全65講義 後期7タイトル全85講義 ＝合計145講義を実施 延べ受講者数：1000人程度	山本先生の講義は50分で終了せず対話を重視し、2時間以上になる時も4回あった。
オープンキャンパス	第1回：開催時間3時間 参加者：25人+関係者 平均年齢：45歳 アンケート結果：全員が「楽しかった」「勉強になった」 第2回：開催時間3時間	コロナ禍により積極的な周知活動が出来ない中で、みんなの大学校と国分寺市で

	参加者：37人+関係者 平均年齢：42歳 アンケート結果：97%が「楽しかった」「勉強になった」	ある程度のニーズを獲得した
訪問講義	受講対象者：2人 全講義時間：40時間 1人に関わる人員：講師、親、ヘルパーの3人	
重度障害者の生涯学習を支援するフォーラム	フォーラムを支えるネットワークの実践団体数：10 本フォーラムの発表団体数：4 参加者：参加費：無料 オンライン参加者：182名 会場参加者：35名	

本事業の上記の取組においては当然ながら事業を行うにあたっての企画立案、提案、協力の呼びかけ、受講者との対話、講師との対話等多数のプロセスで関係者と関係機関を巻き込むことになり、それ自体が社会への啓もうとなり、障がい者の学びを浸透させるプロセスとなる。この過程で本事業においてはメルマガやインターネットの記事などで適宜、その目標や背景等を発信し、本事業のキーワードで1万人以上のアクセスを得たと考えており、今後もまったく関心のなかった「障がい者の学び」がより社会に位置づけられることにつながり、継続する必要性を考えている。

本年度終了後も受託団体である「みんなの大学校」は継続してより多くの方に「障がい者の学び」を提供し、社会で普通に障害者が学べる環境を整備していく予定であるが、上記で得られた知見をより広く社会に発信していく視点は重要であり、行動の基本としたい。

その上で今後のアウトカム目標として以下を設定したい。本事業の実施から考える展開である。ここから新しい展開も以下記したい。

【本事業のアウトカム目標】

本事業	アウトカム目標
ウェブ講義事業	全国の当事者が結ばれ、各地域の福祉サービス事業者、公民館、さらには引きこもり等福祉や教育でも対応できていない要新車とのアクセスを可能にしながら、必要な人とをオンラインでつなぎ、学べる仕組みを作る。このカリキュラムにおいてはこれまでの実践を基本としながらも障害特性に応じた多様な学びのプログラムを創出し、高等教育機関とも連携しながらカリキュラムを充実させる
訪問講義事業	全国の動きをネットワーク化し、全国どこでも受けられるサービスにする基礎をつくるためのフォーラム開催を支援する。同時に実践として本事業でオープンキャンパスに参加した重度障がい者の学生自らが実行委員となって企画し学び内容を決めるプロセスに関心を持っており、与えられるプログラムではなく、自分で考え運営するスタイルも模索していきたい。具体的には音楽プログラムを企画し、全国の事業所や自宅や病院にいる学びを求める方々とつなげてのカリキュラムを構築していきたい。そのための地域のコーディネーターやボランティア等の担い手育成は必須である。
共生社会コンファレンス	議論された内容や報告を深く理解し、次につながる行動として地域での報告、研究を継続してみんなの大学校を中心に行っていききたい。さらに以下「新規」に記す民間企業への波及を考えての実践を考えていきたい。
新規	これまで4年を通じた事業で少しずつ障害者の学びやインクルーシブな社会のあり方への理解は広がっているが、この議論は、文科省所管であることから自治

	<p>体の教育行政が中心になっている状況から、福祉行政や町づくりや社会の在り方等、広く市民にインクルーシブ認識を広めるために、各地域の社会教育施設を新たな拠点として整備を進めたい。そのためにこれまで行政が取り組んできた活動を礎にしながら民間の力を取り入れて波及効果を拡大させる事業を展開する。この事業における民間業者とは行政の施設を指定管理する民間業者であり、民間の立場からインクルーシブの場を作っていく研究を官民一体となって開始し、具体的な事例を示していきたい。</p>
--	--

みんなの大学校は継続してウェブ講義を行っており、さらに上記の取組を「みんなの大学校」の基本活動として行い、各地域の取組をカバーし、各地域の取組や民間機関をつなげる役割を果たしたい。さらに学習内容などの細部については、以下の項目で開発する。

【学習プログラム講義】

＜ウェブ講義＞

本年度から 50 分の講義はすべて録画しアーカイブで振り返れる仕組みにしており、講師がその講義において障害特性を意識しながら展開し、適切なコミュニケーションの仕方や資料の作り方などの最適化を目指していく。これまでの経験から福祉サービス事業と同様に 1つのプログラムは 50 分を基本にするのが最適であり、引き続き講話は 15 分以内におさえてのアクティブラーニングを心掛ける効用を再確認したい。

また受講者の「わからない」が発生することが日常的な講義で、「わからないことを容認する」「わかる部分だけを評価する」「わからないという概念をつくらない」等、講師の姿勢によって対応は分かれるが、それぞれの個性やスタイルを尊重しながらもどのような対応が適切かも研究する必要がある。わからないまま進まないような工夫、講義毎の障害特性への対応

の蓄積を記録し、アクティブラーニングを通じてどのような「介入」「指導」の方法が有効かを検証したうえで、「ボランティアの役割」「学びに関するコーディネーターの動き方」「サブティーチャー養成」も研究開発していきたい。

＜訪問型学習＞

本事業の中で 2 人の重度障害者の学生は、みんなの大学校が運営する就労継続支援 B 型事業の利用者として登録することが出来た先駆的事例となった。在宅で医療的ケアの合間で週 2 回、2 時間ずつの就労をしながら社会との接点を持つことで、これまでの「学び」だけではなく、「就労」での社会参加を可能にした。これより、重度障がい者がケアをされながらも、「学び」そして「働く」スタイルも当事者本人の希望のもとに構築できることになる、全国の重度障害者にも多くのケーススタディを作り、そして伝える役割を担っていきたい。

【受け手側の反応】

本事業のウェブ型では受講者の 1 人が長年の自己肯定感のなさや引きこもりで、外での活動が 20 年以上出来なくなっていたが、本年度は経済に関する個人研究として、カード会社と携帯電話の関係性のレポートを提出し、卒業論文として「引きこもりの理由」を書いた。人生初めてのレポートに自己肯定感も上がるきっかけとなった。来年以降もみんなの大学校での学びを受ける予定で、「仕事のイメージがわからない」という現状から、少しずつ出来る部分をカリキュラムを通じて認識していく方向にもっていきたい。このように支援が必要な人にとってオンライン上での交流や学びは、心地よい人間関係を維持できることが大きなメリットである。・訪問型のどちらにおいても受講者の学習意欲 レポートやアンケートをもとに「何が学びに必要なか」を検証したい。

【コンテンツの可能性】

今回のウェブ講義とオープンキャンパスにおいて、ウェブ型・招集型ともに、どのような学習コンテンツが有効かを検証することが出来た。場づくりの基本

などは確実に精度を上げており、プログラム内容のラインアップを増やしていくことで多様な学習内容を示したい。さらにコロナ禍で出来なかったレクレーションについては、どんなプログラムが有効かを検討し実践する必要がある。

9-2 目標と方向性

■目標

提供するモデル及びガイドライン

1 カリキュラム案（学習内容の中身）

ーカリキュラムの内容のほか、講義のプロセス、話法、資料提示のほか、学習場のセッティング、サブティーチャーの役割

2 連携の在り方と枠組みのプロセス（学習機会の枠組み）

ー地元自治体や教育機関、NPO、企業団体等との連携に向けた動き方、今後の展開に向けた広報や活動内容

上記1と2の組み合わせによって地域によって学びの場をオンラインとオフラインで確保することが可能になると考えるが、各種の制約等により1をどこでも出来るかは不透明であり、出来る限り1をみんなの大学校で担い、各地域で招集型を展開し、ハイブリットの組み合わせを目指すのが現実的と思われる。

特に今回連携した国分寺市のような伝統的に青年学級を行っている場所とは親和性が高い。社会教育や生涯学習の文脈でインクルーシブの切り口で新しい学びの場を創造するスタイルで普及に臨むのが導入しやすいと思われる。

■目指す方向性

上記の本年度の目標を経て目指す方向性は、全国どこでもウェブにより障害者が学びに参加する基礎を構築し、この学びへのアクセスを保証するために、各自治体や民間団体等が各地域でアクセスの障害になっているものを取り払う努力をしつつ、一人でも多くの学びを実現する。同時にウェブだけでの交流だけではなく、実際にふれあう機会を作る必要性を

共有し、多くの地域で障害者と市民が学びあうフィールドが確保されることが重要である。地域におけるインクルーシブな学びは、ダイバーシティ社会にも対応することになり、共生社会での生きやすさと「幸福」を感じるきっかけとなるはずであることを多くの方と「信じあい」本事業を継続していきたいと考えている。

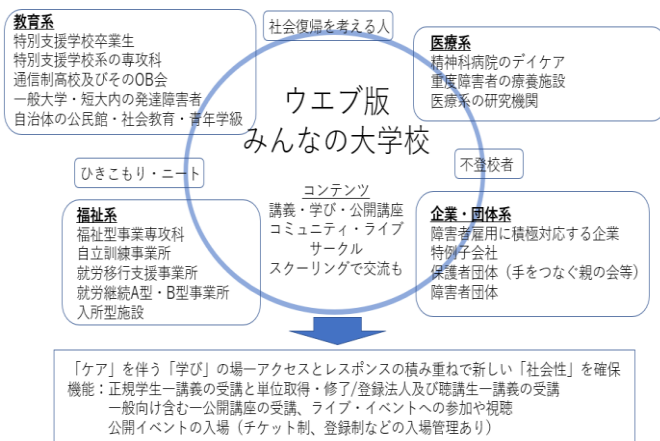
9-3 中長期的に得たい成果／アウトカム目標

ウェブの全国で障害者が自由に学べる、そしてつながれる仕組みを提供し、発展したメディア機器を利用し、障害者が豊かな学びを通じて「オン」「オフ」で人とつながり、それらを支援者も受容しながら全国でネットワーク化させていくことが中長期の目標となる。

その過程では、地域との連携、高等教育機関との交流、地域で活動する各種コミュニティとの融合、就労先の開拓等、予想される社会的反応と予想だにしない社会的反応が生まれ、インクルーシブ社会を形作っていくことになると思う。

これこそが複雑系な社会の中でインクルーシブとダイバーシティが混ざり合い誰もが自分らしく生きていける社会の素地になると信じている。そのために「学び」は必須の要素であり、みんなの大学校は地域のハブとして機能していきたいと考えている。

以下の図はみんなの大学校が考える中長期的な役割であり、医療系、福祉系、様々な障害者の居場所とつながり、学びを提供していくという概念図である。これはみんなの大学校が中心に、という立場ではなく、下支えする存在として学びを支えるというイメージである。



9-4 本委託事業実施により得られた成果の活用

前記 8-3 で示した役割を果たしながら、障害者への学びの提供者として「学び」を案内、当事者や自治体などから声をフィードバック、学びのコンテンツの最適化を常に目指しながら、必要な地域にノウハウを提供したいと考えている。この地域とは自治体やコミュニティである想定であったのが 2021 年段階までであったが、今後の広い展開には民間業者の力も必要との認識を得て、2022 年以降は障がい者と学びの切り口での場づくり、コミュニティ形成、イベントの企画等のノウハウを民間業者と研究しそのプロセス・成果物をオープン化していくこと、同時にみんなの大学校がつながる福祉、行政、個人に対しても積極的に情報提供し、情報のハブとしての機能も拡充していくことを考えている。

2022 年 3 月 7 日

2021 年度文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「障害者の生涯学習に向けたウェブ利用の展開と重度障がい者向けの学習支援」事業の成果報告書

編集：一般社団法人みんなの大学校

一般社団法人みんなの大学校

代表理事 引地達也

185-0011 東京都国分寺市本多 2-1-4



みんなの大学校

Minnano College of Liberal Arts

-学び、で君が花開く-

<https://minnano-daigaku.net/>

